
人を救った偽善者と人を殺した正義の味方

素朴龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人を救った偽善者と人を殺した正義の味方

【Nコード】

N5329T

【作者名】

素朴龍

【あらすじ】

始まりは大胆に、終りは静かにやって来る。

これは、同じ様な理想を持ち、けれども決定的に違う『二人』の物語。

理想の果てに、彼らが見つける物とは何なのか――。

Fate／stay nightとある魔術の禁書目録
ギャグあり、シリアスあり、バトルありのクロスオーバー。

クロスオーバー物のため、独自解釈や設定がありますので、苦手な人はご注意ください。

処女作なので至らないところがありましたら是非ご指摘下さい。

彼の者の物語（前書き）

某掲示板で投稿していましたが、変更してこちらのサイトでやらせて頂きます。

タグにも有りますが、超・不定期連載ですので（笑）

基本的に気分で書きます。

余りにも連載が遅くなるようでしたら、クレーム受け付けます。

彼の者の物語

ある青年がいました。

彼には願いがありました。

それは本当に小さな願いでした。

けれど、その願いさえも、人々が、世界が、叶えてくれる事はありませんでした。

それでも彼は、馬鹿みたいに理想を語って、何度も理想に溺れて、

最後には、いつまでも自分を裏切り続ける人々や世界、

そして、叶う筈のない理想を掲げ続けていた自分に、絶望したのでした。

これより世界は小さな変化を起こす。

その物語が何を引き起こすかは分からず、出演する人物も定かではない。

しかしその変化は、小さな波紋が大きな波紋を作る様に、彼らを、世界を変えていく。

彼らが密接に関わるほど、物語は正史とは大きく異なってくるのだらう。

これは、正義の味方を目指していた青年目指す少年と、
過去に自分を偽善使用フオックスワールドと言っていた少年の物語。

その始まりは、ある人間の気紛れだった。

彼の者の物語（後書き）

小説初執筆、初投稿、サイト初利用です。

至らない部分多々有ると思いますが、宜しく願います。

もし何かありましたら、指摘して頂きたいです。

喜んで修正します。

Prologue? 始まりの電話

——禁書目録 side

私こと、上条当麻は不幸である。

朝から居候にお腹が減ったと振り回され。

やつのことで学校に行けたと思えば、クラスメイト二人からの熱烈な朝の挨拶。

見兼ねた女子生徒がそれに乱入し、担任が来るまで一悶着有り。

4時限目の授業では終了間際に質問をすれば、何が先生の琴線に触れたのか昼の時間を削っての指導。

帰り道で馴染みの女子中学生に絡まれ、その後輩からドロップキックを喰らい。

「そして今に至る…不幸だ……」

そんないつもの、当たり前の日常。いい飽きた独り言。
でも、と言葉を続ける。

「まあ楽しいっちゃあ、楽しい…かな？」

ロシアから帰ってきた後はこんなことがとても眩しく感じられる。
科学魔術両サイドのいがみ合いも一先ずの決着がつき、各々が平和な日々を取り戻しつつあった。

帰って直ぐ争いには巻き込まれたが。

「明日からは旅行だし…ううっ、上条さんは久しぶりに幸せを満喫できそうです」ホロリ

そう、私、上条当麻は明日から旅行なのである。

「つつても絶対能力進化実験の時みたいなもんだけどな」

事の顛末は昨日に始まる。

それは居候との食事のため、野菜炒めを作っている時のことだった。

「ふふふ…料理スキルが最近飛躍的に上がってる気がする…」

などと呟いていると電話の呼び出し音になった。後ろを向き、声をかける。

「インデックスー！ ちょっと手が離せないから出てくれー！」

「わかったんだよー！」

とてとてと軽い音が響く。

余談だが、最近居候がやけに素直になった気がする。…気のせいかな？

「はい、こちらInde…じゃなくて上条です！」

『あれっ、シスターちゃんですかー？ すみませんが上条ちゃんを
お願いしますー』

「あっ、こもえ？ わかったんだよ」

インデックスの言葉に反応し、手を止める。
あっち！油が跳ねた。

一旦調理を終え、電話機の所へ行く。

「あいよ、代わってくれ」

はい、と受話器を渡し、テレビの前に戻る居候さん。

「もしもし、代わりました。先生ですか？」

廊下へ出ながら応答する。

電話先はやはり、我らが子萌ティーチャーである。

『はい、上条ちゃん。実はですねーかくかくしかじかという訳でー』

「……。漫画じゃないんですから、ちゃんと説明してくださいよ……」

『つまりー、上条ちゃん前に海に行きましたよね？』

海？…ああ、あの時の。

残ったのは嫌な思い出が殆どだが。

『その時と同じようなことを上の人から言われちゃいましてですねー』

ふむふむ、話が見えてきた。
つまり、

「用は、また少し『外』に行ってるって事ですか」

また騒動が治まるまでの厄介払いという奴だ。

『物分りがよくて先生助かりますー。あつ、出席日数は心配ないです。公欠なので。行き先のチケットは郵送でそろそろ…』

その時、ガタン、と郵便受けに何かが入る音。

……ナイスタイミング、か？

『ちょうどよかったですね。それではー』ガチャリ

廊下で話していた所為か、受話器の先でも郵便物が投函された音が聞こえていたようだ。

「まさか盗聴されてねえだろうな…」

軽く戸締りを確認しつつ封筒を開くと、二枚のチケットと書類、そして…手袋？

まあ、先ずは行き先の確認である。

「場所はっと…冬木？ 聞いたことないな」

新しく合併でもされたのかな、とか思いつつ次に書類の確認。

「下宿先は下記の住所を訪ねてください、か。旅館じゃないんだな」

まあ統括理事会が指定する辺り、学園都市に理解のある人が住んでいるんだろう、と予想する。

「戦争も終わったし、楽しい旅になる、よな…。っと、悩んでも仕

方が無いな。インデックス、食べるぞー」

詳しい事は今度先生に聞こうと考え、余計な思考を断ち切り夕食を始める。

後から思った。

つくづく人生って何が起こるか分からないもんだな、と。

P r o l o g u e ? 始まりの電話（後書き）

……さて、どうでしょうか。

正直、酷評が来ないかビクビクしております。

でも、酷評して欲しかったりもする。

Mじゃないよ、高みを目指して頑張っているんだよ。

間奏 『人間』との面会

——Interlude in

今日も時間は流れ、一日が終わる。

学園都市といえ、ここは学生が多い第七学区。

学生の大半が眠りに着き、街が殆ど闇に包まれ、景色が黒に染まる。

そんな街の、窓のないビルに設置された生命維持槽で外界を見下ろす、いや、見上げている『人間』がいた。

その男は、

否。

その女は、

否。

『ソレ』は、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも罪人にも見える、形容するなら『人間』というべき存在。

アレイスター・クロウリー。世界最高の魔術師であり世界最高の科学者である者は、そこに逆さまに佇んでいた。

「……………」

「アレイスター」

少年の声が響く。その格好はこの場に相応しいものとは言えなかった。

土御門元春。上条当麻の友人であり、彼が知る中で最も深い闇の中にいる少年である。

「土御門元春か。なんだね、明らかな疑問の表情が見て取れる。答えれる限りなら答えよう」

「白々しい。何故上条当麻をあそこへと送った」

「ふむ。あそこ、とは？」

その表情は崩れず、その口調も変わらなかった。

「恍けるな。あの、冬木とか言う　つい最近現れた土地だ。」

問題無い。

そう言うかの如く、アレイスターは答える。

「ほう、君は既に知っていたのか。文献など色々と改竄がされていた筈だが」

「それが及んでいない書物が発見されただけの話だ。御託はいい、質問に答えろ」

若干の苛立ちを覚えながら応答する土御門。
それに、

「ふむ……。では先ずこちらの質問に答えてもらおう。君はアレが何だか分かっているかい？」

核心を突く質問が、『人間』の口から返ってきた。

——Interlude out

——

——

——

——

間奏 『人間』との面会（後書き）

幕間はこのようにF a t e調で書かせて頂きます。

始めたばかりなのにもう後書きが辛い。

そんなに何行も書かないのに。

漫画家とかの気持ちがあったような気がしますよ。

Prologue? いつもの日常

——Fate side

いつも通りの夕食を開始した後、追加のおかずを忘れていたのに気づき少し台所に行った。
再び食卓に戻る。

「シロウ、おかわりです」

今日もセイバーのお決まりの声が食卓を飾る。うん、平和だ。つい笑みがこぼれる。

「…シロウ?」

「先輩。セイバーさんおかわりって言ってますよ?」

しまった、と桜の声で我に返り、慌てて茶碗を受け取ってご飯を盛る。

「わり、ちょっとボーっとしてた。…ってあれ、イリヤと遠坂は?」

ライダーはバイト、藤ねえは残業、バゼットは就活で遅くなるって聞いたが。

因みにカレンは、数日前に教会の改装が終わり、渋々教会に帰っていった。

「姉さんとイリヤちゃんはさっき深刻な顔して新都の方に行くって言ってましたけど…何かあったんでしょうか?」

深刻な顔：最近はずっと平和で忘れてたけど、そういや俺たちって魔術師だったな。

こんなに平和だといくら鍛錬してるからって忘れるってもんだ。

つと、いかんいかん。

こんなこと言ったら遠坂やセイバーに殺される。

「んー、まあ帰ってきたら聞けるだろ。ほい、セイバー」

「有り難うございます、シロウ」

ぺこりと頭を下げつつ茶碗を受け取るセイバーを眺めつつ、晩飯の後何をするかと考えた。

遠坂も居ないし、久しぶりに一人で鍛錬するか。

それにしても、桜の言っていた「深刻な顔」というのが頭に引っかかっている。

深刻な顔なんて、もしかしたら聖杯戦争以来かもな……。

また変な事にならなきゃ良いんだが……。

P r o l o g u e ? いつもの日常（後書き）

日常なんて書くこと無いよ。

まだ人も少ないしね。

じゃあ登場させろよってな突っ込みはご遠慮ください。

次も間奏です。では↓

間奏 弓兵と魔女二人

——Interlude in

「うそ…こんな事って…」

「まさか並行世界なんて、ってところかしら。リン」

新都で最も高いビル。その屋上に二人の少女の声が響く。
そこに、

「そちらも異変に気づいたようだな」

ふと、男の声が入り込んできた。

「「アーチャー？」」

ふむ、と呟きながら近づきアーチャーと呼ばれた男は言葉を続ける。

「限られた人物、まあ聖杯戦争に関わった者達が全員並行世界に飛ばされたようだ。

物の見た目は全く変わっていないが、『世界』には修正が行われているだろう」

何処か達観したような眼で街を一望する男。

その様子に、突然何かを思いついたような顔で、

「ねえアーチャー。貴方、こんな経験今までにあった？」

赤い少女が尋ねる。

白い方の少女も同じ目線を彼に向けている。

「ない。英霊としての記録にも、『エミヤシロウ』としての記憶にも、な」

そう、と、あからさまに残念がる赤い少女。

それに対し、白い少女はいつものような表情で言う。

「まあこの程度なら、一般人に危害も加えないし知られもしない。秘匿はされてるんだからいいんじゃない？」

「……随分簡単に言うのね、イリヤ」

「だってシロウたちがいなくなるわけじゃないし、正直な所、アインツベルンの本家が消えて清々してるわ」

「「……………」」

呆れる二人を余所に、彼女は微笑み、くると踊り続けながら、

「それに、何だか面白いことが起きる気がするのよね♪」

と、言葉を残す。

そして雪の妖精は、歌を口ずさみながら階段を下りていった。

— I
n
t
e
r
l
u
d
e
o
u
t

—

—

—

—

— P
r
o
l
o
g
u
e
E
n
d

間奏 弓兵と魔女二人（後書き）

序章が終了です。

ペース速いですが、書き貯めあるだけなので勘違いしないで下さい。
無くなると更新スピードが恐ろしい位下がりますので。

次から第一章。

若干修正加えながら投稿してるので、遅くなるかも。

※誤字修正しました

Chapter 1 空港へ行こう!

――禁書目録 side

出発の朝、国内とはいえ旅行は旅行、気は抜けない。

準備は万全……の筈。

イタリアのときの経験を生かして、居候のシスターさんはすでに私服モード。

インデックスにはまだ伝えてないが、旅行中はずっと私服になってもらう予定である。

まさか、あの服で動き回るわけには行かない。

下宿先で洗濯すればいいので、最低限の着替えしか持っていない。

全部自分の鞆の中に入っているので、健康優良男子が服や下着に色々感じてしまうのはご愛嬌なのだ。

「あ、短髪」

「む」

などと考えていると登校途中の御坂と出会った。

またまた余談だが、こちらは居候さんと違い、ロシアから帰って来てから妙に不機嫌である。

何かやったか俺？

朝から一試合ありそうだなあ、早く出て来てよかったなあ、とか思っている、

「なっ！ な、何よその格好!!」

予想とは違う反応。

「何って、今から旅行なんだよ」

今から旅行、と言葉を反芻する御坂。

おー、どんどん顔が真っ赤になっていく。

何興奮してるんだ、と声を掛けると、

「興奮してないっ！　だってその…、ええと…、二人で…旅行なんて……こっ、こっ、」

鶏か、という突っ込みは控えておこう。

「こ?」

「こ、恋人みたいじゃない!!」

がぁー、と叫ぶ御坂とは逆に、

「……………はい?」

俺の思考は停止・凍結した。

「みたいじゃなくて、そうなのかも!」

「「はっ!?!」」

インデックスの馬鹿みたいな発言で思考を取り戻した俺。

そういう誤解を招く、いや誤解しか招かない表現はやめろ!

「…私以外の人もそういうことするなんて……」ゴニョゴニョ

「今のは違うっ！ 冗談だ冗談！ ははっ、結構面白かったよな御坂！？」

パキン、空気が音を立てて崩れた。

……何故だ。空気を直すために取り繕ったのに。

「とうまはどうやってもとうまなんだね…」 「全く…今のは私もどうかと思うわ…」

さて、と呟く二人。

あ、この展開はまずい。

「「覚悟は出来てる？」」

こりゃあ弁解の余地もない、と悟った俺は、

「はい…」

と返事をして、飛行機間に合うかなあなどと考えつつ、

「不幸だ…」

何度目かも分からない、口癖を口にした。

Chapter 1 空港へ行こう! (後書き)

ここから第一章です。

レイアウトとか色々弄って、面白く見えるように工夫しています。
一番最初とか驚いたかもしれませんが。

またちよくちよくやっていくので宜しくです。

Chapter 2 登校、ホームルーム前

——Fate side

「おはよう、衛宮」

登校すると、校門で見慣れた顔に声を掛けられた。

「慎二か。おはよう」

「あつ、兄さん。おはようございます」

「おつ、おはよう、桜」ビクッ

慎二の顔に冷や汗が浮かぶ。

…前にも聞いたが、今や間桐家の実権はほぼ桜にあるらしい。それにしても慎二の反応は過敏すぎないか、と思う。

「じゃあ、また教室でね」タタッ

逃げるように校舎へ入っていく慎二。

俺も桜を怒らせないようにしよう…。

「…くす。兄さんったら可愛い反応するんですね」

「あのー、桜、さん？」

おずおずと尋ねると、桜が振り返った。

「どうしました？　行きましょう、先輩」

…あの邪悪な笑顔は見なかったことにしておこう。
育った環境は違うとはいえ、さすが姉妹。遠坂に通じるものがある
…。

教室へ入り、我等が生徒会長のところへ行く。

「よう、一成」

「む、衛宮か…。おはよう」

「どうした、具合悪そうだな」

「うむ…。キャスターさんの料理、といえば分かるだろう」ドンヨリ

あー…と応答しつつ、まだまだ上達しないかと感傷に浸る。

指導のお陰でだいぶ良くなったと思っていたが、まだまだ人に食べ
させられるレベルじゃなかったらしい。

「あれ程の美人なのに料理が壊滅的とは、最初見たときは全く思わ
なんだ」

人を見かけで判断するみたいで嫌だが、それには賛成だ。
まあ俺の第一印象はローブ羽織った腹黒魔女なんだけど。

「それについてお前のことを口にするに恨めしそうな顔をするのだ
が、心当たりあるか」

「いや、心当たりはないんだが……。夜道は後ろに注意しておこう」
後ろからブスリ、はなさそうだが、もっと酷いことをされそうな気がする。

「っと、そんなことより、今日はもっと面白い話題がある」

一成の口から面白い話題、とな。是非も無く聞こう。

「恐らく生徒で知っているのは今のところ俺位のものだ。何でもな
……明日転校生が来るらしい」

…自分の顔が真剣になるのが分かる。
表情を隠しつつ、

「何処からだ？ 市内か？」

と、質問する。

案の定返ってきた答えは心配していたものになった。

「何でも東京の方かららしい。異文化共有のいい機会になるだろう、
っと、俺としたことが浮かれてしまった様だ。喝」

……昨日夕食後に帰ってきた遠坂の話を出す。

もしこの事態を知っていて来る人間なら、注意して然るべきだろう。
並行世界の魔術師、もしくはそれに準ずる者か？

「……そうか。教えてくれてありがとうな」

「む、広めるのなら止めはしないが、度を過ぎんようにな。騒がれるのは御免だ」

ああ、と言いつつ、遠坂と桜へ昼に屋上に来るよう伝えるために走り出した。

Chapter 2 登校、ホームルーム前（後書き）

士郎、走る。

こうして書いてみると、一成って良いキャラだよなあと思う。
個人的にはhollowの氷室と一成の会話が頭に残ってる。
氷室恋愛探偵は面白かった。

数少ない士郎の立ち絵も見られるし。

※誤字修正しました

Chapter 3 飛行機に乗ろう！

——禁書目録 side

十分以上に及ぶ二人の説教の後、やっと俺にも発言権が与えられた。俺の説得が通じたようで、御坂は割とあっさり許してくれたようだ。行き先を伝えたところ、やはりあいつも聞いたことが無い土地らしい。

「ふ、ふーん。まあ、何か困ったことがあったら連絡しなさいよね」その一言でようやく解放された俺は、インデックスを引っ張り、二十三学区へ急ぐ。予定では十分余裕を持って来ていた筈だが、安心はできない。

経験上、こういうことは余裕を持ってやらないと、後々大変な目に遭うのである。

結果として、離陸には間に合った。

以前のようなハプニングは起きなかったものの、俺の体には噛み傷が一つ。

空港での荷物確認の際、修道服を持って来なかったのがばれてしまったのだ。

言い訳は、忘れてきたの一言。さすがにここから寮へ戻るわけにも行かず、何とか了承を得た。

その代償としての傷が、これである。

「国内だから、さすがに音速旅客機じゃないよな」

「わたしはご飯が後ろに飛ばないなら何でもいいんだよ」

なんというか、単純だな。

「むう、何か失礼な目線を感じるんだよ」

話しながら歩いていると、旅客機が見えてきた。

……あれって、やっぱり音速旅客機だよな？

「あああああ！！ 上条さんは結局あれにしか乗れないんですかそうですか！！」

くそ、学園都市の馬鹿野郎。何か俺に恨みでもあるのか。

知りうる全ての愚痴を叫びながら全身で怒りを表現する俺に、

「大丈夫だよとうま！ 前みたいに別のを使えばいいのかも！」 アセアセ

インデックスが助言する。

なあインデックスさん、前はそれで散々な目に遭ったのに、それを言いますか。

……くっ、不本意だが仕方ない、そうするか———と思った矢先、

「おっと、そうはいかないぜい！ 上やん、禁書目録！」

この場にいるはずが無い、友人の声が聞こえた。

はあ、またお前か。

Chapter 3 飛行機に乗ろう! (後書き)

禁書一カッコいい男こと、土御門登場。

上条さんは飛行機に悪戦苦闘。

……何回乗るんだ、アレに。

禁書さんは機内食が食べれるなら何処でも良いようです。

貴女、本当に女の子ですか？

さて、今回の投稿はここまで。

次はいつになるだろうか。

まあすぐに来ますけど、第一章まで書き溜めてるし。

Chapter 4 少女達との密会

——Fate side

「「外からの転校生？」」

昼休みの屋上。

人が多いはずの場所には人っ子一人居らず、少女らの驚嘆の声だけが響いた。

屋上に先に来ていた桜の様子も元に戻っている。

二番手の俺が入ってくると「先輩！ 何か御用でしょうか！」と真っ赤になっていた。

さすがに驚いたぞ、おい。

理由を聞くと「勘違いするような言い方をする先輩が悪いんです」と怒らせてしまった。

一方、最後に来た遠坂は、今も深刻な様子を崩していない。まあこちらは当然と言ったところだ。

「ああ、一成の話だな。明日には転校して来るらしい」

そう言った後、俺はさっき考えたことを伝えた。

「士郎にしちゃあ悪くない予想ね。今外から来るやつは、十中八九この町の異変に気づいてるわ」

と断言する遠坂。

うん、久しぶりにたくさん喋ったら喉が渴いた。飲み物が欲しい。
帰る時ついでに一成の分も買っていこう。

とそこに、顔を暗くした桜が遠慮がちに質問する。

「また、争いが起きるんでしょうか……」

「心配するな。まだ戦うと決まったわけじゃないだろ」

桜は争うことは好きじゃないからな、時々好戦的になるのは目を瞑るとして。

ここに呼んだのは間違いだったろうか。

「二人とも、甘えないで。戦いになる可能性があるのは否めないわ」

ピシヤリ、と遠坂の声。

でも、と言葉は続けられる。

「積極的に解決のために協力していくつもりよ。せつかくあちらも異変に気づいているんだから。」

それに、転校生、なんて皆に知られる形で使者を送り込んだってことは、あちらもコンタクトを望んでる筈」

その言葉に顔を明るくする桜。

なんだかんだ言っても、やっぱり妹思いなんだよな、遠坂は。

「さて、この話は終わり！　せつかく集まったんだし、一緒にお昼ご飯食べましょう」

パンパンと遠坂が手を叩き、弁当を広げ始める。

「あ、それいいですね、姉さん。さ、先輩も」

「……ごめん。魅力的な提案だけど、今日は一成と昼飯を食べなきゃならん」

キャスターのせいで弁当が無いらしいからな。
頭を下げる。再び頭を上げると、

「「……………」」

ピシッ、と、空気が音を立てて崩れ落ちる。

そこには、あかいあくまと黒い聖母が笑いながら立っていた。
どこからかゴゴゴと効果音が聞こえてくる…。

あ、死んだ。こりゃあ無理だ。

「衛宮くん、行ってらっしゃい」 「先輩、どうぞ、行ってきて下さい」

あれ？と拍子抜けする俺。

しかし、神様はどうやっても俺には微笑んでくれないらしい。

そそくさと屋上から逃げようとする俺の肩が掴まれる。

でも、と二人の声が被り、

「帰ったら、お仕置きね」 「帰ったら、お仕置きですよ」

と、脅迫じみた事を言われた。

願わくば、家にいる誰かが味方になってくれることを祈ろう。

Chapter 4 少女達との密会（後書き）

他愛も無い会話、その一。

ぶっちゃけ場繋ぎです。

お気に入りや観覧数はちよつとずつ増えてるのに、コメントが無い。見てくれるのは嬉しいんですが、批評でもいいんでお願いします。

今夜も投稿しますので、それでは。

Chapter 5 出発前、魔術のお勉強

——禁書目録 side

「土御門…?」

何でお前がここに、という質問は、

「何でお「冬木行き」の旅客機はこれしかないにゃー。

統括理事会の指定だから変更はできないし、変更しようとも思わんにゃー。

何で俺がここに居るかって？ 上やんの付き添いに決まってるぜよ！

あと、ステイルと神裂もいるにゃー。そこんところ、ヨロシク！」

いきなりのマシンガントークで、他の聞きたいことと一緒に全てかき消されてしまった。

しかも新しい疑問まで増やす始末だ。

付き添いって何だ付き添いって。

って、ステイルと神裂？

キヨロキヨロと近くを見渡す。

「あ、いたよ。とうま」

インデックスが指した近くのベンチを見ると、何度顔を合わせたかも覚えていない二人が座っていた。

「上条当麻にインデックス、お久しぶりです」

ぺこり、と擬音が聞こえてきそうな程、丁寧にお辞儀をする神裂。
そしてその隣に、

「やあ、まさかまた君と顔を合わせるなんてね」

あのまま北極海に沈んでいるかと思ったよ、と軽口を叩くステイル。

「…なんでお前らがここに」

先程の疑問は、解決されるどころか一文字多くなって俺の頭に帰ってきやがった。

ステイルの顔に若干の苛立ちと呆れが見える。

「…土御門。上条当麻に説明していなかったな」

明らかな不満の色を示している。

いいだろー、そんなに面倒くさそうな顔するなよー。

「だから今から説明するんだぜい。」

っと、あの旅客機は俺たち以外誰も乗らないから少しくらい待たせてもいい。心配無用だにゃー」

そんなことは微塵も思っていなかった。

うーん、やっぱ何か欠けてるな、俺って。

人への配慮が足りないのか？

だから女の子をすぐに怒らせてしまうのかもしれない。

そんな俺の疑問を無視して、土御門が説明に入る。

「さて、まずは今回の目的だが――」

上やん、今から行く冬木と呼ばれるあの土地。そこにいる数人から見て、俺たちの世界は『並行世界』だ」

ヘイコウセカイ？と頭を傾げる俺。

それに対し、インデックスはとても驚いた顔をしている。

インデックスが驚くなんて、良い思い出が無いんだが。

「『並行世界』って言うのは、この世に存在するあらゆる可能性から枝分かれした世界だよ。

例えば、ここで私が右腕を前に出す。今私は右腕を挙げているけど、それとは別に『左腕を挙げた未来』『両腕を挙げた未来』『どちらも挙げなかった未来』『そもそも私がここにいない未来』……という様に、数多の未来が並行して存在するの。

このそれぞれの未来が『並行世界』って呼ばれるものなんだよ」

腕を上げ下げしながら説明するインデックスの言葉を、必死に理解しようと頭に叩き込む。

なんか授業を受けている気分だ……嫌になってくる。

「で、今回行く冬木って地にいる奴らだが……恐らく今言ったような些細な違いじゃない。

俺たちの世界とは根本から違う、言っちゃ悪いが言わば異世界みたいな所から来た奴らだろう」

異世界、という言葉に身が締まり、背筋が伸びる。

今まで散々振り回されてきたが、異世界人ってのは初めての経験だ。

「そこでの俺たちの目的は、観測。つまり、異世界異文化を体験し

てこいってことだにゃー!」

あ、ついでに出来れば事件の解決も、と付け足す土御門。
…こいつ、真面目になったと思えばいつも通りに戻りやがる。忙しい奴だ。

近くを見れば、ステイルも神裂も呆れている。

説明役はあくまで土御門らしく、口には出さないが。

「第二に、ステイルと神裂が居る理由だが。

これはぶっちゃけ戦闘になるかもしれないってことで、俺が独断でイギリス清教から呼んだって訳だぜい」

なるほど、それなら納得である。

こいつらなら見知った顔だし、心配ないだろう。

…ステイルは一概にそう言い切れない部分もあるが。

最後に、と付け足す土御門。

「手袋、持ってきたかにゃー、上やん？」

「ああ、一緒に入ってたから持ってきたけど、何だこれ？」

奥を見透かせるほど薄いのに、いくら引っ張っても破れず形も変わらない。

喻えるなら手術用の手袋みたいなもので、それが片手分だけ。

「それ、あっちで緊急のとき以外はつけてもらおうぜよ」

???

意味分からん。頭が？だらけになる。

「その右手で何でもかんでもぶち壊されたらたまらんからにゃー」

細かく掘り下げて聞くと、何か大切なものをぶち壊して恨まれ、戦いになるのが怖いから、という事らしい。

「……お前、俺のこと馬鹿にしてるだろ」

「H A H A H A。学園都市製のトンデモ手袋だから、肌触りは最高。そのまま風呂も寝るのもOKだにゃー」

聞き流された。話し聞いてねえなこいつ。

と、そんな俺達を見兼ねて、

「説明も終わりましたし、そろそろ出発しましょう。いくら待たせてもいいとは言え、限度があります」

神裂の至極真つ当な意見が炸裂。

まあ全面的に賛成だ、いいぞもって言ってやれ。特に土御門に。

よし、と呟き、

「じゃあ、行くか」

手袋をはめつつ、俺は皆に声を掛け歩き出した。

Chapter 5 出発前、魔術のお勉強（後書き）

ステイルと神裂が登場。

土御門君はっちゃけてます。いつ怒られるか分かりません。

書き終わって気づいた事

禁書さん殆ど喋ってないよ、どーすんだこれ。

空気と言われても言い返せない始末。

色々考えた結果、並行世界の説明を当てました。（アレは最初土御門の台詞でした）

手袋の件は勘弁してください。

やたらとそげぶされたら困るんで無理矢理考えました。

Chapter 6 一家団欒家族会議（ほぼ女性）

——Fate side

「……はあ」

満身創痍である。

家に帰ると、昼の続きが開始された。

最初のうちは、たまたま居間でくつろいでいたセイバーが味方になってくれた。

しかし、遠坂と桜の今日屋上であつた話を聞くと、

「それは明らかにシロウが悪い。怒られて当たり前です」

と、呆れ混じりにすっぱり意見を変えてしまった。なんですか。

そんなこんなで、こうなっている。

ブリテンの赤き竜、あかいあくま、黒い聖母に太刀打ちできる訳がなく、俺の敗北が決定した。

いや、昼休みの時点で勝敗は見えていたんだが。

説教が酷く、長くなっただけの話だよ……全く……。

その後の鍛錬、魔術指導がいつにも増して過酷だったのは言うまでもない。

とぼとぼ廊下を歩いていると、

「士郎君」

と、後ろから声を掛けられた。
気分を持ち直して振り返ると、

「封筒が届いてますよ」

にっこり顔のバゼットだった。
む、どうやら機嫌が良い様である。

これなら仕事の話題を挙げても殴られる事は無いだろう、と思い、

「お、バゼットか。就活はどうだ？」

先日の事についての話題を出す。

「それが、今日の一次試験に見事合格しました！ 正社員採用は目の前です」

ああ、だから機嫌が良いのか。
この調子で頑張って欲しいものである。

「いい調子だな。よきかなよきかな」

などと談笑しつつ、封筒を受け取る。
差出人は、っと。

「……バゼット」

自然に声が真剣になる。
様子を察してくれたのか、

「夕食の後、ですね。分かりました」

少しの言葉で通じ合う俺達。

藤ねえに知られるわけにはいかない、という理由で、真面目な話は専ら夕食の後に行われる。

まあ、真面目な話なんて久しぶりにも程があるが。

「離れに居る遠坂と桜、ライダーにも伝えておいてくれ。居間に居るセイバーには俺が伝える」

分かりました、と言ってバゼットは踵を返す。

手紙の差出人の欄には名前など無く、差出人——もしくは団体——の住所のみが書き記してあった。

夕食時の空気が重かったのは言うまでも無い。
にも拘らず、「今日は士郎が当番だっけ。この焼き魚美味しいね」と、藤ねえはいつも通りだった。

「じゃ、お姉ちゃん仕事残ってるから帰るよ。ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした。仕事しっかりやれよ、藤ねえ？」

「言われなくてもさっさとやつつけちゃうよ。あと、」

こっちに顔を近づけてくる藤ねえ。内緒話か？

「夕食の空気悪かったけど、あんたまた何かしたのー？」

ぐっ、と固まる。

この虎め、定期的に意外と鋭くなるのは一寸困るぞ。

「…いや、何も」

ふーん、と明らかにこちらを疑う目。

「まあいいけど。鈍感ーとか、朴念仁ーとか、言われないよう気をつけなさいよ？」

「大きなお世話だ。さっさと帰って仕事終わらせてこい」

はいはい、と言って出て行く藤ねえ。

一応あれでも教師なんだよな…。

「さて、居間で作戦会議だな」

久しぶりの緊張感。俺は玄関に背を向け、居間に向かった。

「……で、話を整理すると」

溜息をつきながら話し始める遠坂。

居間には居候の面々に加え、藤ねえと入れ替わりでやってきたイリヤが食卓を囲み座っている。

「あっちには最初から争う気なんて無くて、協力する気しかなかったらしいわね。」

それに、問題解決のためには近くに居た方がずっと便利だからって理由で、」

「俺の家に下宿する…か。はあ、なんというか、理不尽だ」

「良いじゃない、シロウ。楽しくなりそうよ」

気分が良いのか俺の肩に掴まるイリヤ。

お嬢様、楽しいのは良いんですが、食費の問題はどうすりゃ良いんでしょうか。

「そうですよ。イリヤさんったら、ただでさえ家計が火の車なのに、これ以上は無理です」

「サクラの言う通りです。それに、一番家計を苦しめているセイバ―こそ働くべきなのではないですか、士郎」

「む、ライダー、そうしたいのは山々なのですが、この外見では雇ってくれる店舗も少ない。」

それにやっと思ついても、シロウが許可してくれないのです」

「そりゃあ仕方ないわよ、セイバー。士郎があんな店許すわけ無いじゃない」

「ぐっ、それもこれも私が早く定職に就けば解決するのに…」

口々に言う衛宮家の女性たち。

それに、セイバーが働いてくれるというのは嬉しいが、彼女を雇ってくれる店なんてあんな店が殆どである。

コペンハーゲンに頼んでも良いのだが、ネコさんの、俺の女性関係についての煽りが一層酷くなる気がする。

「まあ、そこら辺は後で考えよう。予定だとそろそろ新都に到着してるはずだし、迎えに行かなきゃいかん」

全員に声を掛ける。

何はともあれ、まず会わないと話にもならないからな。

Chapter 6 一家団欒家族会議（ほぼ女性）（後書き）

衛宮家大集合です。

カレンを入れても良いんですが、サーヴァント二人の為（？）に教会に帰ってもらいました。

哀れ、ランサーそしてギルガメッシュ……。

次回から少し戦闘入ります。

期待しないで下さい。

ぼろくそ言われたら泣いちゃいますので。

Chapter 7-1 男との邂逅、戦闘開始の宴

——禁書目録 side

目的地から少し離れた空港に降り、そこからはバスで向かう。

その途中、バスの中で土御門がこんな事を言った。

「上やん。あっちでも学校には通うからにゃー」

また重要な事をさらっと言いやがって。ん…？さてよ、

「ちょっと待て、これ旅行じゃないのか!？」

「だって、学生が昼間堂々と町を歩いて居たら不審だろ？昼はステイル達に任せておけば良いぜよ」

また俺の質問に答えてないが……。

まあいい、仕方ないよ、土御門なもの。

「あっちでも学校なんて……しょうがないけどさ」

「心配するな上やん、俺も通う。それに、新しい土地、新しい学校、これすなわち!」

「な、なんだ……?」

「新しい出会いの場!」

「おお！そう言われると、なんだか俺も希望が湧いてきたぜ！」

「その粹だにゃー上や」「いい加減にしなさい！！」

キーン、と神裂の声が耳に響く。

公共の場なのですからマナーを守りなさいだの、出会いの場とはどういうことですかだの、そもそも学校というのは学び舎であってですねだの、土御門が散々怒られている。

言っておくけど、お前もうるさいぞ、神裂。

何事も無く新都通り抜けることが出来た様である。

「っと、ここを越えれば深山町だぜい」

新都と呼ばれる都会と反対側にある深山町を二分する橋を前に、突然立ち止まる土御門。

ここから深山町を見てみる……が、特に変わった様子は無い。

「そりゃあ、こんなところを夜に歩いて通る人は少ないからにゃー。それに、もう神裂が認識阻害用の結界を張ったし、もうすぐ人通りはゼロになるぜい」

ふと後ろを見ると、神裂がいない。いつの間に……。

ちなみに俺達は今車道の上にいる訳で、っとあぶねー、すぐ近くを車が通るのだ。

車内の人も、俺達を不審な目で見ているに違いない……何か悲しく

なってきた。

「上やん、手袋を外せ。何が起きるか分からないしな」

土御門の声が真剣なものになり、それにつられて俺も肩が強張る。

おう、と応答する俺。

それにしてもこれ、本当に素肌感覚と殆ど同じだ。

学園都市製のトンデモ商品って土御門の説明にも頷ける。

「結界を張り終えました」

「よし、ちょっと集まってくれ」

結界を張り終えて帰ってきた神裂を横目に見て、土御門が全員を集める。

「こちらまあちらも今のところ互いの戦力は分かっていない。

この結界を越えたらいきなり戦闘という可能性も大いにある。戦闘になった場合、ねーちんがまず様子見。その後、準備を終えたステイルが援護へ入る。

状況に応じて俺、上やん、禁書目録も戦闘に参加することになるだろう」

「待て！ その子も参加するのか！？」

「相手の戦術も、技術も、あまつさえどんな攻撃をしてくるかさえ分からないしな。

心配するな。禁書目録が参加するのは、相手が魔術師と分かっているからだ」

危険だが、魔術師相手ならインデックスの存在は大きな武器になる。

「魔術なら任せておいて欲しいんだよ！まあ、知ってるものだったらの話だけど……」

「そう、あっちは並行世界の住人なんだ。見たことも無いようなことをしてくる可能性も否めないな」

そうか、その可能性もあるし、インデックスが役立つかは一概には言えないな。

ステイルはまだ不満があるようだが、一応筋は通っているので渋々口を閉じている。

「さあ、皆。準備は良いか？」

全員が頷くのを確認しようともせず、俺達は橋へ向かって前進し始めた。

……橋を越え、無事に抜けたか、と安堵する俺。
そこへ、

「……来たか」

不意に声がした。聞こえた方を見る。

そこで、服も肌も黒く、髪だけが白い男が、鷹のような目で俺達に殺気を放っていた。

「……お出迎えにしては、少し荒っぽ過ぎるんじゃないかじゃー」

土御門が男に話しかける。

軽口を叩き口調もいつも通りだが、声は真剣だ。

「当たり前だ。むしろ、いきなり切り伏せられなかったただけ有り難いと思え」

土御門の言葉には納得だ。素人の俺にも分かる程の強大な殺気を感じる。

そんな男に、挑発のつもりなのか、

「おいおい、俺たちに喧嘩を売るつもりか？悪いことは言わない、止めといった方が身の為だぜ」

土御門が問いかける。が、

「ふん。君達の方こそ、私に勝てる自信があるというのかね」

どうやら相当な自信があるらしく、男は動じない。

「こっちは五人。しかも、そのうちの一人が聖人だ。お前が勝つ見込みは無いと思うがな」

「セイジン？私には覚えが無い言葉だな。見たところ、その少年と少女二人はあまり戦い慣れていない様だが：

まあいい。そこまで自信があるならかかってこい。軽くあしらって見せよう」

フ、と男が鼻で笑うと、男の殺気が先程の数倍に膨れ上がる。腰が抜けそうになるが、こっちも怖気づいてられない。

「ちい、やはり戦闘になるか……。皆、作戦通りに行くぞ」

「了解しました。では……行きます」

言い終わらないうちに、神裂が稲妻の如き速さで相手に斬りかかる。隣では、勝ったと言わんばかりの眼で相手を見る俺以外の三人。……嫌な予感がするのは俺だけだろうか。

「むっ」

男が眼を見開く。彼の手は未だぶらりと下を向いたままである。

「はあっ!!」

神裂は容赦なく男に迫り刀を振り下ろす。
だが次の瞬間、男の手には、

「「「「…ッ!!?」」」」」

いつの間にか陰陽を模した双剣が握られ、神裂の七天七刀と鏢迫り合いを始めていた。

その様子に、真っ先に反論したのはインデックスだった。

「今の魔術は何？ 確かに魔力は感じたけど、術式が全く分からないんだよ！」

その後も、まさか黄金鍊金^{アルスIIマグナ}?でもそう簡単に使えるものじゃ……。などと予測を色々立てているみたいだが、結果は出ないようだ。

「転移の魔術か？ いや、そんな高度な魔術を易々と使いこなせる

筈が…」

「その子の頭の中の魔道書も意味無し、か…。厄介な敵だね」

言いながらルーンのカードを配置し続けるステイル。

「一つ思いついたんだが、あれが魔術なら俺が行けば良いんじゃないか？」

ぽつと頭に浮かんだ事をそのまま口に出してみる。
しかし直ぐにステイルが口を開く。

「馬鹿言うんじゃない。君はその体一つであの闘いについていけるって言うのかい？」

君では、あの男に触れることすら出来ないだろう」

……腹が立つが、言い返せない。

それ程までに、ここから見る闘い——まだ手の探り合いだが——
——は壮絶だった。

情けないが、俺には勝利を願うことしか出来ない。

「頑張ってくれ、神裂…」

自分でも気づかぬ内に、そんな言葉を発していた。

Chapter 7-1 男との邂逅、戦闘開始の宴（後書き）

アーチャー登場。

紅い外套はまたまた脱いで、マッチョな肉体を晒しています。

そういえば筋肉質な魔術師って禁書にあまりいない。

だからアックアが異質に見えるんですね。

インデックス達が投影魔術に驚いてますが、

こういう魔術は禁書世界には無いという設定にしております。

次の後編はもっと戦闘描写が入ります。

まだ本格的に戦う訳ではないので期待しないで下さい。

Chapter 7-2 その男を追いつめる

——Interlude in

冬木大橋、今は誰も通っていない車道の上。
鈍くも鋭い、剣の音が響いていた。

神裂火織は困惑している。

この男は、どうやって何も無い所から剣を出したのか。
聖人たる私に拮抗する、この男は何者なのか。

なぜこの男は競り合うばかりで、全く攻めて来ようとしなのか。
考えれば考えるだけ思考は泥沼に嵌まっていく。

（考えるな。私が今すべきは目の前の敵を倒すことのみ——！）

「そこっ！」

刀を振りかぶって、もう三度目になる渾身の一撃を叩き込む。
だが男は、陰陽の夫婦剣でそれを防ぎ押し返す。

「ぐっ……！？」

……またこれだ。大小に拘らず隙を見つけては攻撃をしているのに、予想されていたかのようにそれが全て防がれてしまうのだ。

声に苛立ちの色が表れる。

元々彼女は、気の長い方ではない。

ころさず不殺の信念で今まで戦ってきたものの、そんなものが通じる相手ではないらしい。

「むっ」

気配を感じ取ったのか、男が身構える。

「いきます、唯閃——！！」

十字教、仏教、神道それぞれの弱点を補い合うことで、天使をも傷つける絶対の破壊力を生み出す。

天草式十字凄教で学んだ事において、彼女の持つ最大かつ唯一無二の術式。

その切り札を、

「ハッ！！」

有ろう事か、男は正面から受け止めた。

あまつさえ、それを双剣で巧みに受け流したのである。

切り札を防がれた神裂は、戦意を失いかける。

だが、防がれても切り札。

唯閃は確実に、敵の武器を両方とも破壊していた。

「「よし！」」

仲間の少年達からも歓声が上がる。

勝った、神裂は息を整えながら心の中で呟いた。

「降伏しなさい。まさか徒手空拳で戦うわけではないでしょう」

むやみやたらと人を傷つけるのは彼女の信念に反する。

落ち着きを取り戻した神裂は、七天七刀を下ろして男に問いかけた。

「ふむ、君の意見は半分正しい。武器が無くては戦えない。だがな、」

言いながら、男は刃が折れた剣を捨てる。

手から離れたそれは、まるで最初から無かったとでも言うかのように霧散していく。

（魔術で具現化していたのか？という事はまさか……）

神裂火織が再び男に視線を戻すと、その手にはやはり、

「まだ武器が無くなった訳ではないだろう？」

今消えた筈の剣と寸分違わぬ、全く同じ得物が握られていた。
神裂火織はさらに困惑していた――。

――Interlude out

「また、同じ魔術…」

インデックスが呟く。

正直な話、俺は凄く混乱している。

あの男は全く訳が分からない存在だ。

そもそも、生身である神裂と互角以上に戦っていることがおかしい。

「純粋な戦闘力だけなら、神の右席程のものでもないと思うんだがな」

土御門が戦闘の様子を見ながら呟く。

でもどっちにしてもそれって殆ど人間じゃないだろ、アックアみたいに。

「それなんだが、禁書目録。あの男は人間か？」

「うーん…一概には言えないんだけど、あの人からは人間が持つ生命力が感じられないんだよ」

「えっ！？ も、もしかして、幽霊とかその類の奴か……？」

背筋が凍る。

天使の後は幽霊なんて……って、幽霊が怖い訳じゃないぞ？

「それ、案外的を得ている発言だぜい。見てみる、上やん」

土御門の指差した方を見る。

男が使っている武器がどうしたんだよ。

「あの陰陽の双剣、干将・莫耶って言ってな。

今はレプリカを陰陽道の儀式とかに使ったりするんだが、本物は中国史に残る夫婦が作った名剣なんだ。

一度砕けたのにまた出してきたってのには引かかるが、唯閃を受け止めるあの強度は本物に近い」

土御門が言っていることを必死に理解する。
「ってことはつまり？」

「ぶっちゃけあの剣に所縁のある有名人の霊だったりするのかにゃー？」

：もしそうだとしたら全然笑えないぞ、それ。

異世界人に幽霊が闊歩する町なんて、想像したくない。

「そうだよ！ 霊格の高い死者の降霊なんて、そんなの簡単に出来っこないかも！」

ほら、天下のインデックスさんがこう反論してるし、有り得ないって。

しかし、土御門は呆れ顔だ。

「おいおい、二人とも、此処が並行世界だということを忘れてないか？」

俺達の世界の法則なんてまるで通じない可能性だって、無きにしも非ずだ。ほら、あの男が良い例だろ？」

「ぐっ……」「でも……」

言いよどむ俺達二人。

そこに、ステイルが帰って来た。

「君達、お喋りはそこまでだ。ルーンの配置も終わったし、僕も参戦する。」

神裂一人じゃ辛くても、三対一なら勝機はある筈だ」

三対一？誰のことだ。

土御門に「その子を頼む、そいっただけじゃあ心許無いからな」と頼むステイル。

あいつ、去り際に捨て台詞吐いて行きやがった。

戦場を優雅に歩いていくステイル。

そして神裂と睨み合っている男へ近づき、

「名を訊いていなかったね」

と尋ねた。男は構えを崩さず答える。

「……生憎名乗る名は持ち合わせていない。アーチャーとでも言うておこう」

「その名から察するに、貴方は弓使いなのですか？」

神裂が疑問に思うのも無理は無い。

あの男はさっきから剣、しかも二刀流を操っているのだから。

「まあいい。こちら真名を名乗るつもりは無かったし、そっちの

方が都合が良い。

僕の魔法名——と言うより殺し名——は、Fortis93
1だ」

魔法名と聞いて首を傾げる男を余所に、ステイルは戦闘態勢に入る。

「一人じゃ厳しい様だし、遊んでいる時間も無くてね。悪いが、大勢で行かせてもらう」

「フッ、臨む所だ」

言って、男は目を見開き、呪文を唱える相手をその目に捉える。

「——世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ——！！！！」

瞬間、ステイルの胸から巨大な炎の塊が飛び出した。

その炎は、周りの酸素という酸素を巻き込み、炎の巨人を形どっていく。

「『魔女狩りの王』——その意味は、必ず殺す」
インケンティウス

まるで叫び声を発するかのように轟々と燃え盛る巨人は、主人の声と共に標的へ向かっていく。

人よりもかなり大きい一歩で男へと辿り着き、2mは有ろうかという十字架を振り下ろす。

「くっ…！」

男は堪らず双剣でそれを防ぐ。

「干将・莫耶が熔けない…。投影品とはいえ、ランクは低くとも『宝具』という訳か」

何を言っているかは分からないが、男が安堵している様子を見せている。

だが、味方もそう甘くは無かったみたいで、

「はあっ！」

背後へ神裂の追撃。

隣で「行け！神裂！」と土御門が叫んでいる。

が、なんと男は苦しくも身を翻しそれを避けた。

信じられない。あれを避けるなんて、背中に目がついてる様なもんだぞ。

しかもさらに信じがたいことに、その後も男は神業的身体能力と直感で神裂と巨人の攻撃を受け流し、何度も避け続けた。

ああいうのを心眼って言うんだろうな。

こりゃあ土御門の説も否定できなくなってきた。

と、そこへ、

「灰は灰に——塵は塵に————吸血殺しの紅十字…！」

「何だとッ…！」

ステイルの魔術がさらに男へ追い討ちを掛ける。

あ、今やっと三対一の意味が分かった。

イノケンティウスも数の内、って訳か。

アーチャーと名乗った男は神裂とイノケンティウスで手一杯の様に見えるし、これってもしかして勝ったの？なんて思っていると、

「灰は灰に——塵は塵に——！！！」

女の子の高い声が響く。……って女の子？

と、次の瞬間、ステイルの呪文は相殺され、男は巨人と神裂の間から離脱していた。

「「「「「なっ…！」」「」」」」

俺達全員の驚く声が木霊する。

だって、一瞬であそこまで離れた男に対しても驚いたが、その向こう側には、

「お前達が、外からの人間か…」

一人の男と、そいつを囲む沢山の女の子+女の人が立っていたんだから。

Chapter 7-2 その男を追い詰める（後書き）

初めての前後編、終了です。

呪文の女の子は当然遠坂凜。

本編で同じ呪文使ってたのでスタイルのそれと相殺させました。

また、コメント欄で述べましたが、

神裂は身体能力なら並のサーヴァントより若干低い位で扱います。
スタイルマ

聖痕開放で、バーサーカー相手に防衛戦が出来る程になる。

しかし時間制限あり。

という感じでいきたい。

詳しくは後々まとめようと思いますので。

正直戦闘描写が難しい。

そんなに動き自体は無いからこれで良いんでしょうか？

アドバイスお願いします。

Chapter 8 英雄（ヒーロー）の脱落、『死』への恐怖

——Fate side

遠坂を先頭に、町を歩いている途中に感じた大きな魔力の源を辿って行く。

やはりと言うか、そこでは一对多の戦闘が行われていた。相手方はこっちの人数を見て面食らっている。だって、皆ついて行くって聞かなかったし。

それにしても凄い光景である。

あのせくしーなお姉さんと赤毛の神父の格好もそうだが、他三名の少年少女の格好は全然それと釣り合っていない。旅行者か、おい。何よりあの炎の巨人。

魔力の源はこれのようだが、あんな魔術初めて見た。

見たところ、アーチャーはこいつら相手に一人で善戦していたっぽい。

むう……少し悔しい。

「……………」

あっちの人達は、驚きか呆れか、ボーっと突っ立っている。周りを見ると、遠坂らも同じような反応。

沈黙が少しの間世界を支配していた。そこに、

「……くっ！ 『魔女狩りの王』！」

痺れを切らし、真っ先に反抗したのは赤毛の神父だった。
その言葉に反応し、沈黙を守っていた巨人が轟々と暴れだす。
狙われたのは、さっき魔術を使ったため一人前線に出ていた遠坂。
だが、

「えっ、ちょっと——!?」

「凜——!」

アーチャーが巨人の一撃を受け止める。

「っち、貴方には最低限の魔力供給しかしてないし、士郎も頼りになるかどうか分からないし……」

ここは私が行くしかないみたいね。一寸痛い目に遭って貰うわ。
アーチャー、詠唱中の守護、お願い」

「待て待て、先ず話し合いをしようぜ、遠坂」

「病の風は黒く黒く吹きつける——」

「って待った!話を聞け!それは手加減できないマジなヤツだぞ!」

遠坂が宝石とかの道具を使わずに放てる魔術の中で最大の一撃だ。
それは痛い目ってレベルじゃないと思う。

「いいのよ!見たところあの巨人、これ位の大魔術じゃないと消え去らない程の代物っぽいし、アーチャーのお蔭で相手もすっかり警戒して、話し合いが出来る雰囲気じゃないわ」

「で、でも！」

「煩いぞ衛宮士郎。それ以上騒ぐ様なら、貴様から先に切り伏せる」

「士郎は桜達を守る事に専念しなさい。……いくわよ」

：膨大な魔力の奔流に、ゴクリ、と息を吞む。

遠坂が指で鉄砲の形を作って目を瞑り、詠唱を開始する。

「我に一切の慈悲はない。

逆巻く呪いは不可避の災害。

腐朽する己が身で深淵に触れよ。

汝に一切の救いなく。

千切れた己が耳で狂乱の残響を聞け。

来たれ黒炎の渦、極光の終焉。

我が指開くは冥界の門。

覇道の上には何物も不要ず。

眼前の悉くに永劫の滅びを！」

十小節に及ぶ詠唱が終わる。

チラリと後ろを見ると、イリヤが嫌そうな顔をしていた。

「遠坂流ガンド術最終奥義！！ 終末の死風——！！！！」

轟音と共に、フィンの一撃をも軽く超える瞬間契約のガンドが放たれた。
デンカウント

想像を絶する呪いの塊が相手を襲う。

ガンドが炎の巨人に激突。

徐々に消えつつありながらも、あれは巨大な呪いを受け止めている……が、やはり長くは持たない様子だ。

「おい！逃げろ！アレを喰らったら一溜まりも無いぞ！」

堪らずあの一団に叫ぶ。

アレを喰らってどうなるかなんて分かり切っている事だ。

おそらく一週間は寝込み続ける事になるだろう。

しかし、

「上やん！ お前の出番だ！！」

巨人が消え去りそうになってきた途端である。

金髪の少年が突然叫んだ。

その声に反応して、上やんと呼ばれたツンツン頭の方の少年が前に出る。

「なっ！」

思わず声が出る。巨人のお蔭で威力は下がっているものの、信用は出来ない。

続けて、危ない、と叫ぼうとしたが、爆音が響いた。

「間に合わなかった……！」

煙が晴れていく。そこには少年達が倒れている……筈だった。

「ふう、危ねえ……」

何故ならそこには、右手を前に突き出した少年が無傷で立っていた

のだから。

「……何が起きたのかは分からないけど、とりあえずあいつがあつちのジョーカーみたいね」

遠坂が呟く。

「ふむ……。膨大な魔力で相殺した、という訳では無さそうだな」
いきなりアーチャーが後ろに現れる。
こいつはこいつで、いつの間にか戦線から離脱したようだ。

「ええ。あいつからは魔力の欠片も感じない。けど、魔術師じゃないとは言え魔力が全くないってのも変な話ね」

「フ、ならばひっ捕らえて話を聞き出すまで。凜、一つ賭けに出るでしょう」

ピクリ、と遠坂が反応する。難しい顔のあいつに対し、弓兵は余裕の表情を浮かべている。

「……聞かせなさい」

賭けつてのは心配だが、あの二人に任せておけば問題無い……と思う。

まさか客に最初から怪我させるみたいな真似はしないだろうし。

見ると、なんと炎の巨人が復活していた。

……やばい。

何がやばいって、あの凄くでかい魔術を右手で打ち消してからというものの、完全に敵の俺を見る眼つきが変わったという事がだ。次は本気で潰しにかかって来るかもしれない。

「よかったぜい、上やん。牽制になったから、相手も魔術じゃ迂闊に攻撃してこれない筈だ」

土御門の言葉がいつにも増して信用できない。

「それって本当——がつ!!?」

言葉を全て言い終わる前の事だった。

鳩尾に強烈な痛み、同時に肺の息が全て外に押し出される。

声が出せない。息が吸えない。

苦しい、苦しい、苦しい——!

土御門め、こんな状況で嘘をつく事もないだろう。

なんとか逃げる為、申し訳程度に敵から遠ざかろうとすると、

「はっ!」

ガン、という大きな音が響く。

誰かが何かで叩かれた音。

その誰かが俺で、何かが硬い棒みたいな物と気づいたのは、殴られてから少し後の事だった。

「ぐっ——は、あ——!」

声は出た、けれど言葉を発せる訳じゃない。

視界がぐらんぐらんと廻る。

俺が廻っているのか、それとも世界が廻っているのか。そんな判断もつかない。

あれ、おかしいな。

頭を叩かれるなんて、何度も経験した事がある筈なのに。

「上やん!!」「とうま!!」

誰かの声が響く。

懐かしい。何故? 何度も会ってたじゃないか。

……駄目だな。どうやら頭もちゃんと回っていないみたいだ。

「あ……え……?」

不思議と痛みは無い。

世界が廻って、嫌みたいに眩しくて、愛おしかった。

一瞬の筈なのに、何分にも何十分にも思える、そんな永遠。

薄れていく意識。

それに対して思考は段々クリアになっていく。

「君達の負けだ。…少しの間眠っている」

——ああ、俺は、俺達は、負けたのか。

なら、起きても無駄。

少し、少しだけなら良いだろう。

最近色々あったし、ちょっと眠ろうか――。

――Interlude in

敵の攻撃に対応できたのは、奇しくも上条当麻だけだった。
彼を下された土御門達には、もう勝ち目らしいものすら見つからない。

最終手段だが、あとは一つしかこの場を逃れる策は無い。

「分かった、俺達の負けだ。だから、ここは退いてくれないか。奇襲なんて真似は勿論しない」

「断る。この世界は我々の世界ではない事はそちらも知っているだろう。こちらには君達から情報を聞き出す権利がある。

それこそ、そこに転がっている男を人質にとっても、な」

（交渉は決裂、か）

どうしたものか、と土御門が思っていると、神裂火織がいつの間にか何処からか戻ってきた。

彼女がその脇に抱えているのは、

「とうまー!!」

意識を失っている上条当麻だった。

「アーチャー！何やってるのよ！」

「……すまん。今のは完全に私の落ち度だ」

これで、上条当麻が人質にされるといふ事態は未然に防ぐ事が出来た。

あとは、ここから一旦退却する事だ。

「そっちが退かないのならば、私達が退かせて貰います」

「まあそういうこった。こっちは一人が戦闘不能なのに、わざわざ敵地に取り込んでまで話をする程馬鹿じゃないさ。」

日を改めて話をしよう。場所や時間はこっちが指定する」

さっきより強い口調で土御門が話すと、弓兵の表情は呆れを通り越して笑いに変わった。

「……一体何が可笑しいんだい、アーチャーとやら」

苛立ちを隠そうともせずスタイルが言う。

隣では、『魔女狩りの王』が今にもアーチャーに襲い掛かろうとしている。

「フツ、もしかして君達はこれを交渉か何かだと思っているのか？
だとしたらそれは全くの間違いだよ。これは、闘いの勝者が敗者に下す、命令だ」

明らかな挑発の言葉。
それに、

「……っ、この——！」

神裂が激昂し、再び襲い掛かろうとする。

「待つんだ、ねーちん！」

「止まりなさい」「ッ!？」

瞬間、空気が凍った。

その言葉は、年端もいかない少女の物の筈なのに、千年もの時代を生き続けた魔女の様に、冷淡で、残酷だった。

「イリヤ…？」

赤毛の少年にイリヤと呼ばれた少女は、静かに神裂に近づいていく。

「貴方達に選択の余地は無いの。こちらの要求に応じる事しか出来ない。」

それとも、此処でミンチになる事を御所望かしら？」

「舐めた口を————、え………？」

そこには何も無い、誰も居ない筈なのに。

「そんな…」「嘘だろ………？」「この、化け物が……！」

今まで感じていた殺気なんて、生温い。

殺す、なんてよく聞く言葉は、何の意味も無い。

ソレは、命の温かみなんて、微塵も感じさせてくれない。

「う…あ、あ…!!」

「■■■■■■■■■■——!?!?!?!」

『死』。

それを司るかのような巨大過ぎる象徴が、そこに居た。

——I n t e r l u d e o u t

——

——

——

——

Chapter 8 英雄（ヒーロー）の脱落 『死』への恐怖（後書き）

バーサーカーの登場に禁書勢ガクブルです。

そりゃああんなのが突然目の前に現れたら当然です。

自分なら即効気絶する自信があります。

：ところで、上条さんは気絶中。

バーサーカーと上条さんが再び出会うのはいつになるのか、反応が楽しみだ。

AAは画面幅の問題で載せられませんでした、残念。

因みに。

あの凜の詠唱、自分のオリジナルではありません。

今はプリズマイリヤ連載している、ひろやまひろし先生が同人で載せていた物をお借りしました。

興味があったら調べてください。

一応、出典元載せて引用してるから大丈夫……だよな？

※加筆、修正しました。

Chapter 9 こっちとあっち比べまShow\at. 冬木

——Fate side

……さて、今俺は自分の家に居る。

帰り道、お互いに警戒しながらも少しだけ話した結果、相手方はこっちが泊まる先の人だとは知らなかったらしい。

その事を知った途端、金髪の少年の態度はガラリと変わった。

それに気絶とは言え、人に危害を加えたアーチャーの行動はいただけない。

しかしあいつに抗議をしても聞く訳が無い。どうせ皮肉を言われて話を逸らされるだけなので、俺から最初に謝っておいた。

そして、俺の家なう。

藤ねえを除く夕食時のメンバー+αに客の五人（うち二人の格好はどう見ても不審者）が食卓を囲んでいる。

アーチャーは鎧こそ身に着けていないものの気を抜いておらず、客の一人は気絶状態からまだ目を覚まさない、イリヤに至ってはしてやったりという顔だ。

……この状況を俺にどうしろと？

「とりあえず、お茶淹れよう、お茶」

こんな空気耐えられない！

と、声を大にして叫びたいが、後が怖いので止めておく。

「遠坂、頼むよ」

声を潜めて話す。

「仕方ないわね……。家主なんだからもう一寸しゃきっとしたらどうなのよ」

心の中ですまんと頭を下げ謝りつつ、茶を淹れる。

「じゃあ、先ず自己紹介をお願いしようかしら」

「人に名を尋ねる時は先ず自分から名乗るのが礼儀だと思うんだけどね」

「……」カチン

駄目だ、キレルな遠坂！

ここでキレたら色々と駄目になるぞ！

「まあいい……。僕はイギリス清教『必要悪の教会』ネセサリウス所属の魔術師、ステイルⅡマグヌスだ」

「同じく、聖人の神裂火織です」

「私も『必要悪の教会』所属の禁書目録インデックスなんだよ」

「右に同じく魔術師、さらに学園都市のスパイもやってる土御門元春だにゃー。」

で、こっちで伸びてるのが学園都市の学生で俺のクラスメイト、上条当麻ぜよ」

個性溢れる挨拶をしてくれたお客の面々。

それにしても色々突っ込みたい事がある、いや、そればかりだ。

「じゃあ順に質問をしてい「そっちも名乗るのが筋ってもんじゃないか？」」イラッ

：そろそろ爆発しそうだぞ。どうする、俺？

衛宮士郎、ここで遠坂を止められるのは君しかない！

早速で全員分のお茶を置き、元の位置に戻り、声を発する。

「じ、じゃあ俺からしていくぞ。衛宮士郎、一応魔術師やってる」

「私の名前は間桐桜です。一応、魔術師です」

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ。魔術師……とも言えるのかしら？」

「バゼット・フラガ・マクレミッツ。元、魔術協会の『執行者』です」

「遠坂凜、同じく魔術師よ。この土地の管理者セカンドオーナーでもあるわ。

で、こっちの女の子がセイバー、眼鏡掛けてるのがライダー、この憎ったらしい男がアーチャーよ」

「セイバーです」

「同じく、ライダーです」

「……」

自己紹介は終わったし、これで難癖もつけられないだろう。
これ以上遠坂のご機嫌取りは御免だぞ。

「えー、さっきはすみません。初見で警戒していたとは言え、いきなり戦闘を始めてしまって。そちらの彼も、大丈夫かしら？」

「ああ、戦闘になるのは予想していたし」

「この男なら大丈夫だよ。こんな事、こいつにとって日常茶飯事の筈だしね」

日常茶飯事って、どんな生活を送ってるんだ、上条君は。
と、申し訳無さそうにしていた遠坂がキリッと顔色を変える。

「じゃあ先ず、貴方達の事から聞いていくわ。さっきイギリス清教徒って言ってたけど、そっちの世界の宗教はどうなってるの？」

「どうなっているのか、とは？」

際どい格好をしたお姉さんが答える。

うーん、ライダーと同じ意味で危ない……。

下手すりゃ下着が見えてもおかしくないぞ、特にパンツ。

「だって、教会じゃ魔術はタブーじゃない。何故貴方達は教会の魔術師として活動してるのよ」

「……確かに、その通りです。しかし、教会として魔術を狩る為には同じ魔術を使う必要がある、というのが私達の組織の始まりなのです。」

その為の禁書目録、その為の必要悪の教会です」

「その、禁書目録、ってのは何なんだ？その女の子に何の関係が？」
インデックス。目次って意味だし、偽名だと思ったが。

「彼女は完全記憶能力というものを持っていて、私達の世界の魔道書十万三千冊を全て暗記しているのです。故に『魔道図書館』。

それが、この世の穢れを一手に引き受けるシスター、Index—Librorum—Prohibitorumです」

「……ふむ」

と、アーチャー。

俺には少しぶっ飛び過ぎて逆に信じられない。

十万三千冊全てを暗記て、子供か。

ふと横を見ると、あからさまに驚いているのは俺と桜ぐらいのものだった。なんでさ。

「OK、次の質問よ。神裂さん、聖人ってのは？」

「それには先ずこっちの世界の『偶像の理論』を説明しないとにや」

と、横から土御門と名乗った金髪の少年が割り込んできた。

「簡単に言うと、姿や役割が似ているもの同士は互いに影響しあい、性質・状態・能力などが似るというこっちの世界の魔術理論だ。

で、聖人ってのが世界に二十人といない、生まれた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間のこと。まあ、俗に言う

聖痕ってやつだ。

その為、さっき説明した偶像の理論で、『神の力の一端』をその身に宿することができるって仕組みなんだにゃー」

なるほど。

だからサーヴァントと競える程の身体能力があった訳だな。

「……う、うーん」

話し込んでいる内に気絶から目覚めたみたいだ。

「って、何処だ此処!？」ガバッ

「気がついたようね」

「上条君だったか？此処は、冬木市深山町の俺の家だ。君は其処の男に気絶させられて、此処まで連れてこられたって事だ」

「ほう、もう少し寝ているかと思ったが、どうやらそこまで体も弱くない様だな」

確かに。

良い感じに入ったもんなー、あれ。

「すまんにゃー、上やん。俺達負けちゃったぜよ」

げらげらと笑う土御門。

全然謝ってないだろ、それ。

見ると、上条も動揺しながらも呆れている様子。

「あ、そういや上条君には自己紹介がまだだったな。俺は衛宮士郎。一応、魔術師だ」

一人だけ名前が分からないなんて不公平だしな。先程やった挨拶を再び繰り返す。

あれ？何処かから溜息が聞こえたような気が。

「じゃあ、話を戻すけど」

キリッと言でも立てたように遠坂が口調を戻す。

「次は学園都市について説明してもらおうわ。スパイなんてやってるみたいだし、普通の場所じゃないと思うけど」

「まあ、そっちの世界じゃ信じられないかもしれない。簡単に説明すると、脳の開発、ぶっちゃけた話、人工的な超能力の開発を行っている都市だ」

「はあ！！？」

「うわっ！ビックリした！どうしたんだ遠坂」

超能力かあ。スターゲート計画なんてのもあった位だし、並行世界じゃ珍しくないのかね。

と、俺は思ったんだが、どうですか遠坂師匠。

「え、ああ、そうだった……。並行世界の人達だったわね……。ごめ

ん」

「姉さん……うっかりで叫ぶのは止めてください」

妹に呆れられてるぞ、遠坂。

「なあ、その遠坂さんはなんでそんなに驚いたんだ？」

上条が問いかける。

「こっちの世界じゃ、超能力っていうのは人工的に開発できるものじゃないのよ。」

諸説あるけど、魔術のような『神秘』や混血のような『魔』の力と違って、ヒトがヒトのまま持つ特異能力。

先天的な資質が不可欠で、基本的に一代限りの突然変異って言われてるわ」

「へえ」

俺はてっきり、手から火とか電気とか水とか出す様な在り来たりなもんで、魔術があるから超能力も普通に存在するんだと思ってたなあ。

それにしても遠坂っていろんな事知ってるよな。
素直に関心する。

ふと、疑問が湧いた。知的好奇心という奴だ。

「ところで、其処の学生だって言う二人は何か能力持ってるのか？」

「おう、超能力には強度があつて、0から5までレベル分けされてるんだにゃー。俺はレベル0の肉体再生オートリバース」

「俺は何の能力もないんだが、右手に変な力なら持つてるぞ」

「あー、さっき私の魔術を打ち消した奴ね。どんな仕組みなの？」

イマジンブレイカー

「幻想殺しって言って、異能の力なら、魔術も、超能力も、神様の奇跡でさえなんでも打ち消しちゃうらしい」

なにそれすごい。

さっきのもその右手があつたからか。

流石にこれには驚いたようだ、皆の口があんぐり開いている。

「また凄いヤツが来たものね……」

「まだまだ謎が多い力らしいんだが……俺にもよく分からん」

「ふふっ何それ。自分の力が分からないなんて、一昔前の士郎みた
いね」

「お前、馬鹿にしてるだろ」

「うん、してるわよ」

うわ、普通に同意してきやがったこいつ。

「なあ、そっちの世界の魔術のことも教えてくれよ。特に、そこの
アーチャーって人。」

うちのインデックスが不思議な顔して見てたぞ。どんな魔術使っ

「たんだ？」

「……良いのか、凜？」

「んー、こっちばかり訊くのもなんだし、共同戦線張るなら情報開示は必要不可欠なんだから良いんじゃない？」

「……全く、思考と行動が直結していると言うか、単純と言うか……。まあいい」

縁側に立っていたアーチャーが居間に入ってくる。

しかし座ることはなく、そのままゆっくりとした口調で話し始めた。

「私のこれは『投影』、グラデーション・エアというものだ。文字通り、体内の魔力で自身の思い描くイメージを練り上げ、物質として具現化するといった魔術」

「へー、随分と便利な魔術だにゃー」

「しかし、あくまでもそれは幻想。この世には元々存在し得ないものだ。その存在を許さない『世界』からの修正により、長く留めておく事は難しいし、頭に投影する物のイメージが完璧に無いといけない」

「まあ、当然だよな。デメリットが無いと便利すぎる魔術だし」

「尤も、私のこれは少し特殊でね。根源というか、私の魔術属性が『剣』だからなのか、剣以外の物を投影しようとする莫大な魔力を消費するんだ」

……なるほど、俺には出来そうにない、分かり易い説明だった。

「へえ、そっちにはそんな魔術があるんだね」

インデックスがキラキラと目を輝かせている。

何と言うか、あの子からは小動物的なイメージが湧いてくる。

いま、インデックスちゃんという言葉が頭を過ぎったが……無視しておこう。

「俺は初め空間転移でも使っているのかと思ったぜい」

「空間転移なら使える奴はいるぞ「士郎!!!」　　ッつー!」

……もしかして俺まずい事言ったのか？

「残念ながら今のは聞かせてもらったよ、遠坂凜。君の態度から察するに色々隠しているみたいだね」

「……この、あほ士郎!　へっぽこ!　鈍感!　朴念仁!　すつとこどっこい!」

「すすすまん遠坂!!!」

「「「「ハア……」」」」

「ま、最初っから素直に話すとは思ってないぜい?　じゃ、ぼちぼち訊いていく。用意は良いか」

また軽率な事をしてしまった。

アーメン、懺悔しようにも頭に浮かぶのは外道マーボーに毒舌シス

ターと胸糞悪い奴ばかりだが。

「え？え？」

視界の端では、状況を飲み込めない上条がキョロキョロと慌てていた。

Chapter 9 こっちとあっち比べまShow~at. 冬木（後書き）

説明パートです。

士郎君、藤ねえの言った通りになってしまいました。

でも凜の士郎に対する暴言は、書いてて心癒されるのは何故だろう。
きっと愛ですよ、愛。

……なんかすいません。

次回も説明パート。

次の次で第一章は終わりです。

つまり書き溜めていない、殆ど。

予告していた通り不定期になると思いますので、ご了承願います。
では。

※加筆、修正加えました。

Chapter 10 同盟、長い一日の終わり

——禁書目録 side

少し和やかだった空気が一変するのが分かる。

テーブルを挟んだ向こうでは士郎さんがセイバーさんに慰められていた。

「先ずは、この町にいる巨大な魔力の持ち主の事を教えて貰うか」

「……ええ」

「予め訊いておく。そのアーチャー、セイバー、ライダー達も含め『ヒトならざるモノ』がこの町に蔓延っているな？」

「いいわ。じゃあ、事の顛末、『聖杯戦争』の事について話しているかしら」

セイハイセンソウ？聞き覚えの無い言葉だ。

思考を廻らせていると、イリヤスフィールと名乗っていた女の子が背筋を伸ばし、話に入ってきた。

「それについては私が」

自己紹介の時とは違う、冷淡な声。

その声で、彼女は事の真実について告げた。

「あらゆる願いを叶えるという聖杯を手に入れる為、選ばれた七人の魔術師と召喚された七騎のサーヴァントが他の六組と殺し合う、

約二百年前から冬木市で何度か行われていた大儀式。それが、『聖杯戦争』よ」

「なんだって!？」

異世界じゃそんな事が行われているのか。

これは由々しき事態だ。

「安心して、上条君。もう原因となる大聖杯は破壊済だから、もう行われる事は無いわ」

「って、ならいいんだよ」

何か思いっきり肩透かしを喰らった感じだ。

「この為召喚されたサーヴァントが、その三人含めて合計八人。主に従う僕で在りながら、使い魔としては最高ランクで魔術より上にある別格。」

その正体は英霊、生前は英雄であった者達。人の身でありながら、人々に讃え祀られ精霊の域にまで達した存在よ」

……え?この人って達英雄だったの?
キリストとかみたいな?

「いや、流石にそれ位の神霊クラスは呼び出せないわよ?」

遠坂さんの突っ込みが入る。

って、どっちにしても変わらないでしょ、それ。

俺の中じゃ英雄にランクなんて無いし。

「……やっぱり、俺の予想は当たってたみたいだにゃー」

「死者の、しかも霊格の高い英霊の蘇生なんて……信じられないんだよ」

「いや、この場合は蘇生というより、期間限定の降霊じゃないかな？」

「先程見えた時に感じた物の理由はこれだったのですね……」

「いやいや皆さん、何でそんなに冷静に対応してるんでせうか。何か俺は凄過ぎてもうついていけませんよ。」

「だから言っただろ、上やん。ここは並行世界なんだから、何が起きてても不思議じゃないって」

「そんな事より、その御三方。特に、アーチャーと名乗った彼の者の『真名』を聞かせてほしいのですが」

神裂さん、俺の疑問はそんな事で済みますのですね……。

「いや、まだ教えられないわ」

「なんでさ。確かにそいつの名前を教えるのは気が引けるけど」

士郎さんが尋ねる。

それを無視して話を続ける遠坂さん。無視というより全員に忠告をするような感じだ。

「共同戦線を張るのは良いし、同盟を結ぶのにも賛成よ。双方が望

んでいるんだし、問題無いと思うわ。でも、情報を全て渡してしまう訳にはいかないの。

今はいつ対立するか分からない関係だし、そっちも言う気は無い様ね？」

なるほど、納得。あっちにも遠坂さんっていう土御門みたいに頭の切れる奴がいるんだな。

ただし、こっちのは少し馬鹿、あっちのは少しドジっぽいが。

……いや、何かどっちも少しじゃなく、凄くな気がするぞ。

「サーヴァントのクラスは、セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの七騎だから、それぞれの特徴とかから推理してみれば良いんじゃないかしら？」

イリヤスフィールちゃんが神裂に忠告する。

この子も土御門と同じで、コロコロと態度が変わるみたいだ。

「む……。まあ、頭には入れておきましょう」

「ふん、まあ今日はこの辺にしておこう。聞きたい事が出てきたらまた聞くよ」

思いつ切り捨て台詞じゃないか、それ。

ステイルは自分で気付いてないみたいだが、思いつきり小物っぽい。

「他の人も、良いかしら？」

「ああ、問題ない。じゃあ、仕事の話は終わりだ。……さて、早速だが言いたい事が一つある」

何だいきなり？土御門の不敵な笑みを見て首を傾げる。

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、いや……イリヤちゃん」

「な、何よ」ビクッ

「こっちにいる間、毎日俺と一緒に寝て下さ」「土御門」すいませんなんでもないです」

「どうもすみません。何かあったら俺がぶん殴りますんで」

「もしかしくなくても、土御門さん、変態さんですね」

あの優しそうな桜さんにまで言われる始末。
完全に第一印象からアウトだろ、これ。

そんな風に騒いでいる時にいつの間にか居なくなっていた様で、件のサーヴァント三人とバゼットさんが廊下から居間に入ってきた。

「士郎君、和室に布団を敷き終わりました。個室にも布団を一組運んでおきましたので」

「お、ありがとう、バゼット。よし、とりあえず遅いし、今日はこの辺で止めておこう。男三人は俺の部屋の近くの和室で、神裂さんとインデックスちゃんには個室用意したからな、悪いが二人で使ってくれ。うちの朝食は早いから、夜更かしはするなよ？」

士郎さんが声を掛ける。

流石、どこか頼りなく見えてもしっかり皆をまとめられる人らしい。

「あ、神裂さん？頼みたい事があるんだけど」

思いついたように遠坂さんが声を上げる。

「何でしょうか」

「さっきの聖人についての話を聞くに、魔力は有り余っているのかしら？」

「はい、そうですね。一人では一生使い切れない程です」

「なら、セイバーとアーチャーの二人に魔力を分けてくれないかしら？パスを繋いで、二人の出力を上げたいんだけど」

「分かりました。事件解決の為なら出来る限り協力しましょう。先に部屋へ行っておいってください、インデックス」

「うん。ありがとう、しろろ。とうまたちもまた明日なんだよ、お休みなさい」

そう言って、二人は遠坂さん達に連れられて居間を出て行った。

「じゃ、俺達も寝るとしようか。士郎さん、案内お願いします」

「はは、敬語は止めてくれよ。俺も呼び捨てで呼ぶから、お前らも俺達の事同じように呼んでくれ」

「いやいや、年上ですし。こいつらはぜったい使わなさそうですけど」

うん、思った通りの良い人だし、俺とも気が合いそうだ。
こっちでの生活の不安も少し薄れていくってもんだ。

「つと、ここだここ。押入れとかも勝手に使ってくれて構わないかな。じゃ、お休み」

襖を閉める士郎さん。

さてと、荷物を置いてさっさと寝よう。

「はあ、今日は疲れたよ。僕はまだまだ不安だけど、土御門はどうだい？」

「んー、まあ俺はこの世界をしばらく楽しむって決めてるし、問題ないぜよ。上やんは？」

「俺も、とりあえず仲間とは認めてくれたし、まあなる様になるだろ。それよりステイル、お前まさかそのまま寝る気か？」

「心配には及ばないよ。僕は慣れているしね」

「味方ながら天晴れぜよ。俺は舞夏枕持参だぜい？」

「……なんだい、それは」「夏の字が余計だな」

「この枕が一番舞夏の膝枕の感覚に近いんだにゃー！これで何処で寝るのも少しは心が落ち着くってもんだぜよ！」

「「……………」」

そんな会話をしながら、俺達は冬木で最初の眠りに就いた。

学園都市で、とある計画が進行している事も知らず……。

Chapter 10 同盟、長い一日の終わり（後書き）

という訳で、一日が無事終了しました。

次の話で第一章は終了で、日常編の第二章に入ります。

全編コメディ、ちよっとだけシリアスでいく予定。

説明もちよいちよい入れていくので、くどくなるのは勘弁してね？

神裂さんはセイバー、アーチャーと魔力供給のラインを繋いでおります。

流石にSEXはいけないんで、方法はレアルタ・ヌア準拠です。それでも脱ぐんですがね。

第一章、最後はあの人達が登場します。

間奏 舞台裏での登場準備

——Interlude in

学園都市の夜更け。

そこに少女の声が静かに響く。

まだ年端も行かない少女、それも四人の声が。

「準備できた？」

「はい、大体は。あ、ホテルに泊まるんですからネット環境はありますよね？」

「いくら『外』のホテルって言ってもそれ位はあるでしょ」

「遊びに行くならもっと早く言ってくださいよー。外出届出すのって凄く面倒なんですから」

「ごめんね、あっち行ったらなんでも好きなお菓子とか奢るからさ」

「あ、私もお願いします」

「仕方ないわねー。……あ、戻ってきたみたいよ、黒子」

「お姉さま、一通り手続きは完了しましたの♪」

「え？寮監は大丈夫だったの？」

「なんとあの鬼寮監からも許可が下りましたの！これで何も後ろめたい事無く、みんなで旅行に行く事ができますの」

「へーありがと、じゃあぼちぼち行きますか」

「ふふふ、お姉さまと旅行なんてとても心が躍りますのー！」

「はいはいありがとね」

「ところで、御坂さん。この冬木って所、何しに行くんですか？」

「第三次世界大戦が終わって間もないのに、ですしね」

「いや、特に意味は無いわよ？強いて言うとしたの息抜き」

「息抜きで旅行、しかも四人分自費負担……。もうあたし御坂さんと結婚しようかなー」

「……佐天さん？いくらあなたでも許しませんの」

「ちよっ、やだなあ、冗談ですって。あたしは初春をお嫁に貰うんですから……。えいつ」

「ひゃっ！止めてくださいよ！全く、佐天さんときたらいつもいつも……」

「おい、三人とも、バス来たわよー」

「「はーい（ですの）♪」「」

これは偶然か、それとも必然か。

とある少年を追って、少女は学園都市^{うち}を出る。

役者なのかも、舞台裏なのかも、観客なのかも分からぬ内に、無謀にも彼女達四人は舞台に立とうとしている。

この夜。

少年達が知らぬ間に、四人の少女達が、異なる世界の物語に介入した。

— I n t e r l u d e o u t

間奏 舞台裏での登場準備（後書き）

祝、第一章終了！

最後は短かったけど、おつかれっしたー！

超電磁砲組が介入しますよー。

もっともシリアスに絡む事は殆ど無く、登場回はそこまで多くはない予定ですが。

御坂はどうなるか分かりませんが。

第二章は全編コメディと予告しましたが、早速最初からシリアスが入ります。

それではー。

Chapter 1 夢と理想

—— 神裂火織 side

夢を見ている。

「何故夢だと分かったのか」と聞かれれば、「私の事ではない夢だからだ」と答えるだろう、有り得ないが。

それ程までに、私からは懸け離れた人の話だった。

……いや、あながちそうとも言切れないかもしれないが。

それは、ある男の物語。

悲しい悲しい、無念の男の物語だ——。

かつて託された、生涯憧れ恋焦がれた夢があった。

誰だって一度は願った事があるであろう、子供じみた夢。

けれど、それを目指し続ければ、迷う事無く一心にそれを追い続けられ、いつか世界の全てを救う事が出来る。

……そう思っていたのだった。

それが、彼の理想。

……いつからだろうか、夢が理想に変わったのは。

全てを救えば、その為に犠牲になった自分も救われると思い込んでいた。

たった一人で、実際に戦争を止めた事もあった。

たった一人で、世界の危機というものを未然に防いだ事もあった。

利益や見返りなどいらない。

人々の感謝、笑顔があれば充分だった。

——しかし。

常に傾いていく天秤。

選ばざるを得ない犠牲という選択肢。

理想に正しくあることに遠ざかる、かつて想い描いた理想郷。アヴァロン

現実、世界はそれ程までに残酷だった。

——彼はそれ程までに愚かだった。

最後に彼は、かつて自分が救った人間に裏切られた。

取り零しがありながらも多くの命を救ったのに、何の見返りも求めなかった彼を不気味に思ったのか、争いの元凶という罪を民衆に被せられたのだ。

……別に、彼らを恨んでいる訳ではなかった。

憎しみを籠めて彼を見る民衆に抗おうともせず、僅か数十年の彼の短い生涯は、死刑台の上にて終わりを告げた。

だが、もっと多くの人々を救う為に彼が生前交わした、『世界』との契約。

死後を『世界』に預け大きな力を得た彼は、人類の守護精霊、抑止カウの守護者として、死後も人々を救う。ン

一を犠牲にして十を救い、十を犠牲にして百を救い、百を犠牲にして千を救っていた生前とは違い、今度は眼に映るもの全てを救える。

……筈だった。

それは、彼の死後も変わる事はなかった。

世界の為、人類の為という名目の下、彼は人類を虐殺し続ける。

そんな矛盾。

人を救う為に人を堕とし、人を生かす為に人を殺した。

何故だ。オレは、人を救う正義の味方ではなかったのか。

あの契約がオレに与えてくれたのは、人を救う力ではなかったのか。

断じて、こんな世界を夢見ていた訳ではない。

結局彼は、実は誰一人として救えなかったのかもしれない。

彼は思った。

借り物の理想、偽者の末路が、これなのか――。

彼は、そんな愚かな自分が、酷く滑稽に思えた。

何処で、間違えたのだろう。

何処で、想ってしまったのだろう。

何処で――。

――そうだ。

始まりの想い、それが生まれた場所、あの時の誓いこそが全ての過ち。

それは絶対に叶う筈が無い理想。

それなのに――また、願ってしまった。

――、……ならば。

奇跡というものが存在するのならば、過去を消し去る事も可能だろうか。

ふと彼は、かつて乗り越えた、愛した少女達と戦った数日間の戦争を思い浮かべていた。

あの時は、争いを止めようと必死で戦い、聖杯しやうひんに対しては微塵も興味など湧かなかった。
アレなら、もしくは。

……そうして彼は、この愚かな人生を、自身の手で消そうと思った。

……目が覚める。

こちらで初めての朝は、夢見がとても悪かった。

寝心地が悪いとか、枕が駄目だとかという理由ではない。

私はその程度の事でとやかく言う人間ではないし、むしろ寝心地は良い方だと思う。

それに、いつもは野宿なのだ。

「昨日の事に、何か関係あるのでしょうか……」

昨日の事とは、遠坂凜の部屋での儀式である。

魔力を持て余しているのなら、という事でパスを繋いだのだが……。

確かに成功はした。

現に魔力が大きく流れていつているのが自分でも分かる。

流れていってると言っても魔力の大本は自分の物ではないので、大した影響は無いが。

「しかし、何と言うか……。その、いくら彼が霊体の身とはいえ、男性の前で布一枚になったのは……」

自分の体に、アーチャーと名乗った男は興味無さげだったが。寧ろ、セイバーという少女の方が興味津々だった様だ……。何故だろう。

あの視線は、シスターアンジェレネ達から向けられる視線に似通ったものがある。

「まあ良いでしょう。インデックス、朝ですよ」

「んー……。もうちょっと……」

時刻は午前六時前。

何はともあれ、まずは朝食を摂りましょう。

Chapter 1 夢と理想（後書き）

第二章、始動。

夢は勿論、英霊エミヤです。

今後もセイバーの夢もあるかもしれない。

……あくまで、かもですから。

ところで朝食の時間が分からなかったので六時前としましたが、誰か分かる人いませんか？

ではでは。

※加筆、修正しました。

Chapter 2 おかしな日常の始まり

——衛宮士郎 side

衛宮家の朝は早い。

……何だか自分で言ってる恥ずかしいな。

実際、朝早く起きて朝食を作るのが、俺の一日で最初の仕事だ。今日からはまた居候が増えたし、多めにしないとな。

あ、バイトしてくれる様に頼むのも忘れないようにしておこう。

仕込みを終えようとしていた所に、桜が起きてきた。

今日は張り切ってたかなり早起きしたからな。

客もいるいつもの様に土蔵で起こされる訳にはいかない。

「先輩、お早うございます。準備もう終わりましたか？」

「お早う桜。あと盛り付けだけだから、手伝ってくれないか」

「はい、喜んで」

「全員揃ったな。じゃ、いただきます」

いただきます、といつもよりさらに大きく声が響く。

「わ、凄いんだよろう！ここまでの料理は生まれてはじめてかも

「！」

「うおー、すげえ……。俺ももしかしたらこれははじめてかも知れん」

「舞夏の手料理に勝るとも劣らぬこの味……。貴様、何者ぜよ」

「ん、和食は好きではないが、これはいけるね。なかなかの物だよ」

「凄い……。この魚の焼き加減といい、御飯の炊き方、この煮付けの食感の素晴らしさ……。絶品です」

「いやー、そこまで言われると照れるな。作った甲斐があるよ」

「フ、まだまだだな、衛宮士郎。私ならこの味噌汁をもっとコク深く作れるぞ」

最後の奴は無視するとして、正直外国人が多いし心配だったが、一安心だ。

どうやらこっちの国にも慣れているらしい。

そりゃあここまで日本語話せるんだし、当たり前かも知れないが。

「じゃあ、今日の夕食はちょうど私が当番だし、中華を食べましょう。腕によりを掛けて作るから期待しときなさい！」

「ほんと！？頑張ってほしいかも、りん！」「中華か……。僕には未知の領域だね」

「こら、食事中に声を荒げてはいけません、インデックス。貴女も英国人なら、気品を持ちなさい」

「う、わかったんだよ」

ぴしゃり、とセイバーが叱る。

しかし怒ってはいないようだ。何だかんだ言って、あいつも食卓を
楽しんでいるのだろう。

「あ、上条さん。お醤油とつてくれませんか？」

「あいよ、っと。どうぞー、桜さん」

「イリヤちゃん、今日はいつにも増してプリティーだにゃー」

「そう？ やっぱり見る人を見ると違うのね。今日のカットはいつも
と一寸違うの」

「……カオリ。貴女、小さい女の子の事をどう思いますか？」

「はい？ 何の事でしょうか、ライダー」

皆打ち解けられるか心配だったが、杞憂だったらしい。

これならギクシヤクして空気が重くなる事はあまり無さそうだな。

問題は学校。

行くのは上条と土御門の二人らしいが……。

上手く3－AもしくはCになって欲しいものだ。

今朝、藤ねえは来なかった。

朝は忙しいし、夕飯に来たら上条達の事を説明しないとな。

「しろう、おかわり!」「シロウ、おかわりです」

「はいよ、って、」

抜かった、ご飯がもう無い。

——上条当麻 side

登校し、職員室へ行く。

「君達が転校生? 長くは居ないらしいし、もう直ぐ冬休みに入っちゃうけど、よろしくね?」

人当たりの良さそうな、虎柄の服を着た教師に話しかけられた。子萌先生と同じで、生徒と仲良くなりそうな人である。

「じゃあクラスに案内するから。葛木先生、お願いします」

「分かりました。上条、土御門、こちらだ」

今度は怖そうな先生。

『今』の上条当麻にとって転校——あくまで、モドキだが——は初めての経験である。

ワクワクドキドキのクラス発表は……!?

学園都市側からの手回しにより、俺達は士郎さん達と同じクラスに在籍する事になった。

結果として、俺は3－A、土御門が3－Cになった訳で。どうやら俺の行っていた高校とは進み具合が違ったらしく、授業が全く理解できない、という事態は免れた。……良かった。

まあそれでも、赤点なのだが。

厳格そうな担任の葛木先生の紹介が終わり、休み時間になる。

「じゃ、これから宜しくお願いします。上条君」

「こちらこそ、遠坂さん」

にっこりと微笑む遠坂さん。

この時、俺はこの人が猫を被っているなんて知る由も無い訳で、

「って、何か昨日と全然感じが違うんだが……」

「そりゃあ、こいつ公衆の面前じゃ優等生演じてるしな。な？ 遠坂」

さり気無くカミングアウトしてきた人がいた。

周りに殆ど人が居ないから良いものの、他人の秘密を暴露って。

「あたしは美綴綾子。こいつの悪友だ」

あははは、と笑いながら遠坂さんの肩をポンポン叩いている。

うん、この人も喧嘩売ったらいけないタイプだ。

「で、あたしがその友人、冬木の黒豹こと蒔寺楓だ！」

「同じく氷室鐘。そしてこっちの子が、」

「三枝由紀香です。よろしくね、上条君」

おお、何だいきなり。

女の子がこんなに集まってくるとは……土御門の言葉もあながち間違いないんじゃない。

その代わり、周りの目線が痛い。

「で、そこな上条某」

「ん？なんだ、氷室さん」

「今の会話から察するに、遠坂嬢と既に知り合いらしいな」

「「ッ!？」」

しまった。まさか最初からやらかしちまうとは……。

遠坂さんに睨まれる。

原因はそっちにもあると思うんですがどうでしょう。

「おお、確かに。へー、やるねえ遠坂」

「ちよっ、あの、遠坂さんとは別にそういう関係じゃ」

だが、俺の応答も虚しく、誤解は全く解けない。

「遠坂アアア!ー! お前衛宮だけじゃ飽き足らず、新しい男にまで手エ出したのか! 結局いつもあたし達には回って来ないのかア!」

「あら、蒔寺さん。男性とお付き合いが出来ないのはあなた自身に

原因があるのではないですか？

それに美綴さんも、衛宮くんとはそういった関係ではありませんと何度言ったら分かるんです」

うわ、ひどい。少し地が出てるんじゃないか？

「なんだとオオ！？もう我慢ならん、遠坂、男一人紹介しろ！」

「お、やるか蒔寺！？」

「いくぞ遠坂！ついでに美綴もだ！！」

「ちょ、ちょっ蒔ちゃん！」「落ち着け、蒔の字」

暴れる蒔寺さんを抑える二人、そこに参戦しようとする美綴さん。こんな奴らが居るクラスでこれから過ごすと思うと、胃が痛くなる。

と、話をしていると予鈴が鳴った。

「はいはい、授業始まるぞー。席に着きなさい」

さっきの明るい女教師を一瞥し、渋々帰って行く面々（二人）。もしかして、まだ喧嘩し足りないんですかあんな達は……。

Chapter 2 おかしな日常の始まり（後書き）

三人娘と美綴登場。

クラス分けは自分の独断でやりました。

だって、逆だと何か面白くなさそう。

慎二と土御門の絡みは……ご想像にお任せします。

暇が出来たら書くかもしれない。

うーん、やっぱりシリアスよりコメディのほうが書いてる方も楽しいし楽だね。

シリアスは良いけど、疲れるのよ、これがまた。

※加筆修正加えました。

Chapter 3 金ぴかと少女達・山門にて、侍二人

——御坂美琴 side

着いた。あの時初めて耳にした冬木という町。
ここに、あいつがいる。

まあ今回はただの観光なんだけど。

……本当よ？

「いや、観光地じゃないと聞いて少し不安だったんですが、結構いい町じゃないですかっ」

「はあ、やっと着きましたの……」

「そうですねー。でも、御坂さんがついてなかったらもっと遅くなつてたと思いますよ？」

そう、何故かみんな一緒に地図で確認した筈の冬木市への道程を、私だけしか見つける事が出来なかったのだ。

あと、あの橋を渡る時に近くを歩いていた白髪の外人から感じた殺気(?)。

勘違いだと嬉しいのだが……。

「ささ、早くホテルにチェックインして出発しましょう！」

「そうね、ここから歩いて行くのもなんだし、タクシー拾いましょう」

私達が予約したホテルは新都にあるホテル。

『外』の町だからあまり期待してなかったけど、なかなかの設備。近くには娯楽施設やショッピングモールもあるし、いい所だ。

「あ、きましたよ。すみませーん」

さて、まずはやることやらなきやいけない。

この町でさっさとあいつにも会って、休暇を楽しむ事にしよう。

「こんにちは、お姉さん方」

と、思っていた矢先、声を掛けられた。
振り向くとそこには、

「わ、外人さんですね」「へー、結構可愛くない？」

金髪に紅い眼をした、いかにもお金持ちそうな少年が立っていた。
うわ、凄く目立ちそう。

「失礼だけど、何処かであった事があるかしら、僕？」

「いえいえ、初対面ですよ。この姿を含めて」

……？

何を言っているのか分からない。

「そんなことよりお姉さん方、貴方達って外の人間ですよね」

この少年が言う『外』とは冬木の外という意味だろうか。

人間とか変な表現を使ってくるし、さっきから色々怪しい少年だ。

「ええ、そうですね。それが何か？」

黒子も不審に思ったらしく、口調が強くなる。

それに対し、少年はさっきからずっとニコニコ顔だ。

……やはり怪しい。

「いや、特に用はありませんよ。強いて言うなら、『僕』が暇を持て余していたのでちょうどいい機会だと思っただけです」

「」「は？」「」

こちらの疑問には答えず、それでは、と言って去っていく少年。何だったんだろう、と私達は首を傾げる。

……この時はまだ知らなかった。

あの少年の正体が、あんな金ぴか馬鹿だったなんて。

——衛宮士郎 side

学校が終わる。

放課後、俺達は街の探索へ行く。

組み合わせは、

「案内は面倒だし、どうせなら全員で回りましょう」

という遠坂の独断で決まった。

上条君と士郎と一緒にすると危なっかしい、私と士郎だとそもそも協力の意味が無い、だそうだ。

むう、至極全うな意見だが、他の意図がしないでもない。
気のせいであって欲しいのだが。

「さて、先ずは何処に行こうか衛宮」

「ん、じゃあ近場で。深山町でも大きな霊脈がある柳洞寺辺りに
も行くか」

「まあ妥当ね」

「霊地は把握しておきたいしにゃー」

行き先は決定、早速出発だ。

「待ってください」

「「うおっ!!」」

声を上げたのは俺と上条、現れたのは神裂さん。
なんだって俺達二人の間に現れるんだこの人は。
何かライダーに通じるものがあるぞ。

「とうまー!置いてくなんてひどいんだよー!」

「全く、この子を守るのは誰なのか忘れたか、上条当麻」

色々お越しになられた様子。
まるでサーカスだよ、この騒がしさ。

「という訳で、御同行させて頂いても宜しいでしょうか」

何がという訳なのかは分からないが、問題は無いだろう。

「分かったから、あんまり騒ぐな三人とも」

こうして、七人の騒がしい集団が、冬木を闊歩するのだった。

頼むから、学校の連中には見つかりませんように。
特にその三人。

そんな訳で柳洞寺、キャスターの根城にやって来た。

「これは……霊格の高い土地なのもあるが、漂う雰囲気は普通じゃないね」

「ここには強力な結界が張ってあってね。人間には影響しないんだけど、サーヴァントにとっては文字通り鬼門。入り口は正門のみなんだけど、一度乗り越えてしまえば影響は無いわ」

「喋ってないで行こうぜー」

俺と上条が歩き始め、その後を追う様に残りがついて来る。
そろそろ着くな、と思った矢先に、

「あい待たれよ、そこな坊主」

と、上条に声が掛かった。

「よう、小次郎」

戦いをしに来た訳でもないし、こっちからは気軽に声を掛ける。

「む、セイバーの所の坊主にアーチャーの所の小娘か。そいつらは誰だ？」

「あ、サムライが居るんだよ」

「かくかくしかじかという訳であ、これが」

「ふむ、まるまるうまうまという事だな。キャスターならいつもの様に境内に居るであろう」

物分りが良くて助かる。

「……あの、失礼ですが」

「何かな、お嬢さん」

「お、お嬢さん……？ いえ、そうではなく、貴方は先程小次郎と……？」

あ、そういう俺が言っちゃったか。

……俺の危険度センサーがどんどん上がっていく。
馬鹿な、背後から怒り度数80%だと！？くそっ、故障してやがる！
まあ実際は壊れてなくて痛い目見るのがお約束だし、俺も例外じゃないのだが。

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。これで満足かな？」

「ほ、本当ですか！？あ、会えて光栄です！」

おー、あの神裂さんが目に見えて喜んでいる。

これって結構珍しい事なんじゃないか？

まあ日本人なら巖流島の決闘は知ってるだろうし、俺も初めは驚いたけど。

「佐々木小次郎かー。あ、でも実在の人物じゃないって聞いたことがあるんだが、何で？」

上条が質問する。

うむ、前も思ったが、中々核心を突いた質問をしてくる奴だ。

じゃあ遠坂先生、お願いしまーす。

はいはい、と言って遠坂は眼鏡を掛ける。

俺にとってはもうお馴染みだが、他の面子には驚かれている。

「何も実在の人物だけが英霊になる訳じゃないの。英雄ってのは人々の信仰によって形作られるからね」

「それに、この体は名も無き亡霊が佐々木小次郎の殻を被ったもの。厳密には彼とは違う存在だ」

「そ、そうなのですか……」

今度は明らかに残念がっている神裂さん。

何となくライダーに似ていると思ひ込んでいたから、感情表現が結

構豊かなのは驚きだ。

そこに、

「何の騒ぎなの、アサシン！」

声を荒げて、お山の魔女がやってきた。

Chapter 3 金ぴかと少女達・山門にて、侍二人（後書き）

ってな訳で、柳洞寺にやって来ました。

教会と迷ったのですが、先ず近場に行かせることにしました。

その為、先ず我様には御坂達と会ってもらう事に。

ランサーは今日は協会で花に水やっています。

日本人なら佐々木小次郎は誰でも知ってるし、神裂にこんな反応をとらせて見ました。

そして、さり気にお嬢さんと呼ばれて喜んでる神裂。

流石アサシン、女を見る目はなかなかある……のか？

さらに残念なお知らせ。

とうとう書き溜めが無くなった……。

覚悟は出来たか？

貴様らが見るのは超不定期更新、気分の局地。

さあ、心して掛かって来い——！

Chapter 4 挨拶廻り／＼カンザキズヘヴン／

——上条当麻 side

奥から出てきたのは綺麗な女の人だった。

形容するならお淑やかというべき容貌で、立ち振る舞いからそれが見て取れる。

「む、やってきたか。キャスター、客人だ」

「よう、お邪魔してる」

士郎さんが軽く手を挙げて挨拶をする。

キャスターと呼ばれているという事は、この人もサーヴァントなのだろう。

逆に、そうじゃない方が変だというもの。

それ位キャスターさんは時代錯誤な格好をしているのだ。

正直言おう……ローブは無いだろ、ローブは。

「あらその子達……」

「あ、やっぱ気づいた？キャスターだったら、と思ったけど、予想通りね」

「ええ。御機嫌よう、並行世界からのお客さん。葛木メディアと申します」

羽織っていたローブを取り、深々と礼をするキャスターさん。

予想通り、かなりの美女。そして……耳が尖ってる？
それにその名前。どう考えてもおかしいだろ。

「ちょっ！あんたまで真名曝してどうすんのよ！」

哀れ、遠坂さん。

彼女の思惑がどんどんぶち壊されていく。

「ほら、明らかに警戒してるじゃない。あなたの名前はそれ程有名なの。日本じゃ大した事無い知名度かもしれないけど、凄く有名なんだから！」

見ると、俺を除く四人皆が警戒している。

え、そんなに有名？俺知らないぜ。

「メディア、ギリシア神話に登場するコルキスの王女。女神に呪いを掛けられ、一人の英雄の男のために国を裏切り、弟を殺し、父を騙し、無知な三人の姫をも見殺しにした。最後には男にも裏切られた彼女は彼に復讐し、魔女としてギリシャを彷徨い続けた。

……諸説あるけど、これがメディア、裏切りの魔女の人生なんだよ」

この人がかつてそんな事を……？

にわかには信じられない。

「その名で呼ばないで頂戴。可愛らしいお嬢さん、貴女の知識は正しいわ。確かに私は魔女で、多くの人々に憎まれた。でもね、今私は幸せなの。愛する夫と共に過ごす、今この時が私の夢だった。

貴女達が私をどう思おうと知りはない。けど、私の夢を邪魔するなら、容赦なく消すわ。それだけは覚えておきなさい？」

キャスターさんが睨む。

……美人が凄むと恐いのは何度も経験したが、未だかつてここまで
の威圧感があつただろうか。いや、ない（反語）。

「だ、そうだ。こいつもなんだかんだ言つて優しい奴だから、普通
に接してやってくれ」

「坊や、それはどういう意味かしら……？」

「クッ、違う。セイバーの所の小僧もなかなか言うではないか」
今度は笑いながら何か黒いオーラを出してらっしゃる始末。
いつも思うが、よくあんな器用な表情が出来るよな、女の人って。

「はいはい、コントはそこまでよ。キャスター、今回は挨拶に来た
だけだから。一成に会つても面倒だし、そろそろお暇させてもら
うわ」

「しっしっ、ならさっさと行きなさい。宗一郎様の御夕飯が遅れる
じゃない」

邪魔者扱いされる俺達。

さっきとは打って変わって新妻ぶりを披露するキャスターさんだっ
た。

「じゃ、行くか。またな、小次郎」

「うむ、達者でな。時にそこのお嬢さん」

「私でしょうか？」

「見た所、なかなか腕が立つ様だ。暇があれば手合わせなど如何かな？」

「良いのですか！？是非とも伺わせて頂きます！」

目をキラキラと輝かせる神裂。

何かこっちに來てから妙に元氣である様子。

「ねーちん、良い感じにはっちゃけてるにゃー」

そこ、人の事言えません。

——衛宮士郎 side

えー、レポーター衛宮士郎です。

今度は毒舌シスターが住んでいる教会にやって來ました。

「何一人で喋ってるんだにゃー？」

いや、なんか。

っーか、こう明るく行かないと気分が上がらないっっーか。

「そんな嫌な場所なんでせうか……。上条さんのテンションも乗じて駄々下がりです事よ……。？」

何か肌にピリピリ來るものがあるな、とか呟いている上条。

インデックスちゃんから一寸聞いた話によると、あいつは俗に言う『不幸體質』らしい。

……分かる。分かるぞその感じ！

「士郎君はここが嫌いなのですか？」

「当たり前です。こんな所に来て気分が上がる奴は総じて頭がおかしい」

該当する人物を頭に思い浮かべない様に気を付けながら、神裂さんに話す。

「あら、それは誰の事かしら？」

———ッ！！？

なんという緊張感、まさにラスボスに向かう勇者のそれに近い！

「全く、前提が騒がしいから来てみれば……。何ですかこれは、衛宮士郎」

「や、やあ。奇遇だなカレン……」

「教会に来たのに奇遇も何ありません。どうせお客に説明だけして誰にも会わずに帰ってやろうという魂胆だったのでしょうか？」

ニヤリと嫌な微笑みを浮かべるカレン。
くそう、何もかもお見通しかよ。

「あれ？カレンも知ってたの？」

「ええ、当然。あのでしゃばりが元の姿で、熱心に何をしてるかと言きだしてみれば……。という訳です」

「あのでしゃばり、とは？」

「私のサーヴァントです。会えば分かりますよ、あれは唯の馬鹿です」

もしくはそれに準ずる何かですね、と付け足すカレン。

「……サーヴァントって英霊なんだよね、りん？」

「……ええ。でもカレンの意見はご尤もよ。会えば分かるわ」

哀れギルガメッシュ、しかしお前に同情してやる義理は無い。
子供バージョンなら話は別だが。

「そういえば」

何だ？カレンにしては珍しい表情をする。

「あの阿呆が会ったのは貴方達以外のお客でしたね」

「「「「「え!？」」「」「」」」」」

どういう事だ、そんなの聞いてないぞ！

見ると、遠坂も同じ反応。

知らなかったのは皆同じらしく、ぶつぶつと呟きが聞こえてくる。
突然の話し合いが始まった。

「アレイスターの意向とは考え難い。想像出来るのは魔術サイド側
だろう」

と、土御門。

「僕達が独断で行ったのも、イギリス清教内でどうに知られてる筈だし、最大主教からの命令で来た奴とも思えないね」

と、ステイル。

「ロシア成教もこういう事にはあまり積極的ではないですし、消去法で考えるとローマ正教からの者でしょうか」

と、神裂さん。

当然、三人の会話に俺達は置いてけぼりである。

ああ因みに、俺達には上条、インデックスちゃんも含まれる。

お、即席の井戸端会議が終了したらしい。

土御門が一步前に出る。

「考えてもしようがないし、各自出会ったらそれなりの対応をする事してくれるにゃー」

うん、やっぱりこいつは適當だった。

まあ、IFの話をしていても不毛なだけだし、それでも良いのかもしれないが。

「あ、そういやランサーは？」

「バイトです」

「サーヴァントがバイトって……」

と、上条&インデックスちゃん（言葉にしていなが他の連中も）。当然の反応である。

何で神話の英雄が現世で勤労に励んでいるのか、俺にも甚だ疑問だ。

「まあいいや。いないならそれはそれだし。今日は挨拶だけにしてこれで帰るよ」

「そうね。それじゃ、気が向いたらまた来るわ」

と、そこに。

「フハハハハハハ！！！！我が帰ってきたぞ、カレン！！！！」

今現在最も会いたくない奴が来やがった。

噂をすれば何とやら。

これから、出来るだけこいつについて話さないようにしましょう。

Chapter 4 挨拶廻り〜カンザキズヘヴン〜（後書き）

てな訳で、Chapter 4でした。

ついに、我様が登場……ッ!!

自分の中では、彼はギャグ補正がついた場合最強キャラになります。きっと大活躍する事でしょう。

いや、させます（断言）。

ランサー兄さんはもう少しで帰ってくる予定です。

現在、バイト改めナンパ中。

成功率は0%ですが（こっちも断言）。

報告。

活動報告見ている人がいるのか分かりませんが、

今まで更新してきたパソコンが逝ってしまい更新が停滞気味です。

誠に勝手ながら、更新を少し遅らせてしまいました。

ご迷惑お掛けして申し訳ありません。

Chapter 5 ランサーの憂鬱

——ランサー side

オレは今、根城としている教会への帰路の途中を歩いている。

「はぁー、全く災難だぜ……」

勝手にバイトを途中で切り上げて来ちゃったが、あの嬢ちゃんに店長に言っただけで貰う様に頼んだから怒られる事は無いだろう、多分。さて、オレが何故こんな事をやったかというと、

「……ま、原因はいつもの事なんだが」

そう、ナンパ(?)である。

あれは、近所の奥さん達が帰って少し経った、四時過ぎの喫茶店での出来事だった。

「いらっしやいませ。四名様ですか？」

同じシフトの嬢ちゃんの凛とした声が響く。

見た目はキツそうだが、話してみるとこれが意外に気さくな性格で、オレとも結構仲が良い。

彼氏がいるのが難点だが。

「ランサーさん、注文お願いね」

「あいよ、っと」

皿拭きを終わらせ暇だったオレは、席に着いた客の所へ行く。
後に思う、余計な事しなけりゃこんな事にはならなかった筈だ、と。

「お客さん、注文は決まったか？」

「いえ、まだです。でも、普通は決まってから来るもんじゃないんですか？」

「いやあ、この時間帯はあまり客が来なくて暇なんだ」

「ふーん、じゃあコレで」

注文を聞きながら客を眺める。

この時間帯、客の女の子との会話はオレの日頃の楽しみの一つだ。

「よし、暫くお待ち下さい」と

こうやって様子を見つつ注文を持ってくるまでに話題を考える。

「はいよ、お待ち」

「あ、ありがとうございますー」

ふわふわという言葉が似合う女の子が受け答える。

「それにしてもお嬢ちゃんたち、可愛いねえ。数年後が楽しみだ」

「うわー、ナンパってやつ？あたし初めてかも」

「少し驚いちゃいました」

お、掴みは中々だ。

少なくとも二人には好印象らしい。

「ナンパなら他を当たって下さいまし。私達、今は色々忙しいんですの」

「ですか？」

「そうですの」

中々に奇抜な話し方をする子だ。

どっかの金持ちの娘さんなのかね。

そういえば何処か仕草が貴族っぽいというかなんと言うか。

「こらこら、止めなさい。すみません、私達旅行者なので、そういうのは止めて頂きたいんです」

こっちの子も同じようだ。

しかし妙な組み合わせだな、何処にでもいる様な女の子とどっかの令嬢っぽい子が二人ずつ。

まあ、友達だと言われればそれまでだが。

「そうか、道理で見ない顔だと思ったんだよ。しかし珍しいな、この冬木に旅行ねえ」

「はい。旅行地ではありませんが、『外』で休みたいと思ひまして」

「『外』？何処の？」

「何処って、学園都市に決まっているじゃないですかー」

「学園都市ってのは「いらっしやいませー」と、お客さんだ」

聞きたい事は色々あるが、一旦話を中断し接客へ……って。

「こんにちはー、ランサーさん。元気に仕事してるー？」

「ありゃ、虎のねーちゃんじゃねえか」

初めてではないが、常連と言う程でもない、そんな頻度で来る人だ。

「ありっ、もしかして暇してた？」

「おう、今まで仕事半分にそこのお嬢ちゃん達と話してたところだ」

「「「こんにちは（ですの）」」」」

息の合った挨拶をする女の子達。

普通なら気落ちするような他人行儀なものだったが、そこは教師、
気にする事無く応答した。

「はい、こんにちはー、ってあら？あなた達、ここらへんの学生さ
んじゃないわよね」

「ああそれなんだが、ねーちゃん学園都市って知ってるか？」

「え、あなた達学園都市の生徒なの？へー、珍しいわねえ、『外』に出てくる子なんて」

おいおい、置いてけぼりかよ。

オレには何の事かサッパリなんだが。

「へ、もしかしてランサーさん知らないの？」

「ああ。全く」

「今時珍しいですねー、学園都市知らない人なんて。外人っぽいですし、もしかして外国ではそうでもないのかな？」

「いえ、戦争もありましたし。日本文化に随分慣れていらっしやるようですので知っているはずですよ」

「超能力開発って言えば分かるかしら」

一番大人っぽい女の子が聞いてくる。

ほおー、今の世にはそんな物があるのか。魔術とは何が違うのかね。

「じゃあさ、ランサーさん……、でしたっけ？出身地と、日本に来てどれくらいかを教えてくれませんか？」

長髪の子からの質問。

出身は……まあ、アイルランドか。

バゼットに召喚されたのが今年の初めだから、何だかんだでもうすぐ一年か。早いもんだ。

「ええっ！それなのに知らないんですか！？」

「それじゃあ、悪いけど無知と言うしかないよね、うん」

「あはー、言われちゃいましたねー」

「ぐっ、何だと……」

悔しい、何だかわからんがすげえ悔しい。

あの馬鹿王に狗だ何だと馬鹿にされるよりも数倍悔しいぞ。

「ぐ、ぐううう……！」

「あはは、何かおにーさんさ、そうやって唸ってると犬見たくて可愛いね」

ピキン。

「狗だと？」

「あら、本当ですよ」

「うん、言われれば分かりますねー」

「今オレを狗といったか……！」

「犬って言うより猛犬ね、コレじゃあ」

「こっ、この……！」

つと駄目だ、女子供相手に本気は出せない。

落ち着け、むきにならずに応答しよう。まずは深呼吸をして、

「っ、まあお前らみたいなお子様にはオレの魅力はわからんだろうなあ、ハハハハ」

ぽんぽんと女の子の肩を叩く。

「ま、もうちょっと経ってから出直し、っていだっ！」

何だ！？この子の肩を叩いていたらいきなりビリッときたぞ。魔術かなんかか？だとしても耐性があるオレならこの程度弾く筈なんだが……。

「ちよろーっと言い過ぎじゃあないかしら、お兄さん？」

「そうですわね。淑女たる私達に対して、その言葉はありえませんの」

そう言って、口調が変な自称淑女が手を触れてきたかと思うと、オレの体はいつの間にか四十五度ほど傾いていた。

「のわっ！な、何だぁ!？」

堪らず床に尻餅をつくオレ。

一体何がどうなってやがる！？説明しろ！

「ちょっとしたお仕置きですの。これに懲りたら女性に対してそういう口の利き方はお辞めになって下さいまし」

オレの疑問は軽く流されてしまった。

まさかとは思うが、マジに超能力開発なんてもんをしていて、あまつさえ成功してるって言うのか？

「けっ、このじゃじゃ馬娘が！いいじゃねえか、やってみやがれ、つていだっ！」

「お兄さん？そろそろ退いてくれないと、もっと痛いのかましちゃうわよ？」

「こらこら、止めなさい。ねえ、ランサーさん、ここは私に免じて退いてくれない？」

「ぐ、まあ虎のねーちゃんに免じてここは一旦退いてやる。覚えてろ！」

どんな物かわからん力を持つてる奴と戦うのは好きだが、相手は女子供だ。

騒ぎを起こす訳にもいかないしな。

逃げる訳じゃない。戦略的撤退ってやつだ。

「嬢ちゃん、店長に宜しく頼む！何か適当な理由を言っといてくれ！」

「え、ちょっとランサーさん！？ってあれ？もう居ない……」

……………。

「何か後半、私達空気だったね。いつもみたいに御坂さんと白井さ

んが大暴れして」

「ですねー。あ、店員さん、追加でイチゴパフェお願いします。佐天さんも何か頼みます?」

「あ、じゃああたしも初春と同じので」

あー、思い出すだけで腹が立つね。

あの二人にはいつか仕返しするつもりでいる。

仕返しの計画を立てつつ歩いていると、教会が見えてきた。

「あー疲れた。少し休むか……って」

馬鹿がまた叫んでやる。

それだけならまだ良いんだが、カレンに、セイバーのこの坊主、アーチャーのこの嬢ちゃん、それに加えて知らん顔の奴が五人も居た。

どうやらオレの今日の面倒事はまだまだ終わっていないなかったらしい。はあ、憂鬱だ。

Chapter 5 ランサーの憂鬱（後書き）

やっと投稿。

一ヶ月以上も間が空いてしまい申し訳も無いです。

忙しく報告も出来ませんでした。

次はとうとう英雄王、それにランサーも絡んできます。

教会前の人口がすごい。

いつもの数倍ですよ。

人口密度で言ったら数十倍です。

まあ計算してませんが。

なんとか次話は早めに書き上げたい。

二週間以内を目指して頑張ります。

追伸…お気に入りがもうすぐ100件を突破。応援有難うございます。

Chapter 6 英雄王参上、退場・出会ってしまった彼ら

——上条当麻 side

大声を上げてやって来たのは金髪紅眼の凄く偉そうな男だった。
何かどこぞの国の王様でもやってそうな雰囲気で、妙な威圧感を醸し出している。

それにしても、

「フハハハハハ！どうした雑種共、我が帰って来たのだ、出迎える言葉でも言ったらどうだ！」

この男、嫌に上機嫌である。
さっきからずっと高笑い、その上俺達をまるで品定めでもするかのような眼だ。

「あのー……」

おっと、ここでインデックスが接触を試みる。

「ム？何だ小娘」

「あなたもサーヴァントなの？」

かなり直球な質問だった。

それって、もし相手が普通の人だったらかなりリスクが高くないか？

まあ、この人がサーヴァントじゃなかったら凄く不思議かつ不自然だけど。

「フフン、よくぞ聞いた異世界の小娘よ、誉めて遣わす！」

一気にテンションが上がった。

どうやら読みは当たった、と言うか本人も名を明かしたくて仕様がなかったらしい。

「いいか、よく聞け！我は……………！！」

「「「……………ゴクリ」」」

緊張が走る…………。

ここまで引っ張ったんだったら、さぞかし名の知れた英雄に違いない。

果たして彼の名は……………！！？

「この世の全てを手に入れた人類最古にして最強の英雄王！我が名は「ギルガメッシュです」カレーン！！貴様アアアア！！！」

「コラアうるせえ！教会前で叫ぶな、そこのバカ王子！！」

そう言って、自分も叫びながら走ってきたのは青髪の男性だった。さらに教会前の人口が増える。

俺はいきなりの登場に呆然としていたが、

「「「ギルガメッシュ……………！！？」」」

いつもの様に、俺と他の人の反応が全然違った。
え？あの人はスルーですか？

「名前はよく聞くけど、そんなに凄い人なのか？」

「ハア……。彼はギルガメッシュ、嘗て世界が一つだった頃の古代メソポタミアはシュメール王朝時代、ウルク第一王朝の王」

「劣化しながらも後世に永く伝えられ、しかも実際に存在したと言われています。しかし、彼が伝説通りの人物ならば……」

「半神半人、いや、三分の二が神というそれ以上の神性を持つ。恐らく、歴史上で最も神に近い『人間』だよ」

「英霊とはよく言ったもんだ……。こりゃあ神霊クラス、下手すりゃ天使をも圧倒する存在だぜい？」

「何だって……？」

正直言う在眉唾ものだが、大天使を間近で見た俺はそいつを引き合いに出されると弱い。

しかしこの人が大天使以上と言われると、にわかには信じ難い。だって、この人は会話も出来るし、人格もあるんだぜ？

一個人で世界を終わらせる力を持っているとは少し、な。

「あら？英雄王ともあろう者が、この程度で女子供に手を上げるのですか？」

「ム……。クツ、まあ良い、この件に関しては不問にしておいてやる。どうやら貴様等にも、我の凄さはしっかりと伝わった様だしな」

「で、カレン。オレは何の事だかさっぱりな訳だが」

「あら、ランサー。帰ってたの？」

「いやそーいうのいいから」

「いいでしょう、ランサー。貴方にも分かる様に簡単に説明してあげます、耳かっぽじってよくききなさい」

カレンさんが妙な棒読み口調で、今来た人に言う。
ランサーって事は、やっぱりこの人もサーヴァントか。

「この人達は、異世界からのお客様なのです」

「……はい？何だって？」

「要するに、並行世界って事よ」

横から遠坂さんが付け足し、

「おいおい、そいつぁ本当かよ！？」

それに分かりやすい驚きを見せるランサーさんであった。
それどころか、

「何だ、貴様知らなかったのか」

「知らねーよ。思えばお前が熱心に動いてたのはこういう事だったのか」

「うむ。博識且ついつも冴えている我を誉め讃えるが良い」

「アホか、非常識且ついつもボケているの間違いじゃねーの」

「何だと！？我を愚弄するか、ランサー！」

「ああ！？ただ素直に本音を言ったただけだろうが！」

こんなコントまで始める始末。

そして、

「コラ、実に見苦しいです。今すぐ止めなさい」

二人を止めに行ったこの人は、本当にシスターなのだろうか……？
インデックスとは全くの逆方向で、教えに反していると思うんですが。

とりあえず、いちいち言動が酷いのに突っ込んでやりたい、と思っ
っている、

「抑えろ、上条。奴に絡まれたら、いや、目を付けられたら終わ
りだ」

全てを悟った顔で何処か遠い目をしている士郎さんからの制止。
そういえば、此処に来た時からあまり喋っていないみたいだし、
さっきの言動から想像してみても絡まれると面倒くさそうだ。

「それに、まだまだレベルの低い方よ、今までの会話は」

「それは、どういう意味でしょうか……？」

「あ、戻ってきたかも」

……………？

かなり激しい喧嘩をしていた筈の二人が、何処にも見当たらない。そして、近づいて来るカレンさんの後ろには赤い布の塊(?)が二つ……。

その端からは金色と青色の毛がはみ出ている。これから導き出される答えは一つ。

「うちの駄犬が煩く吠えてしまい、申し訳ありません。これからまたしっかりと躑めておきますので」

「「「(……………うわあ)」「」」

一同、どん引きです。

そして哀れ、ギルガメッシュさん、そしてランサーさん。

「ほおー！いいキャラしてるぜい、シスターさん！」

そして土御門、お前は暫く黙ってろ。

「あーっ！っ！」

って、今度は誰なんだよ。

——御坂美琴 side

「うーん、あっちかしら」

今、私達は新都郊外の散策をしている。

ま、散策と言っても珍しいものを見つけては写真を撮ったりしているだけだね。

「それにしても、さっきの洋館は興味をそそりましたねー」

「ふむふむ。私が推理するに、あれはきつと訳あり物件じゃないかなあと思うのだよ、初春くん。それもかなりのレベルで」

佐天さん達が話しているように、さっきは人目に付かない場所にあった洋館に行った。

「それにしたって鍵もかかっておりませんでしたし、不自然ですの。あれでは幽霊屋敷と言われても不思議じゃありませんの」

うん、それは私も同意。

不気味だったというか何というか、違和感がないのが違和感？

「や、やだなあ御坂さん。変なこと言っていないで次行きましょう、次！」

「所詮推測の域を出ませんし、いつまでも気にしてたら旅行がつまらなくなりますよ」

「うーん……ま、いっか」

「それでこそお姉さま！さあ、都合良くあそこにある教会で二人の愛の挙式を……」

「へー、教会ですか。御坂さん、次あそこ行きましょう！」

「ふふっ、元気ねー佐天さん。いいわ、行きますかー」

「……って、今度はスルーですか？ああ、お待ちになって下さいま

し、お姉さまあゝ」

なんて話しながら歩く内に、教会前の坂道まで来た。

「学園都市じゃ教会なんてめったに見れないからね、中は入れたら少し見ていきませんか？」

「失礼にならない範囲でね。でもそうね、この街って何か外国の雰囲気みたいなの感じるし、十字教徒とかも居るのかも」

「うひー、勘弁して下さい。戦争から日日も経ってないのに」

「でもいい街ですよ、ここ。海も山もありますし、雰囲気も素敵です。学園都市と比べるとやっぱり不便ですけど、こういう所に住むのも良いかもしれせん」

「あら、初春。ここに移住するつもりですか？」

「もう白井さんったら、可能性の話ですよー」

「冗談ですよ」

「よっと、とうちゃーく」

「あら、意外と近かったわね……って」

外人墓地の横を通り抜け教会前に辿り着いた先には、

「あーっ!!」

『あのバカ』がいた。(ついでにシスターやら色んな人も)
ちよつと、少し会うの早過ぎじゃない?

「おま、御坂……!?!」

もう少し時間が経ってから出会えばよかったのに、これじゃあ必
死になって追いかけて来たみたいじゃないっ。

ああもう、もっと早く言い訳考えておくんだったわ……。

Chapter 6 英雄王参上、退場・出会ってしまった彼ら（後書き）

という訳で、とうとう上条さんと出会ってしまった御坂。

彼女は一体どうなってしまったのだからか。

いや、どうもならないけど。

鯖男連中は書いてて楽しい、特に兄貴と我様王子。

多分こいつらかなり登場率高くなりそうです。

あと、妙に説明臭いのは仕様ゆえ、あしからず。

だらだら書いているうちに三週間…だと……？

深夜のテンションで書いているので、中々長くペースを維持できない。

ええ、言い訳です。（キリッ

やっべ、自分で書いてて叩かれそう。

では、次回をお楽しみに&これからも宜しくお願いします。

Chapter 7 談笑と上条の女難・特訓後の探り合い

——上条当麻 side

「御坂……?」

怪訝な顔をして振り返った先には、目をまん丸に開いた御坂だった。
え、何でここに御坂が居るんだ?

「あっあの、これは何と言うか、その………旅行?」

「って、何でクエスチョンマークがつくんだ!」

「にやんでってそれは……ああもう! ちょっと待ってよ!」

何故逆ギレ。

何かブツブツ呟き始めやがる始末。

知らない地で知り合いにばったり出会すわ、理不尽な逆ギレをされるわ、なんだかんだで俺の理解が及ばない事態が勃発している。
と、そこに、

「ちよつとちよつと! (小声)」

声を掛けたのは遠坂さん。

つられて俺も声量を控え目にして応答する。

「なんスカ……?」

「彼女達ってまさか魔術師じゃないわよね……?」

「はい、超能力者に魔術は使えないんですよ。もしかしてこっちの世界は違うんですか？」

ちらっと御坂達を一瞥して返答する。

どうやら、まだ落ち着いてない御坂さんには話が通じなさそうです。

「私は聞いたこと無いけど……。まあいいわ、士郎にカレン、そういう訳だから」

無言で頷く二人。

カレンさんはあんな性格でも、こういう所にはしっかりしているみたいだ。

「それで、お話は済みましたの？」

「白井か。御坂はちょっとダメっぽいし、状況説明を頼む」

「説明と言っても……お姉さまが私達を旅行に連れて行ってくれると言うので」

どうやらさっきの話は本当の事だったらしい。

じゃあ何でクエスチョンマークが？

「カミヤんも罪作りの男だなー、って事ぜよ」

こらそこ、訳分からん事言うな。

「ああ、そういう事なんだ。へー、上条くんがねえ」

はいそこも、ニヤニヤしながら変な納得しないで下さい。

「言動といい、性格といい、どっかの朴念仁にそっくりですね」

「とうまはどうやってもとうまなんだね……」

「えっ、何この流れ」

「全く、このお猿さんときたら……助かりますけど」

「なんと……。これは絵に描いた様な鈍感ですねー、名前も知らない人ですけど」

「御坂さんもこんな調子じゃ報われないです……」

「え？え？えーっ！？」

「上条、ドンマイだ。俺は応援してるぞ……」

「そんな、士郎さんまで！ああもう、不幸だあああああああ！
！」

正に四面楚歌、唯一の味方と思っていた人も陥落である。

俺、泣いていいよね……？

……………。

「もう……旅行だって言ってるじゃない……。聞いた事ない場所だ

し、最近遊んでないいいじゃない、別に……。まあ、確かに追っかけて来た自覚はあるけど……って言うか、アイツがいつもいつも鈍感なのが悪いのよ……。グスッ」

彼女の眩きは彼の耳には届く筈もなかった。

あと皆さん（特にカレンさん）、

「（いつまで布にくるまれてればいいんだ……。）」

彼らの事も忘れないであげて下さい。

——衛宮士郎 side

それから時間は飛んで、夕飯後。

藤ねえは珍しく今日は来ないらしいので、ゆったりと過ごす。
上条達の事を説明しなけりゃいけないし、考える時間にしようどいいい。

「あー……。だるいわね……」

「だにゃー……。本当なら作戦会議の一つでもするべきなんだが……」

と、遠坂に土御門。

早くも打ち解けたのか、完全なだらけムードである。

「……あれ、そういえばアーチャーは？」

「ああ、何かまた市内の見回りだってさ」

「ふーん。私がロンドンに行ってる間に命令しておいたの、癖になっちゃったのかしらね」

あいつの事だからそんな理由ではないと思うが、何かと忙しいヤツだよな。

今日もうちの夕食に顔を出して俺に小言を言ったかと思えば、食い終わるとすぐ行ってしまった。

……まあ、たまに港で見かける赤い釣り人の事は黙っておくけど。

「そうねー。ま、あの性格は根っこからだし、簡単に変えられる訳ないわね」

「む……。何だよ、言うならちゃんと言え」

「べっつにー？」

「……なあ、正直言わせもらうが、あいつ本当にサーヴァントなのかにゃー？ どう見てもありゃ主夫ぜよ」

「「う、反論出来ない……」」

今頃どっかであいつもくしゃみの一つでもしていることだろう。

因みに。

今現在、居間には俺達三人のみ。

ライダーは白室へ神裂さんとステイルさん、インデックスを連れて行った。いい話相手が見つかったみたいで何よりだ。

上条はなんと食事中の会話でバゼットに目を付けられたらしく、鍛錬の名目の下、いつの間にか拉致されていた。

イリヤとセイバーが面白がって&興味深げについて行ったらしいが、

桜が教えてくれなかったら大変なことになって帰ってきたことだろう。

……便宜上、神裂さん、ステイルさんと呼んでいるが、実は俺は彼らの年齢を知らない。

容姿からして絶対年上なのだが……。
まあ後々分かる事だろう。

「じゃ、上条も心配だし、道場に行くか」

と、その前に、

「「士郎（衛宮）ー、おぶって（くれ）ー」」

「……………おい」

こいつら、一体どうしてくれよう。

「はあ、はあ、は——あ、し……死ぬ……………！」

道場に入った俺達が一番最初に聞いた声は、迫り来る恐怖から逃げようと必死になっている上条の悲痛な叫びだった。

まあ言い方が大袈裟だが、用はバゼットとの組み手らしきモノがキツイだけだろう。

ここで言うておくが、あくまでも、組み手“らしき”モノだ。

アレを性格に形容するなら、逃げる鼠と追う猫、である。

いや、猫じゃないな。虎か？違うな、該当者すでに居るし。ならラ

イオン？あ、これも駄目か。

まあよく分からんからジャガーとかでいいや、正直どうでもいいし。

「む。上条君、またですか？仕方ありませんね、休みますか」

上条はその言葉を聞くや否や、その場にへたり込んだ。

「そうだ、休憩にしようってやれ。上条ー、麦茶あるけど飲むか？」

「おや、士郎君達も来ていたのですか」

適当に返事を返しつつ、グラスに麦茶を注ぐ。

声を出すのも辛いのか、息絶え絶えでコクコク頷く上条。

冷えた液体が入ったグラスを受け取ると、某女優が出演するCMさながら、音を立てて麦茶を飲み干す。

「っぷは、はあ、はあ、はあ——ふ、ふう、っふー、ふーっ……。」

ご、ごちそう、さまでした、ふう、ふーっ……。」

「大丈夫？かなり息上がってるわよ？」

遠坂が心配そうに聞くのも無理はない。

ちとキツ過ぎたんじゃなかるうか、バゼットの特訓(?)。

一般人というのもアレだが、常人相手にバゼットが特訓というのは一寸も無くおかしいと思うのですよ。

「なーに言ってるんだ衛宮、少し前まで北極海に沈んでたこいつがこの程度で音を上げる訳ないぜよ！」

へー、見かけに寄らずタフなんだな……って。

「「北極、海……？」」

「あ、ああ、それは……」

「おっと回想はさせん。詳しくは話せないが、割と世界の命運を賭けた戦いで死に掛けたって事だにゃー」

それは“割と”で済ませる事じゃないぞ。

でも意外だ、そこら辺に居るような顔してても、結構修羅場潜ってきているんだな。

それにしても、やっぱり何処の世界でも魔術とかが絡むと大変な事になるんだなあ。

今思い返してみれば、聖杯戦争だってある意味世界の命運掛けていたっぽいしな。

「成る程。道理で動きが実践的だったのですね。動きは荒削りでしたが、決定打は上手く急所から外してましたし、中々のものでした」

「はは……有難うございます」

おお、バゼットが褒めるとは。

最初から見たかったなあ、こいつらに構ってないで皿洗ってさっさと行くべきだったと悔やまれる。つて、そういえば。

「イリヤとセイバーは？ここに居たんじゃなかったのか」

「さあ、上条君は分かりますか？」

「なんか途中でどっか行っちゃいましたよ」

バゼットの質問に息が整ってきた上条が答える。

随分と打ち解けたみたいだ。やはり武道は心を開くいいものだなあ。などと感慨に耽っていると、

「では土御門君。次、手合わせ願えますか？」

とかのたまうバゼットであった。

「いやいや、遠慮しておくぜい。わざわざ死にに逝く、なーんて素敵な趣味は持ち合わせてないし」

「そうですか……、では少々失礼します……。ふっ！」

と、ノーモーションの自然体からいきなり拳を繰り出すバゼット。

「ちょ」

「おっと」

っと待て、と言う前に終わってた。

まさか土御門の奴、アレを避けたのか……？

「やはり、私の眼に狂いは無かった。あなたも相当腕が立つようですね、手合わせして頂けないのは残念です」

「いやー手加減されてるのにその褒め言葉は無いにゃー。あんたが本気になったらオレなんて一溜まりも無いぜよ」

HAHAHA、とても周りに浮かんでそんな雰囲気である。

「何よあれ……。一寸、土御門くんって魔術師じゃなかったの？それともバゼットみたいなタイプだったりする？」

と、遠坂が疑問を投げかける。

また武道派の魔術師か？

俺が言うのも何だが、正統派の魔術師が少なすぎではなからうか、この家。それっぽい遠坂だって八極拳の使い手だしね。

まあそれを言ったら、一つ屋根の下にこんなに魔術師とか色んな奴らが居る事からして異常なのだが。
それを言ったら駄目だと思うのだ。

「うん？まあこれまた詳しく言えないし、諸事情あって今魔術は使えないんだがね。オレの専門は風水、東洋の方の術式を使うんだ」

「え？あなたイギリスの組織所属じゃないの？」

ああそういえば、確か自己紹介のときに言ってたな。

「それも秘密だにゃー。言っておくが、オレに対して探りを入れても無駄だぜい？」

オレってば、こういうのは得意中の得意だからにゃー、と付け足す土御門。

どうやらあっちの参謀はこっちのと違って余りヘマをしないみたいだ。

「そう。おちゃらけていると思って甘く見てたけど、そう簡単には
いかないみたいね」

……見えない火花が散っているご様子の二人であった。

「じ、じゃあ俺はセイバー達を探しに言ってくる。食後のデザート
もあるしな。遠坂は読書組呼んで、上条達は居間に戻っててくれ」

俺の言葉に皆が口々に応答する。
しかし、その中の一人だけは、

「オレはいらないぜい。少し夜の冬木をぶらぶらと彷徨いてくる」
食後の茶会を遠慮するのだった。

「土御門くん……?」

不信感からか、心配だからなのか、遠坂が声を潜める。
対して土御門は、

「いらん心配、いや、詮索はするな。ただ、見て回ってくるだけだ
にゃー」

とだけ言った。

これ以上追及しても無駄。

そう思った俺は、見送りの言葉を言って遠坂達と一緒に道場から出
る。

……出て行く俺達を見て、一人道場に佇む土御門。

……それは、空耳なのかもしれないが、

「衛宮、それに遠坂も、余りオレを信用しない方が良い」

こう、あいつが、呟いた気がした。

「オレって実は、天邪鬼ウソつきなんだぜい」

Chapter 7 談笑と上条の女難・特訓後の探り合い（後書き）

という事で二章七話でした。

前半はむしろくしゃしてやった、後悔はしていない。

いやーさすがにこの人数だと一人あたりのセリフ数が少なくなっている。

次回からは気を付ける……と思います、ええ。

後半は書いてて楽しかったです。

いきなり格好良くなるキャラ男って素敵。

でも原作では最近出番余りなくなってきた残念です。

最後の文は伏線……な様でそうじゃなかったり？

今回はちょっと遅れました。

詳しい理由は別所で報告、少し長いので。

では次回また。

Chapter 8 ステイル、考える

——ステイルⅡマグヌスside

僕は今、ライダーのサーヴァントに連れられ、神裂とインデックスと共に読書に耽っている。

「……………」

「……………」

個人の部屋と言うには些か量が多過ぎるのでは、と思えるほどの本の山に囲まれ、黙読。

本は嫌いじゃない、むしろ大が付くほど好きな趣味だ。

以前は日本文化を毛嫌いしていたが、料理を口にしたたり文を読むと、これはこれで魅力があるのだ。

衛宮士郎、彼の料理は美味しかった。

あれを食べると、如何に今迄の日本料理が、ご飯と味噌汁ではなくライスとミソスープだと言うことが分かる。

また聞く所によると、日本には雨を表す言葉が多いらしい。

イギリスも割と天気が不安定で雨が多い国だし、そういう文化は評価に値すると思う。

……思考が脱線した。

最初は食卓後の和やかな雰囲気になされて安易にここに来てしまった自分を恨んだが、余計な心配だったらしい。

僕は少々この家の人間を怪しみ過ぎていた様だ。

それはさておき。

「らいだー、読み終わったんだけどこの次の巻どこ？」

「ええと……、はい、どうぞ」

ライダー、騎乗兵のサーヴァント。

長い髪、長身、容姿端麗で男を惑わすような美貌……いや、妖貌。味方とは言え情報が余りにも乏しすぎると思い、少ない情報から彼らの正体を探ってみようと思う。後々敵対したときが怖いからね。

男を惑わす妖婦……。

この点を考慮すると思い浮かぶのは、かの処女王エリザベスやメアリ・スチュアート、クレオパトラ七世、楊貴妃、玉藻前など。

正直言って悪女、傾国の美女というカテゴリだけを鑑みると歴史上の女性なら幾らでも候補が上がるのだ。

見た目も考慮すると欧州系と思われるが……。
よし……。

「失礼、ライダーさん。貴女は何処の御出身ですか？」

「……それはサーヴァントとして、それとも人としての質問でしょうか。前者でしたら残念ながらお答え出来ません」

「……では人間として」

どうやら冷静沈着でもあるらしい。

彼女にこの手の引っ掛けは無駄と分かった。

「そうですね……。ギリシャの出身と言っておきましょう」

「……もしかしてそれはギリシャ神話という意味で？」

「フフ、さあ、それはどうでしょう」

妙な含み笑いを向けるライダー。

では方向を変えよう。

もしギリシャ神話の英雄だとすると、彼女の周りの環境を少し推理するとかかなり大まかでも人物が特定できるのだ。

あの時代の神々は妙に人間臭い所があるし。

「それならば御家族は？」

ふと眼を逸らすとインデックスと神裂もこちらの会話に耳を傾けている様だ。

「……それは、教えてしまうとかなり狭い範囲に限定されてしまうので」

「ふむ。これ以上は聞いても無駄、ですか」

「ええ、そうしてくれれば助かります」

と、その時。

「はい、おじゃまします」

「失礼、読書中すみません」

突然の乱入者が現れた。

「貴方達は……セイバー、それにイリヤスフィールでしたか？」

「ええ、あなたはカオリね？それとインデックスと、ステイルだったかしら」

二人の少女の乱入により、静かだった部屋は一変して賑やかになった。

どちらかと言うと余り物を言わない人間が多かった為、当然と言えば当然だろう。

「見た所読書をしていた様子ではありませんね。何の話をしていたのですか？」

む、そう聞かれると言いにくい。

彼女達の真名が気にならないと言えば嘘になるが、堂々と正体を探っていましたと答えるのも気が引ける。

「ステイルが、らいだーの真名を推理していたんだよ」

「ほう」

と、僕の思いも虚しく、あっさり暴露されてしまった。まあ、嘘ではないのでこれ以上言及はしないが。

「それでどうです？」

どう、とは？

「ライダーの真名は分かったのか、と聞いているみたいですよ」

神裂が通訳した言葉を聞き、考える。

仮定だらけで特定できないが、今の所彼女について予想できるのは『ギリシャ神話の英雄で、男を誘惑する美貌と美しい髪を持ち、家族に特徴のある人物』だという事だ。

あくまでも仮定、これらの情報がブラフだと言う可能性も否めないが。

「ふーん、じゃあセイバーはどう？」

「わっ、私ですか？」

一連の会話を聞き、イリヤスフィールから質問が入る。

セイバー、剣士のサーヴァント。

金髪・小柄で、正に絵に描いた様な美少女。

しかしその容姿とは裏腹に、礼節を重んじ英雄然とした威厳を漂わせる態度。

しかし彼女、あとはセイバーや教会に居たサーヴァントもそうだが、普通の服装をするのが常識なのか？

いや、あのアーチャーのサーヴァントを見る限り、戦闘用の服と日常に紛れる服を使い分けるのが妥当だろうが……。

この際、現代人さながらの服装をしているのは無視しよう、うん。少ない情報を元に思考する。

女騎士、それも英雄クラスとなるとかなり範囲は絞られてくるだろうし。

「ふむ……」

「ど、どうでしょう……」

彼女らが英霊と聞いた時から薄々感じていたのだが、もしや彼女は、かのジャンヌ・ダルクでは？

取り敢えず、少し鎌をかけてみようか？

「貴女、生前は王、もしくはそれに準ずるものでしたね？」

セイバーがライダーに目配せをしている。

どうやら了承を得た様子で、口を開く。

「それ位なら問題ないでしょう。……ええ、私は生前、一国の王でした」

どうやら予想は当たったみたいだが、それならばジャンヌ・ダルクの線は消える。

では彼女はパルミラ王国の女王ゼノビア辺りと考えるのが妥当か？

……駄目だ、余りにも情報が少なすぎて、特定は不可能に近い。

「やはり言うべきか、断定は出来ません。恐らく、という所までしか」

予想はしても口には出さない。

それが当たっていたとしても、此方が情報を知らないと思わせるだけで一寸したブラフになるからだ。

今の話を元に、後で誰か——土御門やインデックスらが妥当だろう、上条当麻以外なら——と推測でもしてみるか……。

「ふーん。ま、外見だけじゃあすぐに分かる訳ないわよね。特にセイバーとか」

うん？今の発言はそこそこ重要なものかもしれない。
心に留めておこう。

「……………」

と、会話が途切れ、また読書に入る。
だが少し経ってから、

「おい」

と、またもや乱入者が。

「おや、その声はリンですか？」

「何だ、セイバー達もここに居たのね。みんな、士郎がデザートあるって言ってたけど、どう？」

「勿論、頂きます」

「私も食べるんだよ」

「食べるー」

どうやら今来た二人がもう行くらしい。
神裂もインデックスに連れ立って慌ただしく駆けて行く。

「ふう、行ったか……」

彼女らが行くと部屋は途端に静かになった。

まるで旋風の様だったな、などと思いながら再び読書へ戻る。
……ふと気付いて部屋を見渡してみると、ここには僕とライダーの
二人だけが残っていた。

「どうです？尤も、貴方としては少々五月蠅過ぎましたでしょうが」

一呼吸置き、言葉を付け足すライダー。

さっきとはまた違う笑みを投げ掛けながら、

「慣れれば、そう悪いものでもありませんよ？」

と、こちらを見透かしたように言った。

普段の淫靡な面持ちより、こっちが彼女の本当の笑いなのかもしれない。

「どうやら貴女には、僕がどういう人間でどう生きてきたか分かる
みたいですね」

「はい。その歳で、よくここまで視線を潜り抜けてきたものです」

驚いたな、実年齢は他人に余り言った事がないのに。

何となく、雰囲気ですよ、と言いつ返すライダーを見て、洞察力もあるのかとまた感心させられる。

「まあ、その程度の事なら言われるまでもないですよ。だって、」

今迄ずっと休めていた手を再びページの上に戻しながら、僕も笑う。
後で思えば、笑ったのも暫くぶりだったかもしれないな。

「血生臭い戦場の空気も、こんな日常の喧騒も、僕はもう慣れっこ

ですからね」

何故なら僕の人生は、彼女インデックスを守る為に存在しているのだから。

「フフ、良い笑顔ですよ」

Chapter 8 ステイル、考える（後書き）

何とか今月中に投稿。

今回はずつとステイルに語ってもらいました。

鯖連中の正体予測はこんなもんなあ、正直自信ないです。

インデックスが凄く活躍できそうな話題だったけど、空気になりがちで困る。

彼女には今後頑張って貰いたいと思います。

とまあ、今回は特に言う事はないので、こんな所にしておきたいと思います。

あと最後に。

あくまで生き抜きとして違う小説(?)を書くと思います。

逆転はしませんので、御意見等ありましたら感想欄にでも活動報告コメント欄にでもお願いします。

※誤字修正しました。

Chapter 9 夢と理想(?)

——神裂火織 side

夢を見ている。

「————」

また、あのユメ。

何かこれといって実害がある訳ではないが、はっきり言って見てて気持ちの良いものではない。

しかし、そんな事を言ってもコレが終わる訳でもないのだが。

サーヴァント二人と回路^{パス}を繋いだ翌日から始まったという事は、この後味の悪いユメにも何か意味があるのかもしれない、と無理矢理にでも自分を納得させる。

……心を、文字通り空にする。

……これも一つの精神鍛錬だと思って、己を騙して消去し、他者の夢へと埋没する——。

——目を覚ますと、そこは地獄だった。

見渡す限りに、燃え盛る炎、既に乾いてしまった血、そして、おびただしい数の死体——。

いや——死体と言うには、まだソレは尚早過ぎた。

呻き声を上げながら自分に助けを求めてくるソレは、確かにまだ生きています。

しかし、ここまで醜く歪んだソレを、まだ生きていると、人間だと呼べるのだろうか。

奇跡的に無傷だった彼は、無駄だと思いながらも地獄を歩いていく。少年が見たのは、そんな景色ばかりだった。

どうせ、助からないと思った。

最初から、こういう運命だったと悟った。

やがて少年は力尽き、力無く地に倒れ伏せる。

……だが、『世界』は少年を死なせなかった。

結果的に言うと、彼は助かった。

未曾有の大災害の中、唯一の生還者として、彼はある男に救われ、養子として自身から望んで引き取られた。

……後にその男が、空っぽの自分を狂わせるとも知らず。

——目を覚ますと、そこは戦場だった。

見渡す限りに、燃え盛る炎、既に乾いてしまった血、そして、おびただしい数の死体——。

周りからは、銃声や怒号に混じって、泣き叫ぶ女子供の声が煩く耳に響く。

どうやら束の間の急速の間にうっかり寝てしまったらしい。

どれだけの時間寝ていたのかは分からないが、戦況に変化は無い。

また今日も、無駄な争いを食い止める為に、たった一つの魔術を武器に戦場を駆ける……。

それは奇しくも、自らを育てた養父の理想を追った故の末路だった。

延々と繰り返していけば、争いはなくなると思った。

こうしていれば、皆が幸せになれる筈だった。
やがて青年は己が力に限界を感じ、『世界』との契約を行う。

……だが、『世界』は青年を救わなかった。

死後、『守護者』として『世界』を守り続ける運命を背負った彼は、
人類の滅亡を幾度と無く食い止める事になった。

しかし、彼の仕事は常に、起きてしまった災害の犠牲を最小限に食
い止める、掃除屋だった。

彼が見るのは、いつも地獄――。

そこには彼の追い求めた幸せなど、欠片もない。

世界を守ると言う名目で、良い様に『世界』に死後を行使され続け
る――。

――目を覚ますと、そこは地獄だった。

――目を覚ますと、そこは地獄だった。

――目を覚ますと、そこは地獄だった。

――……………。

――……………。

――……………。

――目を覚ますと、そこは大空だった。

「な……!?!?」

見渡す限りに、燃え盛る炎、既に乾いてしまった血、そして、おびただしい数の死体――。

――など、微塵も無かった。

見えるのは、綺麗な星と、不規則に千切られた様な雲、都会的な建物の光、そして見上げた、いや見下ろした先には……屋根?

ドン、という音と共に落下したのは、小奇麗な――と言っても着地に失敗したお陰で面影は一切無いが――洋室。

意識を冷静に保ち、少しの間辺りを見渡していると、人の気配。ドアをぶち開けて、乱暴な口調で入って来たのは……、

「そうか――。ここ、か――」

いつか願った、かつて自分が過ごした場所。

そこに彼は、再び舞い戻ることが出来たのだ。

ここで、オレは、かつてのオレを殺す。

あつてはならなかった、間違いだった己の理想を叩き潰し、オレを消し去る。

それだけを頼りに、あの地獄を耐え抜いてきたのだから――。

「――……っ! は、はっ、はぁ、はぁ、は――」

……目が覚める。

今回の夢は、前回と比べて存外に辛かった。

前の夢とは違う、良く分からないが何か心に刺さるものがあつた。妙に現実味を帯びていて、自分の事では無いのに勝手に意識へ流れ

込んでくる。

必死に精神鍛錬だと思っても、さすがにこのレベルの夢が毎晩あるのは辛い。

「状況から鑑みるに、サーヴァント二人に関係しているというのが妥当ですが……」

魔力供給のパスを繋ぐと当然の事なのか、それとも全く関係の無い何かなのか。

この状況から言って後者と考えるのは些か無理があるが、可能性としては充分である。

「誰か……、遠坂凜、彼女辺りにでも後で相談してみましようか」

独り言を呟きながら、パジャマ代わりに受け取ったYシャツからいつもの服装に着替える。

ふと隣のベッドを見上げると、インデックスを姿がない。

トイレだろうか。

まあ、気にしてもしょうがないので、さっさと支度を終えてしまおう。

着替えを終え、廊下へ出る。

扉を閉めると、とてとてと音を立てて見慣れた顔が歩いてきた。

「あ、起きた？」

「おやインデックス、先に起きていたのですか」

「うん。それよりかおり、すつごくうなされていたけど、悪い夢でも見た？」

……どうやら自分はかなりうなされていたらしい。

まあ、只の悪い夢だと言ってしまうえばそれまでなので、大丈夫とだけ伝えておく。

気持ちを切り替える。

これは今考えるべき事ではないのだ。

「そんな事より、今は朝食です。ここでの食事は昨日が初めてでしたが、中でも衛宮士郎、彼の料理は素晴らしい。和食の何たるかが彼には良く分かっています」

「私もそう思うんだよ！なんだかここにきてから毎食が楽しみかも！」

ここにあの少年が居たら泣いて文句を言ってきそうな台詞を言いながら、離れを出て母屋へ向かう。

正直な所、食事が楽しみなのは私も同じ。

洋食や中華も美味しいが、そこは日本人、和食が一番なのである。

それともう一つ。

「この子と、短期間とはいえ、また一緒に日常を過ごせるとは……。世の中何が起こるか分からないものです」

前を元気に歩くインデックスに聞こえない様に、声を潜めて呟いた。

「ふふっ」

「どうしたの？」

「いえっ、特に何も」

……恐らく今の自分は、他人に見せるのが恥ずかしい位にニヤニヤしている事だろう。

願わくは、この小さな幸せがもう少し続きます様に……………。

Chapter 9 夢と理想(?) (後書き)

ということで、第二章9話でした。

偶然暇ができたので、どうせならやっちゃえ、という感じで書きました。

ずっとギャグ書いてたので、シリアスが楽しいこと楽しいこと。やっぱり、片方ばかり書いてても創作意欲沸きません。

書いている最中は終始しかめ面でしたが、結構筆が進みます。

てな訳で、また次回！。

Chapter 10 夢と理想（幕間） ? 私の歳を言ってシロ

——神裂火織 side

朝食を終え、時刻は午前七時。

朝食前に声を掛けた遠坂凜と共に、彼女の部屋へ向かう。

別に聞かれて困る話ではないが、二人きりの方が良いと言われたのでそうする事にした。

「よし、良いわね。で、今朝言ってた相談したい事って何かしら？」

相談なのは疑問だが、訊きたいのは他でもない、毎晩悩まされる夢の件だ。

凄惨な光景、目の前に広がる地獄。

夢の筈なのに、今直ぐにでも思い出せそうな程、記憶に焼き付いている。

「ん……夢、ね……。あるとは思っていたけど、二日連続とはね」

で、どんな夢だったの？と

聞いてくる遠坂凜に対し、ありのまま夢で見た事を話す。

眼前に広がる地獄。

眼前で行われる殺戮。

かつて抱いていた理想。

そして夢の最後、決まって見られる『彼女』。

「……あちゃー、初っ端からそれか。きついわね、うん」

一人納得する彼女。

「あの……それはどういう……」

あ、ごめんね。と言って眼鏡を掛ける。

レンズが入っていないらしく、伊達眼鏡の様である。

「結論から言うとな、その夢はサーヴァントの過去。契約しているサーヴァントの、生前の記憶なの」

生前の記憶。

あの惨たらしい光景が、セイバーかアーチャーのどちらかの過去だと言うのか。

「仕組みを説明すると、サーヴァントと霊的な繋がりがある場合、睡眠時に相手の記憶層、つまり過去の記憶を夢として見る事があるの」

本来サーヴァントは霊体だから夢を見ないんだけどね、と付け足す。この霊的な繋がりというのは、推測するに魔力供給のパスを繋いだ時の事だろう。

「詳しい事は言えないけど、それはアーチャーの方の夢ね。私も見た覚えあるもの」

アーチャー……、ここに来たとき最初に戦った色黒の男。

衛宮士郎に宛ら小姑の如く、よく小言を言っているのを見かける。

「……うん、その認識で間違いないわ」

「彼について、もう少し詳しく教えて頂けないでしょうか」

「んー……まあいいわ。あいつに限ってバレることなんてそうそうないだろうし」

バレることはない、とは、マイナーな英霊なのか、それとも伝承が多く特定が難しいという事なのか。

まあここは聞き流しておこう。

この事はあまり他の人に話さないでね、と前置きをして話出す遠坂凜。

「——あいつはね、『正義の味方』だったの」

「正義の、味方——」

「うん。最も、漫画とか何かでよくあるようなヒーローみたいに、皆を救えた訳じゃなかったみたいだけど」

薄く微笑みながら、まるで昔話を聞かせるかの様に彼女は語る。

「子供の頃の災害で一人だけ生き残ってね、人の為に生きなきゃいけないって強迫観念に駆られて、自分を殺して人の為に生涯を懸けたの」

災害とは、あの夢に出てきた地獄の様な光景だろうか。

夢だと分かっているにも、眼を背けずにはいられない、正に『地獄』だった。

「最後には、多くの人を救う為に自分の死後まで『世界』に売り渡しちゃって。契約して力を入れた後、人類を救った事もあった

らしいわ」

「あの、『世界』とは？」

「ああ、ごめんなさい。世界論は厳密に言うところと二つあるんだけど、ここで言う『世界』っていうのは、人間の集団無意識による意思の事。私達にとっての命である秩序の自己防衛を行い、その秩序を乱す矛盾、現実を浸食する幻想を修正しようとするの。私達人類の存続の為、人類を滅ぼす何かが発生した時に出現して、その要因を抹消する抑止力。抑止の守護者とも言うわ」

やはり、この世界は私たちの世界とは根本から仕組みが違うらしい。

「では、彼は――」

「うん、あいつは本来の英雄じゃないの」

「彼が、本来の英雄ではない――？」

そもそも、本来の英雄とは何なのか。

「そう。反英雄――人々に憎悪され、その悪行が結果として人々を救う。悪を以って善を明確にし、呪われながら奉られる事になったモノの事。それにあいつは元々唯の人間で、戦場を渡り歩いていた浮浪者だったし、歴史に名前を残すなんて事はない」

先程の言葉の理由はこれか。

確かにそれでは、正体の見当もつかないだろう。

「馬鹿よね。人間が人間である限り、争いは尽きない。そんな事に

も気付かないなんて。……ま、単に後戻り出来ないだけだったのかも知れないけど」

眼鏡をゆっくりと外しながら、苦笑混じりに話す遠坂凜。明らかにその表情は最初と異なり、何処か悲しげだった。

「だからあいつは、正義の味方を忌み嫌っている。自分の生涯を後悔している。……私が言う事じゃないけどね」

「そう、ですか——」

「あ、何か変な感じになっちゃったわね、ごめんなさい」

「いえ、話に付き合って下さり有難うございます」

「また何かあったら言ってね。答えられる範囲で相談に乗るわよ？」

じゃあこれから学校だから、と言い残して部屋を出ていく遠坂凜。

『世界』。

抑止の守護者。

反英雄。

そして——正義の味方。

「アーチャー彼の生前、か——」

あの皮肉な笑みの奥に、どれだけ悲惨な過去が隠されているのだろうか。

何故かは分からないが、何か心に引っ掛かりを覚える。

「――そうだ。彼の生き方、理想は何処か――」

かつての私の生き方と、何処か似通っている……？

今でこそ考え方は変わったが、天草式十字凄教の人々と和解するまでは、周囲の人間に不運を押し付けてしまう事を頑なに忌避していた自分。

持てる力を全て幸福でない者達の為に振るう、自分以外の誰かの幸福の為に生きる事を志していた自分。

私は、彼の理想に、そのかつての自分を彷彿とさせて止まないのだ。

「――」

彼との間に、何か強烈なしがらみを感じさせる。
この時の話が、その始まりだった。

――上条当麻 side

「そういえばさ、神裂さんとステイルは一体何歳なんだ？」

それが、事の発端だった。

「またね、上条くん」「ではまたな、上条」

「ああ、また明日です、三枝さんに氷室さん」

「コラ上条！ あたしはまだ諦めてないぞ！ お前絶対ウチの部に入れ

てやるからな！」

「ちよっ、蒔寺さんほんと勘弁して下さい！」

陸上部のお三方に挨拶をして、校門に出て土御門らを待つ。

昨日のファーストコンタクトの後の話である。

結局あの後も誤解が解けず、次の休み時間いっぱい使って蒔寺さんに追い回されてしまった。

その挙句、逃げ切ったと思ったら捕まり、逃げ足がうんたらエースのあたしがかんたらで陸上部へ勧誘されてしまう事になる始末。

男子なんだから逃げ切れるのは当たり前ですよ、と言ったら、あたしは冬木の黒豹なんだぞ！と返されたのだった。

訳が分からないし理不尽だ。

というか、遠坂さんとの一件はどうなったんですか。

「なあ、土御門。親睦深めるついでに新都行かないか？」

「あー、すまん間桐。越してきたばかりで、今日は少ーし用事があるってにゃー。また今度誘って欲しいぜよ」

ふと見ると、2-Cの間桐慎二と土御門が二人。

何か共感する所があったのか、何故か打ち解けているみたいである。

桜さんのお兄さんとはクラスが違う為、話す機会が少ないのでこの二人の馴れ初めは知らない。

ま、大した興味も無いが。

「カミちゃんお待たせい。衛宮は何か夕食の仕込みとかでさっさと帰ったぜよ」

「そうなのか。じゃあ行くか」

学園都市にいた時の様に無駄な談笑を交わし、帰路につく。

学校生活は、取り敢えず初日は問題無し。

もう直ぐ冬休みになるという事だし、数日だったらこのままでも問題ないだろう。

このまま何もなく、この問題が解決してくれれば嬉しいんだけどなあ……。

士郎さんが地雷を踏む、おおよそ一時間前の俺であった。

「そういえばさ、神裂さんとステイルは一体何歳なんだ？」

夕食前の事である。

仕込みが終わり、後は全員揃う迄ゆったり出来ると言うので、その言葉通り俺達は何もせず居間に居た。

現在居間に居るのは、俺、インデックス、神裂、ステイルの四人。そして士郎さん、遠坂さん、桜さんの合計七人である。

「……貴方から見て、私は何歳に見えますか？」

少しの沈黙後、声を潜めて問い掛ける神裂。
あれ？何か機嫌悪い。

「んー、どうだろうな。少なくとも俺達より年上だろうし、二十代前半、いつでも後半くらいかな」

「「士郎（先輩）……………」」

二人の呆れ混じりの声にも気付かず、一人喋り続ける士郎さんは、

「ステイルは……言動から予想するに俺達と同じ位じゃないか？」

どうだ？と、反応を求める。

本人は至極当然の様に言ったが、それに対して神裂は、

「衛宮士郎……！貴方までそうなのですか！」

こうだった。

地雷踏んだな、これ。

「「え……！？」」

皆さん神裂の激昂に驚きのご様子。

そりゃあそうだ、普段は冷静沈着を絵に描いた様な奴だし。

神裂の怒りはまだ収まらない。

「衛宮士郎に限った事ではありません！此処の人々は、良くも悪くも私を一人の人間として、同格に扱ってくれました……同年代の様に扱ってくれると思っていました！」

「え……。あの、神裂さんは、その、もっと年上じゃあ……………」

と、桜さん。

神裂はキッと立ち上がり、こう叫んだ。

「私は、まだ十八歳です!!」

「「「ええー!!?」」」

「因みに言っておくけどね、僕は十四歳だ」

「「「ええー!!?」」」

……と、これが、神裂とステイルの年齢の誤解が解ける、事件の顛末であった。

「何食べりゃ、あの歳であの身長になるんだよ……………」

「あ…………あんなのが十八歳なんて…………どういう世界なのよ……………!!?」

「やはりカオリは、私の同好の士だった様ですね……………」

この後、何処かで慟哭や歓喜の声が聞こえてきたのは、空耳だったのだろうか。

今は定かでは無い。

……………。

余談だが、この事件の後の夕食に乗り込んで来た藤村大河先生は、俺達がいる事に驚嘆絶叫説教の末に遠坂さんに良い様に言いくるめられて渋々納得したのであった、まる。

Chapter 10 夢と理想（幕間） ？ 私の歳を言ってシロ（後書き）

はい、二章十話でした。

今回は、アーチャーの過去についての話と、以前要望があった神裂 & a m p; ステイルの歳についての話です。

このように、面白い意見があれば書ける範囲で書いていきますので、ご意見待ってます。

と、ここでアンケートっぽい質問。

暇なら意見として感想のついでお答え下さい。

◇番外編の学園都市編について

1. ギルガメッシュを誰と会わせたいか（状況含むのも可）
2. ランサーを誰と会わせたいか（r y
3. アーチャーを誰と（r y
4. 士郎 w i t h上条を（r y

ではでは。

Chapter 11 魔術講義

——上条side

夕食後。

流石にこの人数が一箇所に集まるのは誰もが辛いと感じているのか、はたまた無意識か、現在の居間にはそれ程人は居ない。

土御門は良い雑談相手なんだが、夜になると必ずと言って良い程何処かへ行ってしまふ。

何かやっているのか、たまたまなのか……恐らく前者だろうが。

「とうまー、ごはん毎日たくさん食べれてうれしいね」

「だなー。お前は少しばかり食べ過ぎだと思うけど」

それにしても……。

カチャカチャと音を立て、時偶雑談をしながら後片付けを済ませていく土郎さん、と桜さん。

ああ、俺がインデックスにどれだけこの光景を望んだか。いいなあ、羨ましいなあ。

「なあ、インデックス」

「なにー？」

「いや……なんでもないです……」

怪我しそうだしな、食材も失敗するの許せる程買えないし、うん止めところ。

と、自分を納得させるのであった……。
うう、不幸だ……。

「上条」

「はい？」

不意に呼ばれ、振り返る。

そこには結構真面目な顔の土郎さんがいて、じっとこちらを見ていた。

「そっちの仲間を呼んで来てくれないか……。理由は後で話す」

「先輩、やるんですね……！」

え、何？

訳が分からないが、とりあえず呼んでこよう。
一体何をするんだ……？

呼んできた後、道場へ。

土御門以外は家、もしくは庭などにいたので楽だった。
マジで何処に行ってるんだあいつ。

「――さて、何で呼んだのか説明して欲しいんだけど、土郎？」

切り出したのは遠坂さん。
こういう時に彼女のキツパリとした言動は役に立つ。

「ああ」

先輩……、と桜さんが独り呟く。

彼女は本当に士郎さんを思っているんだなあ、と実感させられるが、それはそれ。

今は士郎さんの言葉に集中する。

「こんな事を言うと怒られるかもしれないが――」

沈黙。

道場は士郎さんの声以外に音を許さなかった。そんな中、おずおずと言葉が紡がれる。

「実は俺――魔術を使いたいんだ」

「……は？」

とは遠坂さん。

声に出していないだけで、皆驚いているが。え、士郎さん魔術師じゃなかったの？

「先輩！その発言は誤解しか招きません！」

「え？」

どうやら自分で気付いていない様子。

あれー、士郎さんも天然？

「つまりですね、先輩はインデックスさん達の世界の魔術を習いた
い、とおっしゃってるんです！」

沈黙。

さっきとは違う空気のものだが。

「実は俺、魔術師のくせに普通の魔術——それこそ初歩中の初歩もロクに使えなくてさ。でも、こっちの世界のなら使えるんじゃないかと思って、さっき桜と話してたんだ」

という訳で、士郎さんやこの家の人達対象のに魔術講義が始まった。因みに、俺含む。

講師はインデックス。

こういう時にはとても活躍できる、いつもは大食いのシスターさんである。

「まず、ここの世界の魔術は、しろう達の世界のそれとは根本、魔術基盤から異なるんだよ」

と言って、土蔵からライダーさんが持ってきたホワイトボードを叩くインデックス。

あの土蔵は四次元ポケットか、おい。

「そっちのは『根源』っていう場所へ辿り着くための学問らしいね。世界に刻み付けられた、定められた基盤^{ルール}。ここに魔術師が魔術回路つてものを通じ繋がって命令を送り、基盤が受理、予め作られていた機能が実行される、という流れみたい」

……もう訳が分からない。

『根源』って？魔術回路って？

もう少し優しい言葉で説明して欲しいが、それを言うと怒られるので口には出さない。

というかインデックスはいつ知ったんだろう。

「『根源』っていうのは私達にも分からないわ。この世界の外側、私達の世界の魔術師が生涯を掛け、子孫に託してまで追い求める何か。アカシックレコードとも言われるわね。簡単に言うと、真理とか。事物全ての原因と結果がそこにあるって言われてるの」

最後に、根源っていう言葉も厳密には正しくないんだけど、と締め括る遠坂さん。

うーん、分かったような分からんような。

「魔術回路っていうのは、私達には関係ないから、意味はないかも。説明必要かな？」

「僕は聞きたいかな」

ステイルが気だるそうに手を上げる。

こいつも何だかんだで研究熱心なんだろうか。

「魔術師が体内に持つ、魔術を扱うための擬似神経。生命力を魔力に変換する為のパイプラインであり、さっき言った基盤へ繋がる『^{みち}路』ね。多い程優秀って言われてて、生まれながら数が決まってるの」

「ふむ……。分かった、有難う」

「これくらいかな。じゃあこっちの説明に入るかも」

言って黒の水性ペンを握るインデックス。

妙に張り切っている様に見えるのは気のせいだろうか。

きゅっきゅつと音を立てて絵を描いていく。

あれは……天使、か？

「この世界の魔術は、異世界の法則を無理矢理この世界に適用し、様々な超常現象を引き起こす技術なの。元々は宗教的奇跡や才能のある者に対する羨望から開発されたものらしいけどね。そっちの魔術回路みたいなのは無いから、素人でもやろうと思えば出来るの」

「随分簡単そうね。何か羨ましいわ」

「うん、でもね、魔術の知識は普通の人にとっては強力な毒なの」

「毒……？」

「はい。宗教的な奇跡や観念を織り交ぜたもの故、宗教防壁の様な免疫を持たない者は、使用毎に精神を蝕まれるのです」

と、神裂が付け足す。

そこに。

「魔道書なんかみたいに濃度が高い物は、たとえば魔術師であっても見るだけで強力な精神汚染になるんだにゃー」

「土御門——？」

やっと帰って来たか。

何やってたんだ？と質問をすると、

「何、ちょーつと散歩行ってただけだぜい」

かるーく流された。

絶対嘘だろそれ、まあ別に良いけどさ。

で、何の話だ？と聞いてきたので、事の経緯を話すと、

「ほうほうほう、衛宮もなかなか大胆な奴だにゃー。俺なら別世界のものなんて、怖くてやってられないぜよ」

と、笑う土御門。

士郎さんは唸り声を上げるだけで、何も切り返さないが。

「……話を戻すかも。ここで何で素人でも使えるかって言うと、私達の世界の魔術はそっちのものと違って、自身の生命力を適切な方法で魔力に変換・精製しさえすれば、あとは特定の手順に沿ってそれを運用するだけでいいんだよ」

「その、魔力の精錬方法とは？」

「うーん、人によって異なるけど、代表的なのは『呼吸法により体内の血液の流れや内蔵のリズムをいじる』方法だね」

「その理論で行くと俺にも希望が……？」

「で、ここで重要なのが、これは一個人の魔力でしかないという事。大きな術式を使用する際は必然的に『地脈・龍脈』や『天使の力』テレスマが不可欠になってくるの」

「『地脈・龍脈』って言うのはこっちでも同じ概念ですね。じゃあ、

『天使の力』とは何でしょうか」

「テレズマとは『天使』の力、『天使』そのものを構成するエネルギー。偶像の理論——これは説明したね、これによって集められた別位相のチカラなの。母なる地球ほしのチカラたる地脈・龍脈を『世界の力』と称するなら、我々十字教徒の信仰の具現たるそれは、正しく聖書に在る『天使の力』——それこそ使いこなせば、一夜でソドムとゴモラを滅ぼした『創世記』ジェネシス通りの神戮しんりくでさえ実現させ得るモノ」

私達が使えるのはその一端でしか無いけどね、と締め括るインデックス。

こいつが話したのは、今思い出しても恐ろしい、あの『神の力』ガブリエルが行使した力の事だ。降り注げば地球の半分が焦土となる、ミサイルの如く火の矢を何十億も地上へ墮とす魔術——。

あれがもし成功していたらと考えると、身の毛がよだつ思いだ。

「天使——。悪魔なんかは第六架空要素だったわね。詳しい事は分からないけど、英霊より高位な存在にいる事は確か」

「僕達はそれらの力の一端を引き出し、呼び込んで、上手く魔術に利用しているという訳さ」

「まあ、理屈としてはこんなものでしょう」



「で」

士郎さんが、話を区切る様に声を発する。

一通り説明が終わり一段落ついたところで、本題に入るのだった。
……本題、ね。

「俺は結局、どうなんだ。使えるのか」

「うーん、どうかな。そもそも魔力の精製方法から違うし、しろうがこの世界から力を借りれるかも定かじゃないからね」

インデックスによる考察である。

そう、俺達の世界は彼等のと、根本からして異なるのである。
まず準備段階から躓いていたのでは、話にならない。

「もし個人の魔力しか使えないと仮定すると、簡単な術式くらいしかないな。まあ、本人の魔力量に左右されるけど」

「簡単なのって、炎とか出したりとかは？」

「属性によるね。やはり自身の属性から外れた魔術は、魔力の消費が、適正のある魔術と比べ段違いだ。僕なら『火』の属性持ちだから、その一点に特化した魔術を用いるし」

ふーん、だからステイルは炎ばかり使ってるのか。

割と魔術師って万能なものかと思っていたから、今聞いた話は得だ。
……と思ってしまう辺り、随分と毒されているのだが。

「そういえば、貴方方の属性を訊いていませんでしたね」

「あー……一寸それは教えたくないわね。ステイルの属性を聞いたから私の分だけ言うわ。アベレージ・ワン——五大元素全てが私の属性よ」

「「「……………！」」」」

俺以外の四人の顔が強ばる。

五大元素全てつてのはそこまで凄いものなのか、と訊くと、どうやら普通の魔術師は一つ、多くても二つの属性持ちらしく、正に天才の名に相応しいらしい。

遠坂さんってそんなに凄かったのか……意外っちゃあ意外だ。

「……ま、衛宮も、人払いとか認識障害とか、必須のもの位は出来て損はないにゃー」

とその時。

「止めておけ」

此処には無い筈の声が響いた。

「てめえ——アーチャー——」

士郎さんだけが敵意を剥き出しにして、立ち上がる。

道場の入口に何時の間にか立っていたアーチャーさんに向かい合うと、

「何だよ、何か用か」

と、無愛想に問い掛けた。

「何、只の忠告——いや、警告だ」

皮肉気な顔で呟いた後、きつと士郎さんを見据えて言った。

「衛宮士郎——貴様／オレには、『ソレ』しか無い事を知っておけ」

「な……に？」

「衛宮士郎が衛宮士郎である限り、お前にはソレしか無い。ソレ以外のものなど、お前にとっては何の意味も成さないものだ」

士郎さんの驚愕にも眼を向けず、淡々と事実を告げていくアーチャーさん。

何処か、達観している様な眼だ。

「そんなの分かってる。けど——やってみなくちゃ分からないだろう」

「いや、断言しよう。貴様／オレが生涯に身に付け得る魔術は、ソレ一つに他ならない」

「っ——」

「……今言う事はそれだけだ」

とだけ言って振り返ると、外へ歩いていく。

「覚えておけ。己を裏切る事は、必ず己自身を罰する——例外は無い」

その言葉の真意は定かではない。

——少なくとも、俺達にとっては。

俺達の眼に紅い背中だけを残して、弓兵は夜の闇へ消えていった——。

Chapter 11 魔術講義（後書き）

はい、二章11話でした。

説明回、インデックス大活躍（？）です。

時間考えると、割と簡単に書いたなあ。

クリスマスとかあって泣きが如し。

あれ、変換がおかしいな……（泣）

コピペじゃないけど、既存のものを文章に起こすだけだから楽みた
い。

因みに今回、独自解釈少し入ってたり。

明らかにおかしい所あれば、ご指摘下さい。

余談ですが、割り込み投稿だと読者の方々に通知されないみたいで
すね。

ちよくちよくチェックするか、活動報告見て頂ければ分かると思
いますので、手間ですがよろしく願います。

第一話 少年少女、驚愕す

「フ、そろそろ頃合だな……」

——衛宮士郎 side

冬休み二日目。

そして上条達が来てから六日目になった。

彼らと接触して何か起こるかと危惧していたがそれも起こらず、今も平穏無事な生活が続いている。

悩みの種だった生活費についての問題も、上条と土御門が短期のバイトに就いてくれる事になり、当面は心配しなくても大丈夫だ。

「あー……暇だな」

昨日は観光——というより遊びか——に来ていた御坂さん達が帰るという事で、少し忙しかった反動もあってか、妙に体を持て余している気がする。

だってなあ、騒動が起きてたの大体あの娘達の周りだし。

正確に言うと、何かと彼女らが絡んできたからなんだが。

まあ、今となっては過ぎた事だけだな。

「だったら上条君辺りでも誘って新都にでも行ったらどう？」

「うお、居たのか遠坂」

「あのね……。ま、縁側に座ってボーっとしてれば気付かないのも無理ないわね。あんたはおじいちゃんかっての」

む、これでも年相応の生活をしているつもりなんだが。

「ど・こ・が・よ」

言いながらずっと迫ってくる遠坂。

いやいや、そこまで言うこともないだろう。

これでも友達と出歩いたり遊んだりしてるぞ？

「ふーん。でもそれって、自分から誘ったんじゃないでしょ」

そんな訳な……いや、あるかもしれない……。
くっ！

「俺は、学生だっ！」

「はいはい、いってらっしゃーい」

「で、俺が連れてこられたって事ですか……、いや別に良いんですけど」

何と言うか……すまん。

と、そんな訳で俺らは今新都を歩いている。

本日は御日柄も良く云々、絶好の散歩日和である。

「それで、何処行くんです？」

「うーん、流石に男二人でウィンドウショッピングってのも寂しいしな。かと言ってプールって訳にもいかないし、歩きながら考える

か」

ほんとに今日は良い天気だ。

なんか今日は良い事が起きそうな気がするなあ。

|||||

当時の事をK・Tさん（仮名）は語る。（音声は変えてあります）

「ええ……。まさか、と思いましたよ。俺……。いや僕も、あの人があそこまで常識破りな人だとは思ってませんでした」

そうですか、では一緒に居たE・Sさん（仮名）はどうですか？

「はい。あの人の理不尽さは前々からかなり知っていたつもりでしたがね。まだまだ甘かったと思い知らされました……」

……はい、OKです。ご協力有難うございました。

|||||

「お、丁度あそこに喫茶店あるし、休んでいくか？」

「いいっすね、俺が出しますよ？」

「いやいや、いいよ。これ稼いだのはお前もだし、割り勘でいいだろ」

「有難うございます。いやー、上条さんも喫茶店で食事なんて久しぶりですよ」

などと談笑しながら喫茶店へ向かっていく。
……なんだ？でかい車が向かってくるけど……。

「何見てるんすか？」

「いや、あの遠くから向かってきてるでっかい車だよ」

「あの、金塗りの悪趣味な外車ですか？」

そう、上条が言った途端である。

「悪趣味ではなーい！！我の車を馬鹿にするな雑種共ー！！」

もしかしたら、この世で一番聞きたくない声が聞こえてきた。
その声の主は、

「「ギルガメッシュー!?」」

あ、悪夢だ……。

今日こそ絶対に平穏な一日を過ごせると思っていたのに……！
なんて言っている間にもあいつは迫り、結局目の前に車は停まって
しまった。

……上条を連れて一目散に逃げれば良かった。
車相手に逃げ切るほど脚力に自信は無いが。

「そうだ、我だ！全く……何処が悪趣味だと言うのだ。これ程まで
のセンスの持ち主が、我以外に居る筈がなからう」

ああ、後半だけなら大いに同意するよ、後半だけならな。

「言ってるな、坊主。お前ならこの成金王子にとっては、自分自身が一番だって分かってるだろ？」

「ランサーさん？」

上条の呼び掛けと同時に、ランサーがひょこっと顔を出した。どうやら座席に寝ていたらしい。

しかし、見れば見るほど大きく豪華な車だ。

ランサーが寝ていたのに気付かないくらいだからな、こういうのはあまり詳しい方じゃないが、滅茶苦茶に高いんだと思う。

「ランサー、こいつらに説明しておけ。我はもう一人を連れてくる」

と言うと、話が見えないままギルガメッシュは冬木大橋の方へ向かっていった。

それにしても、もう一人……？

どうやら、嫌でも詳しく話を聞く必要があるらしい。

「で、どういう風の吹き回しなんだ？ドライブにでも誘うつもりか？」

「ハ、馬鹿言ってるじゃねえ。オレにもあいつにもそんな趣味はねえよ」

「じゃあ何で俺や土郎さんを？」

「問題は過程じゃなく結果だ。つまりはな、一寸した小旅行って訳よ。それも、全額あいつ負担でな」

成る程な、こっちが冬休みなのを考慮してくれたってのはないだろうが、タイミング的にはかなり丁度良く誘ってくれた様だ。ま、こいつらと旅行なんて考えるだけで恐ろしいが。

「へえ、いいですね」

「だろ？」

「はいそこ、待ちなさい」

甘い、甘過ぎるぞ上条。

こいつらと一緒に行動して何も起こらない方がおかしい位なんだ。

「いいじゃないですか。最近は事件も少ないみたいですし、一日二日の休暇なんて取っても罰は当たりませんって」

「そういうこった。坊主もあんまり細かい事気にしてるとモテねえぞ？」

余計なお世話だ。

まあ、上条が行きたがっているなら駄目の一点張りという訳にもいかないし、少しだけなら……とか思っている自分がいるのが本音である。

が、それにしたって行き先を聞かない事には始まらないだろう。

「ん？ ああ、それならオレは知らん」

なんという無責任。

というかあんた、目的地も言わずによくもまあ旅行に誘えるもんだよ。

「あ、丁度戻って来たし、ギルガメッシュに聞いたらどうすか？」

そうだな、それが良いだろ……って。

「「お前は……ッ！」」

寄りにも寄ってこいつが一緒とは、まさか思いもしなかったぞ。

「ああ、貴様に同意するのは虫酸が走るが、ここは致し方あるまい。
なあ英雄王よ、これは一体どういうつもりだ」

衛宮士郎とエミヤシロウ、この二人を同席させるなんて。

こいつらがアーチャーの正体を知らない筈は無いし、もしや世間一般から見ても、俺達は仲が良く見えているのか。

……うわ、考えただけで寒気がする。

「まあそんなにカリカリしなさんな、お二人さんよ」

「うむ、我も何も考えずに貴様等二人を引き合わせた訳ではない。
贗作屋よ、何かと貴様等は役に立つのだからな。王たる我がそう認めたのだ、光栄に受け取るが良い」

更に、それにな、と付け足すギルガメッシュ。

ふと運転席を見ると、アーチャーが乗り込み既にエンジンを掛けていた。

お前も文句があったんじゃないのか……。

「雑種、貴様は餌なのだ」

………は？

待て待て、いきなり何を言い出すんだこのバカ王子は。

先ずは状況を整理しよう。

運転席にはアーチャー、助手席には上条が座り、二列目に俺ともう眠っているランサー、最後列はギルガメッシュがでかでか一人で陣取っている始末。

「ふむ、中々に良い車だ。運転のし甲斐がある」

少し黙っててくれアーチャー。

景色はまだ新都で、今俺は振り返ってこいつの説明兼バカ話に付き合っている、でいいよな？

よし、もう一度言葉を反芻しよう、……餌？

「分からぬか？ 雑事だけならアーチャーの一人で事足りるのだ。ならば何故？ そう、つまり貴様は『セイバーをおびき寄せる為の餌』という事だ」

「ちよっ、待て！ どういう事だ！」

「たわけ。どういふも何も、説明した通りだ。まあ、今更案じても無駄だがな。見ろ」

どこを見るんだよ。

だが上条には伝わったのか、その言葉に反応して呟く。

「あ、もう高速道路？ 速いなー」

「なんでさー！！」

――Interlude in

一方それから暫く経った頃、衛宮邸では……。

「ただいま戻りました」

「「おかえりー」」

買い物を終え、玄関をくぐるセイバー。

お帰り、と返したのは遠坂凜と間桐桜である。

「あら、士郎と上条ちゃんと会わなかった？」

「ええ、恐らくすれ違いになってしまったのでしょう」

「それよりセイバーさん、お買い物は上手くいきましたか？」

「勿論です、新鮮且つ美味しそうな食材を選び抜いてきましたから」

「セイバーの食材に掛けての選力眼は本当に凄いわよね」

などと仲睦まじく談笑する三人。

女三人寄れば姦しいとは言うものの、彼女達の会話は端から見れば上品で美麗に見えた事だろう。

何せ三人が三人とも日本離れた顔の美少女であるのだ。

と、そこに突然の来客が。

「ご歓談の所申し訳ありませんが、失礼します」

「あら、カレンじゃない」

冬木教会のシスター、カレン・オルテンシア。

表の顔は至って普通の端正な顔立ちをしたシスターだが、素性を知る者にとってはなるべく敵に回したくない性悪女である。

「はい、今回は報告の為にわざわざ教会からここまで歩いて来ました。どうぞ感謝して下さい」

「あ、相変わらずですね……」

「ところで、報告とは？」

いつもの様に毒を吐きながら、淡々と話すカレン。

「はい、では報告します。今日の昼、うちの駄犬Bが駄犬Aと遠坂さん家の黒いのを連れて、冬木市を脱走しました」

「「……………え？」」

「それだけではありません。彼らは脱走の折りに、衛宮士郎、上条当麻両名を連れて行った模様です。……ここに報告を終了します」

「「「な、なんですってー!?!」」」

——Interlude out

「もういいよ……。で、結局行き先はどこなんだ？」 「そ、それは分かったわ。で、行き先はどこなの？」

「む、ランサー。伝えてなかったのか？」 「行き先ですか？」

「ああ、後から教えたほうが面白そうだったからな」 「分からないことには追う事も出来ませんからね」

「「おいランサー（さん）」」

「先輩達はどこに連れて行かれたんですか!？」

「まあ良い。いいかよく聞け、行き先はな……………」 「分かりました、精々驚いて下さい。行き先は……………」

「学園都市だ!!」

「学園都市です!」

その日、冬木市深山町と同市に隣接する高速道路に、男女数名の絶叫が響き渡ったという……。

「やれやれ。せめて良い旅になる事を、私が願おう」

第一話 少年少女、驚愕す（後書き）

さて、ギャグパート本編のはじまりですよー！

投稿に時間がかかり、とうとうF a t e／Z e r oも第四話まで進んでしまった……。

本編の話ですが…。

この回の前にあった日常編は割愛…という訳ではなく単純に構成を考えるのが面倒だっただけです。

この番外編の後、徒然なるままに書いていくつもりなのでどうかご勘弁を。

因みに番外編はどこまで続くかまだ見当がつきません。

意見・要望があれば出来る限り答えたいと思っていますので、どうぞ宜しくお願いします。

第二話 潜入！学園都市・出発！冬木市

——衛宮士郎 side

拉致されてから二時間弱、流石に騒ぐのも無駄になってきたのでさっさと帰るための手段を脳内で模索する。

電車で帰るなら金はある。

こっちの世界の通貨事情が上条達の方と同じとも限らないので断定は出来ないが、そこまで違うということも無いだろう。

あっちについてから考えるか……。

暇だ、何をしよう。

「なあ、そういえば何でアイツが運転してるんだ？」

何を思ったのか自分でも分からないが、後ろを振り返りギルガメッシュに話しかける。

運転席にはアーチャー、助手席の上条と一人暮らしの料理について話している。

正直言うと俺もそっちの方が断然良いのだが、アイツと一緒にというのが気に喰わないのだから仕方が無い。

しかし、仕方が無いで最も苦手としている奴に話しかけるのは自分でもどうかと思うが。

「む？何、適材適所という奴であろう。あの贗作屋がいつ何処の英霊か、貴様が一番良く知っているではないか」

「だってさ、俺達連れてく時は別の人が運転してたじゃんか」

表情が無きに等しい男性だったのを覚えている。

見掛けは普通の人間だが、どこか人間味の無い人だった。

「ああ、アレか。アレは我が作った泥人形だ」

人形……だったのか。

そういやいきなり居なくなるし、そう言われれば納得がいく。だが新たな疑問が浮上してくる。

「じゃあその人形に運転させてれば良かったんじゃないのか？」

何か駄目な理由でもあるのか、それともアーチャーじゃなければいけないのか。

後者はあまり無いと思うが。

「……何、単純に人形には良い思い出が無い。それだけの理由だ」

「え？」

不躰にそう言ったつきり何も話そうとせず、何処からとも無くアイマスクを取り出し寝始めるギルガメッシュだった。

「はあ……。俺も寝ようかな、まだ着きそうにないし」

上条の世界に興味はあったが、ここまでそう変わった景色も無い。何より、隣と後ろで寝られては起きてる方が馬鹿らしく思えてくるし。

「がー」

……とりあえず、ランサーのいびきを何とかして欲しい。

そう思っても助けなど来るはずもなく、周りが五月蠅いにしては目を閉じて直ぐに睡魔が襲ってくるのだった。

「……………エンキドゥ」

「着いたぞ、起きろ」

「ん……」

アーチャーの一喝が響く。

気付くと辺りは暗い。

拉致されたのは昼前だったし、それなりの距離だったのかね。

残念ながら携帯も時計も持っていない俺には、時間を確認する術は無い。

いつまでもボーっとしている訳にもいかないので寝惚け眼を擦って見ると、目の前に巨大な壁があった。

「おー……」

巨大も巨大、こりゃ下手なビルよりずっと高いんじゃないか。

学園都市ってのは何なんだ、牢獄か何かなのか。

「うーん、でもその認識も間違いじゃないっぽいですね。簡単には出られませんし、入るのも難しいです」

やっぱりそんなもんなのか……って。

入るの難しいって、それ拙いんじゃないのか？

「おいおい、ここまで来て門前払い喰らうのはごめんだぜ？」

「……ふむ。その難しい、というのを詳しく教えてくれないか、上条」

何が可笑しいのかニヤケ顔である。

我ながら人によって接し方がここまで違うのは如何なものか。

あ、よく聞けば上条の呼び方がフルネームから苗字に変わってる。

「えーつとですね……」

自身もあまり詳しくないのか、言葉足らずに、しかしどこか棒読み口調で説明する上条。

説明を要約すると、色々と手続きが必要でアポイントメントも必要という事らしい。

こっちの世界で超能力研究が公になっているのかは知らないが、曲がりになりにも生徒を親から預かっているんだし、部外者に厳しいのは当然だといえる。

「八方塞がりか……。おい、どうするんだ？」

リーダーなのか分かんが、とりあえず騒動の張本人であるギルガメッシュに問う。

「知らぬ。貴様らで如何にかせよ」

意味無し。

訊いた俺が馬鹿だった。

この様子じゃ帰る気なんて更々ないだろうし。

「あー、もう！どうするんだよ！」

自分の所為でもないのに、何故俺はこんなに必死にならなければいけないのか。

そんなオロオロしている俺をニヤニヤ眺めるアーチャー。さっきから腹が立つな、喧嘩売ってんのかお前。

「クッ、だからお前は愚かだと言うのだ、衛宮士郎」

何なんだ、何か策でもあるのか？

そうなら早く言えよ。

「勿論。まさか貴様、すんなり入れると思っていたのか？だとしたら、実に愚かだよ。こういうことを予期できないから、凜達に気が利かないと言われるのだ」

非常に余計なお世話である。

それに未来で幾分かましになっていたとしても、冬のテムズ川に落とされたお前にだけは言われたくない。

その状況になっても、俺は絶対に回避してみせるぞ。

「で、アーチャー。べらべら喋るのはいいんだが、出来るなら早くしてくれ。オレはさっさと中に入りたいんだよ」

「む、すまん。では行くか」

「こんにちは、この度は学園都市にお越し頂き有難うございます。」

ご入場の場合はIDをご提示下さい」

「あのー、常盤台中学校の御坂美琴と〇〇高校の上条当麻の知り合いで書類が通っている筈なんですけど」

「分かりました、少々お待ち下さい。……はい、確認しました。ただ今『臨時発行《ゲスト》ID』を発行しますのでもう暫らくお待ち下さい」

……驚いたな。

これ、アーチャーが手回したのか？

「いや、正確には上条当麻経由で御坂美琴に依頼したのだ。ギルガメッシュの了解を取るのには苦労したがな。私とランサーは良かったのだが」

あー、あいつ結構遊ばれてたもんな。

というかいつの間に。

「何と、あの小娘のおかげか。中々粹な事をしてくれるではないか」

「プレゼントなら学園都市で売ってるカエルのマスコットだな。確かデコ太……だったかな」

「そーいやあの嬢ちゃんも変に少女趣味だったな。何つーか、まだガキだよなあ」

「お待たせしました」

などと話している内にIDの発行が終わったらしく、係員が俺達に

一人ずつ渡していく。

「学園都市では食事や交通網の利用、学校等の見学の際、このIDの提示を求められます。紛失した場合、再発行のためまたここまでお越しになられて頂く必要がありますので、くれぐれも盗難、紛失にご注意下さい」

テンプレ通りの説明を受けながら周りの様子をチェックする……が、ここからは内部の様子は見えない。

……などと冷静ぶっているが、正直一番ワクワクしているのは他ならぬ俺かもしれないのであった。

だって夢にまで見た未来都市だぞ？

ワクワクしないのは男としてどうかと思う。

「それではご質問をどうぞ。……ないようなので、これで説明を終わります。ようこそ、学園都市へ。我が国が誇る最先端の科学技術を心行くまでお楽しみ下さい」

外界と学園都市を区切る重い門が開いていく。
最初は乗り気じゃなかったが……胸が高鳴る。

「よし！行くぞ、者共！」

「おう！」

って、

「はしゃぎ過ぎだ、坊主」

え？俺だけ？

——遠坂凜 side

「あーもう！腹っ立つー！」

何故こうもあの三馬鹿は問題を起こすのか。

おそらく馬鹿同士気が合うのかもしれないけど、それにしたって今回の件はあんまりだ。

「姉さん！日用品の用意は出来ました！」

「了解！荷物はセイバー達に任せて！車に積む様に行っているから！」

何にせよ時間が無い。

とりあえず準備をしなければ。

「リン。大方の荷物は積み終わりました」

「ありがと。出発まで休んでいていいわよ」

と、セイバーに言ったところでこっちも荷物の準備は出来た。

服とかは全部桜に渡しているので、ウェストポーチに、財布など貴重品、もしもの時の為の宝石を入れておく。

これで良い……わよね。

さて、一段落ついたので作戦会議に入る。

まあそこまで大それたものでもないけど。

「分かっていると思うけど、目的は士郎と上条君を連れ戻すこと。あ

の三人も一緒のほうが良いけど、まあ放っておいても良いわ」

まさか自分から正体を名乗るほど馬鹿でもないし、大丈夫。一人除いて。

そこは残りの二人がフォローしてくれるだろう。

「出発は土御門君達が帰ってきた時。私達だけじゃ行けないしね」

「あ、それでしたらライダーが探しに行っています。もうすぐ戻って来る筈ですけど」

「そう、じゃあ車の運転手を決めるわよ」

今現在行くのが決まっているのは、私、桜、セイバー、ライダー、イリヤ……は保留。セラとリーゼリットに止められてるみたいだし。あとそれにプラスして、土御門君、インデックスは……今居ないけど、多分行くって言うでしょうね。

ギリギリ一つの車でいけるわね。

出来るだけ予算はカット、変なところに金は使いたくないし。

「ストップ！何でわたしが保留なのリン！」

「あ、イリヤさん」

「何でって、セラ達はどうなのよ」

う、と口籠もるイリヤ。

連れて行ってあげたいのも山々だけど、メイドの許可なしに連れ出す訳にもいかない。

「それに関しては問題ありません」

「セラ！？それにリズも？」

このメイド、いつの間に私の後ろに！？

こういう登場の仕方大概にして欲しいと思う。
で、問題ない、とは？

「はい。私共もついて行く事に、先ほど決まりました。如何でしょう、お嬢様」

「ほんと！？ありがとう、セラ、リズ！」

「ん。イリヤがうれしいと、わたしたちもううれしい」

なんかいつにも増してセラが優しく見えるのは気のせいでしょうか。
うーん、まあ結果オーライで良いんだけどさ。

これじゃあ車の定員オーバーよ？

「その程度なら差し支えありません。こちらで車は用意いたします。
諸経費もこちら持ちで」

「す、凄いですね……」

「ええ、流石アインツベルンね……」

正直、金持ち舐めてたわ。

じゃあ後は……、

「たっだいまだにゃーっ！」

玄関から突然の喚き声。

あんな声で帰ってくるのは私が思いつく限り土御門君しか居ない。
最近あの妙なテンションにも慣れてきたところだ。

若干興奮気味に土御門君、遅れてステイル、神裂さん、インデックスが居間に入ってくる。

「お帰り。どうやらその様子だとライダーから話は聞いたみたいね」

「聞いたも聞いた、大爆笑ぜよ！まさか衛宮とカミヤんが拉致られて、しかも行き先は学園都市！？これが笑い話じゃなくて何なんだっつーの！しかも残されたメンバーはそいつらを追いかけるって、どこの映画だにゃー！いやー、カミヤんの不幸もここに極まれりって感じか！？まさか早速連れ戻されるって残念どころの話じゃねーYぶべら！？」

「はい、静粛をお願いします」

神裂さんが一蹴。

何だかんだでこの二人、結構良いコンビなんじゃないか。

「どうまとしろうが連れて行かれたってほんと！？」

「ええ、残念ながらね。うちの馬鹿共が迷惑かけるわ」

言っててまた腹が立ってきたわ。

帰ってきたらあの赤馬鹿、どうしてくれようかしら。

「で、誰がついて行くのかしら？」

「僕と神裂は遠慮しとくよ。学園都市にこれといって用はないし、全員居なくなるってのもまたね」

「はい。案内はそこに倒れ伏している土御門を使って下さい」

「わたしは行くかも！」

じゃあ土御門君とインデックスね。

「じゃあ、最初の話題に戻るわよ。運転手は」

「「では私が」」

セイバーとライダーが立候補する。

いや、貴女達が騎乗スキル持つてるのは知ってるわよ。

でもね、免許が無いのはすこし困るのよ、うん。

「そうですか……では仕方が「私は持っていますよ」なっ、ライダー！？」

「ライダー、いつの間に？」

桜も知らなかったらしい。

本当にいつ、というかどうかやって取ったのよ。

「以前、普通に教習所に通って取得しました。意外と簡単に取れましたよ。最初は筆記試験が鬼門かと思いましたが、そちらもそれほど問題なく。あ、料金ならお小遣いから出しているので心配ありませんよ」

「「あー……そうなの……」」

桜と一緒に絶句。

最近どのサーヴァントもランサー並みに現代に適応してると感じるのは気のせいなのか、いえ、気のせいじゃないわ。

「く、やはり私も何か始めた方が良いでしょうか、シロウ……」

と、独り呟くのはセイバー。

外見上働くのが難しいので仕方ないのだが、可哀想に思えて止まない。

「じ、じゃあライダーね。もう一人は……」

「私が運転させていただきます」

セラか。

外見的にも問題ないし、後は、

「免許は？」

「勿論、所有しております」

「よし、後何かある？」

「無いですね」

「じゃあこれからすぐ出発するけど、神裂さん、貴方達にこの家は任せるから。藤村先生には……どうにか言っておいて」

「無責任ですね……」

「ま、僕達だけじゃ出来ないことがあったら教会のカレンとか言うシスターに聞くから、大船に乗ったつもりで言ってくるといいよ」

正直安心できないのだが、カレンから何かされてもそこはご愛嬌という事で。

よし、会議は終了ね。

「じゃあ、出発するわよ!」

居間を出て、勢い良く玄関の戸を開ける。

すでに用意してあったアインツベルンの車席に、一番乗りで座り込んだ。

「姉さん! ウェストポーチ忘れてまーす!」

「あれっ!?!」

腰にも手にも何も持っていなかった。

これだから、自分の性格が嫌になるのよ。

第二話 潜入！学園都市・出発！冬木市（後書き）

ということとで投稿完了。

製作時間は短いのに投稿まで長い…何故だ！

完全に怠けてます。本当に（ry

自分でも段々と慣れてきたのか、文字数が今までと比べて長くなっ
てきています。

成長してるのか、調子に乗ってるのか。

恐らく後者です、すみません。

あと今までの後書き見てて思ったのですが、ちょっと長い？

そうでしたら、これからは少し控えていきます。

雑談は活動報告の方にしていきたいと思います。

ではまた次回。

第三話 現地解散・ランサーと彼ら

——衛宮士郎 side

ゲートを潜り学園都市へ入る。

「凄い……」

口から漏れたのは、唯々感嘆するだけの言葉だった。
俺としてもそこまで語彙を持っている訳ではない為、一言ではこれ以外に表現しようがないのである。

例えるなら、ビルの森、コンクリートジャングル。

よくテレビなどで見える俺たちの世界の東京も相当なものだが、こちらのものは段違いだ。

何と言うか、技術の密度が違う。

昔、子供向けの絵本に登場した未来都市、これが一番近いのではないか。

「こりゃあすげえ、冬木じゃ一生拝めない景色だな」

言ったのはランサー。

確かに、一地方都市では何十年と見れそうにはない街並みである。

と、立ち惚けていると、何か筒状の機械が近付いて来た。

なんだこれは、下に何かモップみたいな物が付いているが。

「あ、それドラム型の掃除ロボですね」

街の掃除まで勝手にロボットがやってくれるのか。

上条によると、掃除のみならず警備や工業、農業でさえも自動化さ

れているらしい。

「ほう……。雑種とは言えここまで進歩するとはなかなかのものだ」
と言って、ギルガメッシュは一人歩き出す。

「おい、どこ行くんだ」

「宛てなどない。只この街を見て回るだけだ」

とことん集団行動を乱す野郎である。

いや、見て回るのは良いのだが、一人だけというのは如何なものか。
「ならオレもそうするわ」「ふむ、では私もそうするでしょう」

……駄目だこいつら。

いや、そもそもこいつらを律しようとして奮闘する俺が馬鹿だっただけの話か。

この三人を統率できる存在が、過去現在未来通して居るのだろうか。

「あーわかったわかった。俺は干渉しないから、変な騒ぎは起こすな。それだけ言うておく」

「「「ふん、貴様（お前）（坊主）に言われなくとも当然だ」」」

三者三様の返事をして、早速街に消えていったのだった。
さて、これからどうしようか……。

「とりあえず、俺の家にでも来ます?」

「……だな。じゃ悪いけど、案内頼む」

——Interlude in

それから暫く後、四つに分かれた一行の内、ランサーは第七学区を歩いていた。

流石学園都市と言ったところか、人工の灯りがそこら中に見受けられ、夜であるのに辺りはとても明るい。

学生の姿もちろはら見られるが、それに対して大人——教員や研究員——の割合がいつもより高いことから、既に勤務時間は過ぎている。

そしてここは第七学区の中でも飲食店が多い場所。

夕食を外で済ませようとする学生や、一日の終わりに乾杯している大人達が落ち着きなく行き交っている。

「ふう……。俺も何か食うかね」

独り呟き店舗を物色するランサー。

サバイバー宛ら生活していた冬木とは違い、ここには森も海もない。別に店で食事をするのが嫌な訳ではないが、俗に言う洒落た店は自分には似合わないと自覚しているので、近くに見付けた露店に入って行くランサーであった。

ふと見ると、ラーメンやおでんは勿論の事、定食やデザートなどもある。

まあ季節が季節だし、始め二つ以外はなかなか売上も伸びないだろ

うが。

この小さな屋台でよくそれだけのメニューをまかなえるな、と少し感心するランサーだった。

「大将、取り敢えず味噌ラーメンとビール」

「あいよ！」

注文しつつ垂れ幕を潜り座ると、既に三人の先客が居た。

上下ジャージ二名、ピンクの洋服の子供一名、皆女性だった。

「奇遇だな姉ちゃん達、隣良いかい？」

「あー？ 見ない顔だなー兄ちゃん。もしかして外の人間かー？」

一足先に酔っている様なので適当に相槌を打ちつつ会話する。

ところでそこで酒を飲んでいる子は未成年ではないのだろうか、誰も言わないので黙っておくが。

見ると、女の子っぽい一人を除き二人ともなかなかの美人である。色気の無い服装の為、一見そうは思えないが、ジャージの下からこれでもかという程に主張している胸も眼を見張るものがある。

「ちよい聞いてくれよ兄ちゃん。私さあ……」

と、身の上話を語り出す彼女。

友人らしい二人は別の話をしており、こちらの会話に参加する事はなさそうである。

話を聞く限り、彼女は教員らしい。

今預かっている子供の話だの、担任しているクラスの子の話しだの、スキルアウトとかいう不良共の事だのが入り混じり、支離滅裂にな

っている。

確実に分かるのは、彼女が子供達をととても大切に思っているという事だった。

「あいおまちっ！」

やっと来たラーメンを啜り、ビールを飲みながら、もはや何を言っているのか分からない彼女の話を聞き続ける。

……旨い。

上条当麻から聞いた話から食べ物にそんなに期待はしていなかったランサーだが、食べてみるとこれが存外に旨いのだった。

……………。

「ん…………？」

食べ終わって隣を見ると、彼女は寝てしまっていた。

「ありゃ」

話疲れたのか、単純に酔いが回っただけか、寝息を立ててすっかり寝てしまっている。

寝顔は安らかで、化粧もしていないのに何故ここまで綺麗なのかと疑問に思う程だ。

「お客さん、知り合いだろ？連れて行ってくれないかね」

「……仕方ねーか」

妙な誤解まで受けてしまったが、まあ良いだろう。

「美人な寝顔まで見せてもらったし、送ってってやるか。おい、姉ちゃん達？」

「はぁいー？」

子供っぽい方の女性に彼女を送る旨を伝え、住所を訊くランサー。……普通ならば見知らぬ男性を怪しむところなのだろうが、彼女も酔っているのだと一人勝手に納得するのだった。

とんとん拍子に話が進み、何故か自分の分の代金も負担してくれる事になった。

ここまで信用されると逆に不安になるのが人間の性なのだが、そこはランサー、気兼ね無く頷くのであった。

「おら起きろ。帰るぞ姉ちゃん」

「うー、私兄ちゃんみたいな男好きじゃんよー」

いつもなら言われて嬉しい台詞も、酔っ払いの口から出るのでは点数的に大幅ダウンである。

さて、と呟き、彼女を背負うのだった。

「ん……？」

彼女が眼を覚ますと、彼女も含め裕福層が住むマンションの眼前だった。

名をファミリーサイド、教員向け——一部非合法的な連中も利用しているが——の高級マンションである。

「何でここに……？」

「やっと眼え覚めたか」

「うわっ!？」

突然飛び退く彼女。

それもその筈、眼を覚ますと見知らぬ男に背負われているのだから、驚いて当然だろう。

普段からガサツな彼女だからこの程度で済んだが、普通なら不審者と間違われても仕方がない行動である。

そりゃあないんじゃないか、と肩を竦めるランサー。

彼は彼女に事の経緯を説明する。

「はあ……、少しばかり呑み過ぎたじゃん……。誰だか知らんがすまん」

「いいっていいって。俺も良い思いさせて貰ったしな」

けらけらと笑うランサーだが、どういう事かは彼女には伝わっていない様である。

主に顔とか、胸とか、尻とか、足とか。

勿論、口には出さないが。

「もう大丈夫だから、ここでいいよ。ほんと、今日はありがとな……」

「おっと。まだ足元がふらついてるぞ?」

「あ、ありがとう」

抱きかかえる彼、抱きかかえられる彼女。

普通なら良いムードになるのだろうが、彼らは気にしないだろう。
少なくとも彼女の方は。

結局その後、彼女を家の前まで送るランサーだった。

——Interlude out

——

——

——

——

——一方通行side

「ただいまー」

「やっと帰って来たか、黄泉川……って酒臭エンだよ！ どんだけ飲んできやがった!？」

「いやー、酔い潰れちゃってさー。気の良いお兄さんに送って貰っちゃって」

「何……?」

暗部が潰れて幾らか経つが、未だに自分の周囲の人間に近付く者を訝しむ癖は抜けない。

完全に学園都市の暗部が潰れたとは思えない為、暫くはこれを直そ

うとも思わないが。

「あら愛穂、貴女にしては珍しい、色のある話じゃない？」

「そうじゃんよー！いやー、旦那にするなら、あんな風に男らしくて腕っ節の強い奴が最高じゃん！」

「え、ヨミカワにそんな相手が！？ってミサカはミサカは驚愕してみたり」

「ぎゃは、ミサカも驚きー。ミサカの方が早く恋人できると思ってた位だし」

女性陣の会話を無視し、ベランダからマンションの入口を見下ろす。見付けるのは難しくなかった。

入口には、建物から遠ざかって行く男が一人だけ。

恐らくもなく、あれが黄泉川の言っている男だろう。

「アイツか……、——？」

何か、今眼が合った気がする。

見れば大人、学生でない以上能力者でもない為、こちらの勘違いであろが。

「……まア良いか」

俺に接触もせず、黄泉川にも異常はない。

アイツ自身に特に変な所も見受けられないし、これ以上は追及しない事にしよう——。

「おらアテムエら！うるせエぞ何時だと思つてやがる！」

……………。

ランサーはベランダに出て来た少年を見て、独り呟く。

「ガタイはねえが、あの眼……。なかなかヤバイ眼をしやがる」

とだけ言つて、再び夜路に眼を戻す。

彼の眼は、完全に獲物を見付けた時のそれであつた。

「面白れえ。また、ここに来る理由ができたぜ」

興奮しつつある体を沈め、次の暇潰しを探しに行くランサー。

まだ夜は長い。

学生の街とは言え、大人の夜はまだまだ終わらない。

一方通行と槍兵、これが最初の邂逅だった――。

第三話 現地解散・ランサーと彼ら（後書き）

はい、番外編第三話でした。

まずランサー編。

黄泉川いいよね、禁書キャラの中でもトップを争うくらい好きです。書いてて気付いたけど、桜といい黄泉川といい神裂といい、自分って巨乳が好きなんだけなんじゃ……と心配になるのです。

あ、月姫はシオンが好きです（彼女も巨乳……だと……
因みに、飲んでいたのは小萌、黄泉川、鉄装でアニメからの引用です。

一方通行との出会いは……伏線とだけ言っておきます。

この二人の戦いについては現在予定してません。
やると思いますが。

ではまた次回。

第四話 苦勞人…?・暗躍(弓兵)

——衛宮士郎side

「つ、着いた……」

かなり息が上がっている上条。

何故こんな状況になっているか、ついでに言うとな俺が全然疲れてないかというところ、上条の寮に着くまでに色んな人との接触があったからである。

最初から順に思い出していくと。

まず青髪にピアスをした青年に、土御門も含め学校を休んでいる事について責められる。

次は大人しそうな少女と性格のキツそうな少女二人——どうやら塾の帰りらしい——に絡まれ、同じ事を尋ねられる十段られる。今度は御坂の妹らしい少女にあって飼ひ猫談義……の筈だったが、何を間違ったのか何処からともなく彼女よりもっと幼い妹が現れ、軍用ゴーグルを盗った盗られたの大騒ぎ。保護者は何処だ保護者はやっとな寮が見えてきた……という頃に見つけたのは、大勢の不良に絡まれた女の子数人。

その後は言わずとも分かるだろう。

「なんつーか、苦勞してるな……」

「はは……。それにしても士郎さん、結構体力ありますね……。どうぞ」

まあ鍛えてるし、と適当に返事をしつつ開かれた玄関から中へ入る。これみよがしに狭いだの寝場所がだのネガキャンする上条はさて置

き、これからどうしようか。

「んー、あの人達が飽きるまでどっか見学でもしてます?」

「うへ、それっていつまでかかるんだ……?」

「じゃあとりあえず今日は休んで、第七学区をぶらぶらしますか」

Interlude in

一方、一行の内の一人アーチャーは、彼らと同じ第七学区にいた。

時刻は夜二時過ぎ、丑三つ時。

この時間帯に起きているものは、徹夜で何かをしている人間か、路地裏やコンビ二前にたむろしている武装無能力集団スキルアウトに類する者辺りだろう。

当然の様に一般生徒は寝静まっており、ここ風紀委員活動第一七七支部には風紀委員ジャッジメントの姿は見受けられない。

ここ居るのは、部外者中の部外者——学園都市の住人ですらない男、唯一人のみ。

「フ。情報は何においても基本。調べられるものは調べておくに限る」

細心の注意を払い、周囲を警戒する。

セキュリティの類は——霊体化すれば済むだろう。

「ふむ。侵入は成功か」

誰に言う訳でもなく独りごちるアーチャー。

言いながらも、異常はないか確かめる。

それを終えると、外に光を漏らさない様に窓をカーテンで締め切り、パソコンの電源を入れる。

普段は背の低い人が使っているであろう椅子の高さを調節し、デスクに向かって座ると、

「紅茶がいるな……。入れるか」

と呟いた。

何処に居ても、何処に置いても彼のポリシーは変わらない。

そう、『常に余裕を持って優雅たれ』とは、此方に来てからか、生前のものか……それは問題ではないが。

やるならスマートに、一昔前の、苦労を惜しまず頑張るというスタイルは彼の好みではないのだ。

「む、紅茶が切れそうだな。これでは気付かれてしまう」

紅茶の代わりを探そうと、冷蔵庫を開けたり、その近辺を探してみる。

見付かったのは、コーヒーマーカーと牛乳。

仕方ない、とぼやき、インスタントコーヒーを作り始めるのだった。

「さて——始めるか」

マグカップを片手に、背もたれに肩を預ける。

彼がここに来たのは他でもない——同盟相手の情報、特に上条当麻についての為だった。

「これだけの生徒を一举に管理しているのだから、総合的なデータベースが在る筈だ……」

まあ、ここからアクセス出来ない様であればお手上げだが、と自嘲する。

デスクトップから探していくと見付かるのは……。

「始末書用データが多いな……。余程問題があるのか——つと、
バンク書庫……これか」

身体を起こし、早速中を調べるアーチャー。

「イマジンプレイカー幻想殺しと言ったか。……載ってないな。彼ら自身もよく分からないと言っていたし、魔術でも超能力でも無いのだろう」

一応、『上条当麻』でも検索をかけたが、結果は同じ。只の無能力者としてしか表示されなかった。

「——まあ、ここに無いという事は、それ程あちらがひた隠しにしたいモノなのだろうが」

ならば、幻想殺しの本質とは何か。

多くの者は、異能の力を打ち消す事だ、と言う。
果たしてそれは正しいのか？

魔術の基本は等価交換だ。無から有を創り出す事は出来ないし、有を無に帰す事も出来ない、勿論例外は幾らでも存在しうるが。

……幻想殺しは、本当に異能を『打ち消している』のか？

それは文字通り『消去』なのか、只目に見えないだけで『霧散』させているのか、はたまた『吸収』？それとも『阻害』？

いや、或いは『調和』……。

「超能力でも魔術でもない、という点を考慮すれば……それは、我々の世界で言うところの『抑止力』——」

集合無意識による世界の安全装置。

『アラヤ』だの『ガイア』だのという括りはあるにしろ、『調和』という点を挙げると共通点が見受けられる。

片や、生命延長、破滅回避の為、世界に対する滅びの要因を抹殺する、見えない力。

片や、世界に蔓延る『異能という異常』を消し去り、平均化させる、正体不明の力。

こう考えれば、似ていると言えば似てる。だが異なる点など幾らでもある。

まあ結論から言うと、何れも推測の域を出ない、という事だ。

「——ふん、結局何も解らず終いか。まあ良いだろう」

ここで全て解るなど、最初から思っていない。

開いていたプログラムを、痕跡が残らない様に全て閉じる

ぐいっ、と僅かに残った大して旨くもないコーヒーを飲み干し、席を立つアーチャー。

「誰の物かは分からないが、拝借した以上、洗わねばな」

と、歩き出したその時。

「なっ……！ この音はセキュリティが解除された音か！？
い……ッ！」

急いでマグカップを濯ぎ、元の位置へ戻す。

霊体化して様子を見てみると、電気を付け入ってきたのはメガネの少女だった。

（歳は凜と同じ位か……一部分以外。――ふ、口には出せないな、殺される）

内心軽口を叩きつつも、異常が気付かれないか慎重深く伺う。

「あったあった。いやー、支部に課題忘れるなんてどうかしてるわね、私も」

良かった良かった、と独り言を言いつつ、持ってきた学生鞆らしきものに書類を入れる女生徒。

どうやら気付かれていないらしい。
胸を撫で下ろす……のだが。

「あれ？ カーテン閉まってるじゃない」

「――――」

「もう……。二人にちゃんと注意する必要があるわね」

と、言葉を残して、彼女は去っていった。

当然の如く、電灯は消して。やる事はすっかりやるタイプらしい。

「やれやれ……コーヒーマーカーの方には気付かれなかったか。彼女の言葉にあった二人とやらに、感謝するべきだろうな、ここは」

皮肉気に笑みを浮かべると、後片付けを開始する。

ガタッ

「――ッ!? ……いかな。どうも私には、隠密活動は向かないらしい」

情けないな、と付け足す。

冷や汗を浮かべながら、不貞腐れる様に呻くアーチャーだった。

――

少しばかり時は流れ、深夜四時。

夜が浅い季節なら明け方もかくやという時間帯だが、生憎今は冬。まだまだ深海の如き夜の闇は、学園都市全体を抱きかかえている。

そこに、上下黒のシャツ・スラックスに身を包み、肌も黒い男が道を歩いていた。

因みに、先程の支部での彼の服装は、霊体化の為いつもの鎧だった。もし仮に見付かっていたら、通報されてもおかしくない格好であったのは言うまでもない。

そんな彼が見つけたのは、ある一つの建物。

道には人っ子一人いない為、周りをはばかり事なくアーチャーが呟

く。

「これは……」

第七学区に存在する、謎の建物。

……ある能力者の話によると、この建物はそもそも建物などではないらしいが。

噂では、どんなに能力を使おうが、強力だろうが傷一つつかず、核兵器にすら耐えうるらしい。

扉はおろか、渡り廊下も、階段も、地下道も、通気口も、外部からの配線すらない。

中に入るには、まず『案内人』とコンタクトを取る必要がある。

通称——『窓のないビル』。

「これはまた、妙な建物だな。どれ——」

霊体化して入ろうとする、が——入れない。

例えるなら、柳洞寺の結界か。こちらはより強力なものだが。

侵入を妨げるのではなく、単純に拒んでいる。

善性であれ悪性であれ、霊格が高かろうが低かろうが関係なく、来る者全てを拒んでいるのだ。

「科学の結晶とも言える街に、神秘の産物があるとはな……。やはりこの街には——」

何か秘密がある。

『上』の連中が必死になって隠そうとしている何か。

それに多かれ少なかれ、『幻想殺し』が関与しているのは間違いないと思って良いだろう。……本人の意思は別にして。

第七学区でも一際高い『窓のないビル』を見上げて、独り。

「――面白い。悪いが私は性格が悪く物好きでね。関心の続く限り探らせてもらおう」

ビルに背を向け、弓兵は暗い無名の闇に消える。

冷笑なのか、挑発なのかは分からない。

それはビルを見上げて言ったのか、見えぬこの街の主を見越して言ったのか、それも定かではない。

しかしもしかするとこれは、アーチャー アレイスター彼から彼への、たった一度の『宣戦布告』だったのかもしれない――。

――Interlude out

第四話 苦勞人…？・暗躍（弓兵）（後書き）

明けましておめでとう&第四話です。

挨拶の方は二度目の人も居るかもしれないけど、とりえずしてみた。
初めてだって人は、短編の方もよろしくです。

暗躍する人達その壺。

式はそのうち書く、きつと土御門。

また伏線＋格好付けたセリフを書いてしまった……。

大して公開してないので次もやると思います（テヘペロ

……すいません。

だって締めは格好良い方がいいじゃん。

みんなもそうだよね？

あ、ビルの設定は独自ですので、遅いけど注意。

ではー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5329t/>

人を救った偽善者と人を殺した正義の味方

2012年1月8日02時49分発行